IUIC 2

岩手大学 国際交流センター 報告

第2号

岩手大学国際交流センター

2006年7月

目　次

ー巻頭言ー

「国際交流センターの役割と国際化戦略の必要性」
国際交流センター長　堀江 皓 ------- 1

ー研究ノートー

「地域在住外国人移住者の言語課題」　松岡洋子 ------ 3

ー教育部門 報告ー

日本語特別コースおよび国際交流科目日本語科目実施報告 ---------- 11
日本語研修コース実施概要 ---------- 17
全学共通教育科目(日本語) ---------- 20
全学共通教育科目(日本事情) ---------- 21
国際交流科目実施報告 ---------- 24
夏季休暇日本語補講報告 ---------- 27
日本語・日本文化研修コース ---------- 28
日本語・日本文化研修生修了レポート作成報告 ---------- 29
韓国群山大学サマースクール日本語クラス報告 ---------- 31
理工系留学生教育・指導について ---------- 33
平成 17 年度外務省長期青年招聘事業研修報告 ---------- 35
平成 17 年度前期日本語研修コース、日本語・日本文化研修コース修了発表会 ---------- 37
平成 17 年度後期日本語研修コース・短期プログラム終了発表会 ---------- 38
ネットアカデミー日本語版使用報告 ---------- 39
日本語学習支援ネットワーク会議 in IWATE 実施報告 ---------- 42

ー国際企画部門他 報告ー

平成 17 年度岩手大学 UURR プロジェクト報告 ---------- 47
短期留学プログラムによる受け入れ・派遣 ---------- 53
米国アーラム大学サイスプログラム関連事業報告 ---------- 55
群山大学サマープログラム ---------- 60
石河子大学学生派遣プログラム実施報告 ---------- 66
石河子大学学生受け入れプログラム実施報告 ---------- 70
石河子大学日本語教師派遣事業報告 ---------- 72
海外派遣のための語学支援 ---------- 74
海外留学情報提供 ---------- 75
国際交流センターの広報関係活動報告 ---------- 76
進学説明会 ---------- 80
タマサート大学生との交流会報告 ---------- 82

ボランティアチューター・会話パートナー制度 ---------- 83
国際交流会館活動記録 ---------- 84
留学生実地見学旅行報告 ---------- 88
平成 17 年度岩手大学外国人留学生スキー研修 ---------- 89
北東北国立大学法人 3 大学外国人留学生合同合宿研修会報告 ---------- 90

－資料－

国際交流センター組織図 ---------- 93
平成 17 年度留学生関連行事 ---------- 94
外国人留学生集計表 ---------- 95
外国の大学との交流協定 ---------- 97
平成 17 年度岩手大学海外派遣・留学プログラム一覧 ---------- 99
平成 17 年度海外学生派遣実績 ---------- 100
岩手大学留学生地域派遣実績一覧 ---------- 101

国際交流センターの役割と国際化戦略の必要性

堀江 皓（岩手大学国際交流センター長）

岩手大学国際交流センターはそれまでの留学生センターを発展的に解消して、平成 16 年 4 月 1 日の国立大学の独立行政法人化への移行と同時に設置されました。これは法人化への移行に伴い、本学教育研究支援施設の一層の機能強化を図るために行われた組織再編の一環で、国際交流センターの場合は国際交流活動を強化することが目的です。すなわち、外国人留学生の受け入れと日本語教育および生活支援等、従来留学生センターが行っていた業務に、外国大学との交流協定の締結、外国人研究者の受け入れや本学教職員の海外派遣等のこれまで研究協力課で行ってきた国際交流活動業務を一元化するためです。

科学技術・学術審議会国際化推進委員会の「科学技術・学術分野における国際活動の戦略的推進について」の報告書(平成 17 年 1 月)によれば、21 世紀の「知」をめぐる世界大競争の時代に対応し、我が国の取り組むべき課題を解決するためには、従来の「国際化の推進」から「国際活動の戦略的推進」へと政策概念を発展させ、国としての国際活動に対する戦略的な考え方を明確にし、これに基づき、アジア諸国との連携、国際的研究人材の養成、国際活動基盤の強化を推進する必要があるとしています。本学でも今後、全学を挙げて「岩手大学の国際化戦略」を策定し、それに基づいた教育、研究、環境および大学構成員の国際化を図っていく必要があると思われます。

岩手大学では、平成17年3月に国際化に関する基本構想を策定し、本学における国際化の行動計画として、教育(留学生の受け入れ、外国大学への派遣、カリキュラムの国際化)、研究(研究者交流、国際的学会活動)、国際社会への貢献(外国大学との共同研究、国際協力機関を通じた貢献)、地域社会への貢献(UURR国際共同交流事業プロジェクトの推進、地域社会との交流)および国際化のための基盤整備(教職員、予算、危機管理、広報)等の項目を挙げています。

これに基づいて国際交流センターでは、国際教育部門、国際企画部門(含むUURR部門)を設けて業務に当たってきました。なお、UURR(University - University & Region - Region)とは国際共同交流事業プロジェクトで、国際学術および国際産業技術交流活動を展開するために、岩手大学および連携地域の研究成果を中国の大学およびその連携地域に技術移転するために平成16年4月に発足した学長特命のプロジェクトです。

本報告書は、平成17年度の国際交流センターの各部門の活動をとりまとめたものですが、センター運営に関する忌憚のないご意見と、センターに対する一層のご支援をお願いいたします。

地域在住外国人移住者の言語課題

松岡洋子（岩手大学国際交流センター）

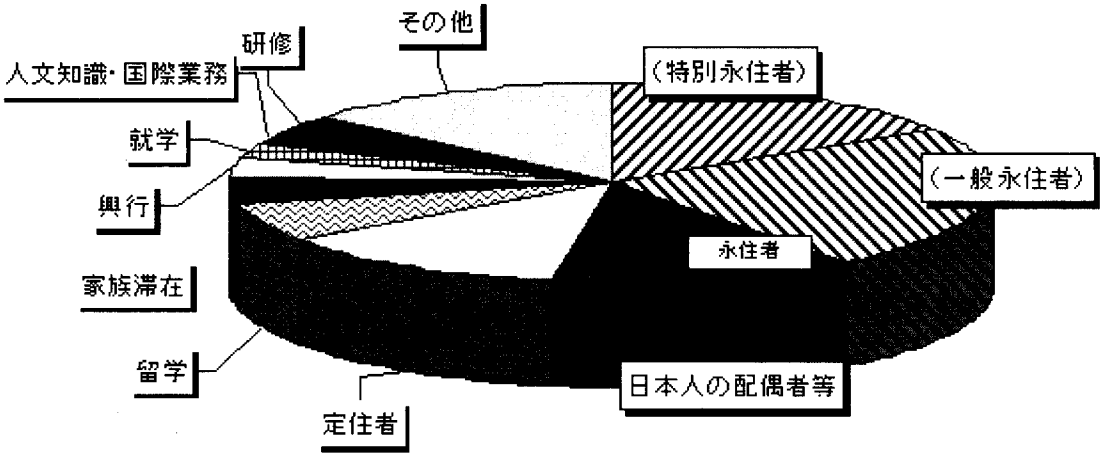
1. 地域在住外国出身者とは

日本の外国人人口は 2004 年現在約 197 万人で総人口の約 1.5%を占める。戦後外国籍人口の大半を占めていた特別永住者（日本の旧植民地出身者とその子孫）は年々減少する一方、新来外国人は急増し、その割合も逆転している。外国出身者の居住地域も全国各地に広がり、都市部だけでなく農村でもその姿を見ることが珍しくなくなってきた。

1980 年代から技術研修・技能実習生や中国残留帰国者とその家族が、また、1990 年の出入国管理及び難民認定法改定以降、日系人労働者や配偶者など多くの外国出身者が日本各地に定住するようになった。技術研修・技能実習制度は産業界からの要請により作られたが、特に中小企業が安価な労働力を得る方策として利用されている。同じく、日系人に対して与えられている「定住」滞在許可についても、血統主義に基づいた単純労働者の獲得手段となっている。フィリピン、中国、韓国などからの外国人配偶者が斡旋業者や知人の紹介などによって、いわゆる「嫁不足」の農村地域に多く移住している。定住者、外国人配偶者数はそれぞれ 25 万人を超えている。

技術研修・技能実習生の滞在は最長3年間であるが、その他の外国出身者は相当期間滞在するか、または永住の可能性が高い。さらに、国際結婚により生まれる複文化の子どもたち、あるいは帰化などによって、国籍は日本人であっても移民的背景を有する人口の増加が顕著になっている。

平成 16 年末現在における在留資格別の割合



法務省入国管理局平成 16 年度統計資料より

2. 移住者と受け入れ社会との関係

移民国家である、オーストラリア、カナダなどでは、移住の条件として英語力が挙げられ、一定の言語習得支援も実施されている。一方、日本政府は、インドシナ難民、中国帰国者とその家族に対して、一定期間の日本語教育をはじめとする定住促進支援を実施してきたが、日系人や配偶者等の移住者に対しては公的な日本語教育、定住支援は行っていない。技術研修生・技能実習生についても日本語教育を始めとする受け入れ条件の整備が不十分なケースが多く、研修生・実習生たちは地域社会から隔離されている。そのため、日本語力、日本社会に関する知識の不足を起因とする近隣授受民とのトラブルや労働、教育分野での社会参加困難等の問題がある。これらの問題は外国出身者の側に一方的に原因があるのではなく、受け入れる側の日本社会にも偏見や差別、無関心等があることが指摘されている。

2006年3月に総務省は「多文化共生推進プログラム」を発表した。このプログラムは以下のような項目で構成されている。

1)コミュニケーション支援(情報の多言語化、日本語・日本社会学習支援)

2)生活支援(住居、教育、労働環境、医療・保健・福祉、防災など)

3)多文化共生の地域づくり(意識啓発・外国人住民の自立と社会参画)

4)多文化共生施策の推進体制整備(自治体の体制整備、役割分担と連携・協働)

上記のような提言から、政府はこれからの日本社会を多文化共生社会として体制を構築し、多様な文化背景を有する住民が自立的に社会参画することを標榜していることが窺える。一方、法務省は 2006年 5 月に、日系人労働者を定住者として受け入れてきた制度を見直し、総人口の3%まで外国人の受け入れを行うこと、技術研修・技能実習制度を廃止し、就労を希望する外国人に一定の日本語能力を求める試案をまとめた。ここ数年で FTA(自由貿易協定)によりフィリピンから看護、介護分野の人材導入が具体的に計画され、タイ、韓国、マレーシアからも専門職を持つ高度人材の受け入れを求める意見が相次いでいる。少子高齢化を迎えた日本は労働人口の確保を外国人労働者に頼らざるを得ないとの指摘が経済界からも繰り返しなされており、また、非婚化、晩婚化が進む現状では外国から配偶者を迎える流れも当分続くことが予想される。単に先進国に途上国からの労働人口が流入し、その受け入れを調整するということではなく、日本社会が存続するために、外国からの移住者受け入れのための検討を迫られる局面にあるといえよう。

そこで、次項では日本と同様移民国家ではないものの、近年移民が急速に増加し、対応策を講じたドイツ、フランス、韓国の事情を紹介する。

3. 移住者に対する各国の施策

3.1 ドイツ

ドイツには2005年の統計資料によると約670万人の外国人が居住しており、これは総人口の9%近くを占めている。ドイツでは長年外国人労働者をガストアルバイター、つまり、帰国を前提とした流動労働力として受け入れてきたが、実際には家族が呼び寄せられ定住化が進んだ。ドイツも日本と同様に少子高齢化が進み、社会を持続させるために外国人の受け入れが不可避だと考えられている。しかし、移住

者家族の労働、教育などの分野での社会統合が進まず、高い失業率が社会福祉予算を圧迫しているというドイツ人の不満が高まってきた。移住者の社会統合が遅れた大きな理由として挙げられているのが、ドイツ語力の低さである。ドイツ連邦政府は新移民法施行数年前から外国人移住者の社会統合を推進しはじめ、ドイツ語習得支援、職業訓練、青少年活動、移住女性教育、ドイツ人に対する異文化コミュニケーショントレーニングなどのさまざまな分野での自治体、市民団体による活動を支援してきた。2003年および2005年には外国人住民の社会統合促進を目的とし、連邦内務省と民間財団との共催で自治体の移民社会統合事業コンテストが実施され、モデル事業の普及に努めた。このような状況の中、2005年1月に新移民法が施行され、ドイツは合法的移民の受け入れに踏み切った。新移民法では、連邦政府内務省の下部組織として設置された連邦難民移民局により、統合コースと称するドイツ語およびドイツ事情オリエンテーション教育が実施され、新移民にはドイツ語力、ドイツ事情知識についての試験を課すこととなった。ドイツ語能力試験についてはヨーロッパ言語試験機関(ALTE)が設定した言語共通参照枠組み(Common European Framework of Reference for Languages=CEF)のB1レベルを求めている。

3.2 フランス

フランスでの「移民」とはフランス以外の国で生まれたフランス国籍を持たない長期滞在者であり、国籍取得法が生地主義をとっているために外国人でもフランスで出生した者はフランス人となる。現在フランスの外国人人口比率は約 7%と言われるが、以上のような理由のため実際の外国人移住者人口は把握できない。

フランスでは2006年5月、新移民規制法案が可決された。この法案の基本姿勢は学歴、職業上の能力、政治観、宗教的信条などにより移民を選別するというものである。フランスではここ 10 数年、不法移民に対する規制が厳しくなっているが、フランスの単純労働は移民で支えられていると言われ、新法は「移民の使い捨てだ」という世論の反発も招いている。新法では、入国の前提条件として「同化契約」が義務付けられ、ドイツの新移民法と同様にフランス語能力試験を課すことが検討されている。この能力試験は先にドイツの言語能力設定で見たCEFのA1レベルよりも簡単なものが想定されていると言われ、フランス社会で移住者が自立的に生活するためには十分なものとは言えないと言語学者などから指摘されている。フランスでは、多文化共生という概念は薄く、フランス社会に融合することがフランスの構成員として求められている。しかしながら、これまでフランスでは移住者に対するフランス語教育には非常に消極的で、民間レベルの支援団体等により細々とフランス語学習支援が行われてきただけである。この新法施行により第二言語としてのフランス語教育の新たな動向が注目される。

3.3 韓国

韓国はかつて移民送り出し国であったが、1980年代後半のソウルオリンピックを契機に急速な経済成長を遂げ、途上国からの移住労働者が大量に流入し、外国人の不法就労が社会問題化した。その後、日本の制度を参考とした技能研修制度が実施されたが、産業界からの要請により合法的な労働力の確保を目的として外国人雇用許可制が 2004 年より実施された。この新雇用許可制は韓国と送り出し国の

2 国間協定による外国人労働者の計画的受け入れ制度で、フィリピン、スリランカ、モンゴル、インドネシア、ベトナム、タイの 6 カ国との協定でスタートした。雇用許可制では、送り出し国において基礎的な韓国語試験を実施し、韓国企業は合格者を 3 年間雇用することができる。新制度において韓国語能力試験が実施された理由は、労働者が韓国語を理解しないために、労働者の安全、権利が守られないことが多く、韓国語の基礎力が不可欠だと判断されたためと言われている。しかし、2005年に実施された試験に合格し韓国に渡航した労働者は、簡単な挨拶程度の会話にも不自由し、ハングルもほとんど読めないというケースが見られ、現行の能力試験の合格者の韓国語運用力では不十分だという指摘がある。この試験の内容は、ヨーロッパの共通枠のような基準に基づいて作成されたものではなく、既存の韓国語教材等を参照して作成されたということである。試験作成機関の担当者の話によると、他国の試験等を参考に今後改定が行われる可能性もあるということである。試験結果と合格者の能力の関係、送り出し国での韓国語教育のあり方も含めて、今後検討が重ねられるであろう。

4. 移住者に必要な言語能力

前項で概観した3カ国の移住者政策は、人口減少、少子高齢化を迎えた日本社会にとって示唆に富むものである。注目すべきは、いずれの国も言語能力を移住者に対して求めている点である。現在、日本に定住する大多数の外国出身者は滞在条件に日本語力を求められることもなく、日本語教育を受ける機会も保障されない。また、就労、教育、社会保障などの場面における多言語情報提供の整備も進んでいない。そのため、移住者は住民、労働者としての権利、義務について十分な情報が得られず、不利益を被り、社会参加を阻害されている状況がすでに見られる。田村(2000)は外国人が地域社会で生活する上でぶつかる 3 つの壁(「ことばの壁」「制度の壁」「心の壁」について指摘した。先述した総務省の「多文化共生推進プログラム」の提言はこのような状況を受け、その改善を目指して作られたものである。また、日本経済団体連合(経団連)では総務省の提言以前の 2004 年に「外国人受け入れ問題に関する提言」を、また、2005 年に「『第 3 次出入国管理基本計画における主要な課題と今後の方針』に対する意見と要望」をそれぞれ発表している。経団連の提言、意見書では日本に有用な外国人労働者の受け入れの推進とともに、現在、問題化している長期滞在外国人の教育、保険、地域住民との共生について、自治体だけでなく、国、企業で対応するよう求めている。その具体的な項目のひとつとして、日本語教育の充実、多様化を挙げている。

このように、言語能力は移住者が社会参画する上で重要なものと捉えられているが、移住者を対象とした第二言語としての言語教育内容、方法についてはドイツやフランスなど移住者の多い国でも整備が遅れており、日本語教育についても実践、研究ともここ数年、課題として取り上げられるようになったところである。

先述したヨーロッパ言語試験機関の CEF のような基準の検討が日本語でも始まっている。第二言語としての日本語能力とは、言語知識だけでなく、言語運用力を有することを意味する。すなわち、日本語を使って、日本社会に参加し、日本人と相互交渉する能力のことである。CEF の言語観では、複言語環境にあって、さまざまな能力を使い分けて効果的なコミュニケーションをすることが重要だと捉えられている。多言語、多文化状況で相互の言語と文化を理解し、他の言語、文化に対し寛容になり、必要な

課題を遂行するための言語能力のモデルは母語話者ではないと捉える。

〈CEF 参照レベル〉

熟達した使用者	C2	Mastery	聞いたり、読んだりしたほぼすべてのものを用意に理解することができる。いろいろな話し言葉や書き言葉から得た情報をまとめ、根拠も論点も一貫した方法で再構成できる。自然に、流暢勝つ正確に自己表現でき、非常に複雑な状況でも細かい意味の違い、区別を表現できる。
	C1	Effective Operational Proficiency	いろいろな種類の高度な内容のかなり長いテクストを理解することができ、含意を把握できる。ことばを捜しているという印象を与えずに、流暢に、また自然に自己表現できる。社会的、学問的、職業上の目的に応じた、柔軟な、しかも効果的な言葉遣いができる。複雑な話題について明確でしっかりとした構成の詳細なテクストを作ることができる。その際テクストを構成する軸は接続表現、結束表現の用法をマスターしていることがうかがえる。
自立した使用者	B2	Vantage	自分の専門分野の技術的な議論も含めて、抽象的かつ具体的な話題の複雑なテクストの主要な内容を理解することができる。お互いに緊張しないで母語話者とのやり取りができるくらい流暢かつ自然である。かなり広汎な葉煮の話題について、明確で詳細なテクストを作ることができ、さまざまな選択肢について長所や短所を示しながら自己の視点を説明できる。
	B1	Threshold	仕事、学校、娯楽で普段出会うような身近な話題について、標準的な話し方であれば主要点を理解できる。そのことばが話されている地域を旅行しているときに起こりそうな、たいていの事態に対処することができる。身近で個人的にも感心のある話題について、単純な方法で結び付けられた、脈絡あるテクストを作ることができる。経験、出来事、夢、希望、野心を説明し、意見や計画の理由、説明を短く述べることができる。
基礎段階の使用者	A2	Waystage	ごく基本的な個人的情報や家族情報、買い物、近所、仕事など、直接的関係がある領域に関する、よく使われる分野表現が理解できる。簡単で日常的な範囲なら、身近で日常手の事柄についての情報交換に応ずることができる。自分の背景や身の回りの状況や、著癖知的な必要性のある領域のこと側を簡単なことばで説明できる。
	A1	Breakthrough	具体的な欲求を満足させるための、よく使われる日常的表現と基本的な言い回しは理解し、用いることができる。自分や他人を紹介することができ、どこに住んでいるか、誰と知り合いか、持ち物などの個人的情報について、質問をしたり、助け舟を出してくれるなら簡単なやり取りをすることができる。

吉島・大橋(訳・編)2004:p.251 より ©Goethe-Institut Tokyo

これらの基準で、ドイツでは B1レベル、すなわち自立した言語使用者になることを移住者に求める一方、フランスでは A1以下のごく基礎的な口頭能力を移住条件に課す。日本政府が今後、外国からの移

住労働者等を合法的に受け入れる際、必要な日本語能力の基準を設定し、日本語教育を政策的に実施することが予想される。日本に移住する外国出身者にはどの程度の日本語力が必要となるか、CEFの基準を移住者の特性に応じて検討することも可能であろう。

5. 地域在住外国出身者の言語課題と研究機関の役割

前項で述べたとおり、移住外国出身者が必要な言語能力とはなにか、それをどのように移住条件として課すか、あるいはどのように習得支援を行うかについて、日本は早急に対応しなければならない段階にある。移住外国人に必要な言語能力とその評価法については国立国語研究所が2006年度から調査研究を開始した。また、文化庁ではここ数年、地域日本語教育の推進のため、調査研究、ボランティア研修の開催、地域の日本語教室モデル事業などを実施している。さらに、文部科学省では外国人児童生徒の教育環境整備に向け、2006年度から外国籍児童生徒の不就学状況調査を開始するなど、政府関係機関の具体的な動きが始まっている。

一方、大学でも地域在住外国出身者の言語課題分野で地域に対する知的貢献の役割を果たす動きが見られる。大学等で行われている日本語教育実践、研究は、これまで留学生対象のアカデミックな分野の日本語教育、あるいは海外の高等教育機関対象の日本語教育が中心となっていた。しかし、ここ数年、移住者対象の日本語教育に関する研究が取り上げられるようになってきており、学会、研究会等での発表が増加している。また、大学が地域在住外国人対象の日本語教育に関わる人材育成、研修会を実施するケースも現れている。岩手大学国際交流センターでは、平成17年度から地域貢献事業の一環として「日本語学習支援ネットワーク会議」を主催し、岩手県ならびに東北地区の日本語学習支援活動に関わる団体、個人の情報交換、研修の場を提供することになった。平成17年度は岩手大学を会場に、岩手県内はじめ東北一円の関係者が参加してのシンポジウム、分科会が行われた。これを受け、平成 18 年度は岩手県内での公開講演会、ならびに仙台市を会場とした複数団体共催のシンポジウムを計画している。また、筆者自身は財団法人岩手県国際交流協会の主催する日本語学習支援者研修事業に講師として平成 11 年度から協力し、移住者の言語習得施策についての調査研究を継続している。これらの研修、研究活動においては移住者の言語能力とその習得だけでなく、受け入れ社会の体制、意識の重要性についても強調している。上述したような調査、研究成果を活用し、地域で増加が予想される外国人移住者の言語課題に対し、1)最新の情報発信、2)関係機関等の調整、3)言語習得支援法と教材整備、4)地域住民に対する啓発活動といった点について、研究機関は積極的な役割を果たすべきである。

＊ この研究は日本学術振興会科学研究費補助金(基盤研究(B)(1) 課題番号 16320069 研究課題「移住者と受け入れ住民の多文化的統合を視座とした共通言語教育」研究代表者:松岡洋子 平成16年～19年度)により実施中である。

〔参考文献〕

駒井洋監修・小井戸彰浩編著(2003)『講座 グローバル化する日本語移民問題 第1期 第3巻

移民政策の国際比較』(明石書店)
田村太郎(2000)『多民族共生社会　ニッポンとボランティア活動』(明石書店)
ヒダシ・ユディット(2004)「EU 統合化にみる新たな多言語政策－多文化共存とアイデンティティの相克－」『異文化コミュニケーション研究第16号』(神田外国語大学)
文化庁文化部国語課(2003)『諸外国における外国人受け入れ施策および外国人に対する言語教育施策に関する調査研究報告書』
松岡洋子(2005)「韓国の移住外国人に対する韓国語施策および支援事情」『日本言語政策学会第7回研究大会予稿集』(日本言語政策学会)
松岡洋子・足立祐子(2006)「移住外国人に対する第二言語学習の内容比較」『異文化間教育学会第 27 回大会予稿集』(異文化間教育学会)
吉島茂・大橋理枝(他)訳・編(2004)『外国語教育Ⅱ　外国語の学習、教授、評価のためのヨーロッパ共通参照枠』(朝日出版社)

〔参照 URL〕
ドイツ連邦新移民法　Immigration Law and Policy　http://www.bmi.bund.de
移住外国人のコミュニケーションのための言語政策に基づく共通言語教育／移住者と受け入れ住民の多文化的統合を視座とした共通言語教育　http://kyotofle.sakura.ne.jp/Kaken_Iwate/
法務省入国管理局　http://www.immi-moj.go.jp/
独立行政法人労働政策研究・研修機構　http://www.jil.go.jp/
文化庁　http://www.bunka.go.jp/
文部科学省　http://www.mext.go.jp/

日本語特別コースおよび国際交流科目日本語科目実施報告

1. 概要

国際交流科目日本語科目は初級、中級の各2レベルの授業14科目が提供されている。対象は短期留学特別プログラム等の交換留学生で、単位取得が可能である。

一方、日本語特別コースの対象は単位取得を目的としない全学の外国人留学生で、定員に余裕のある場合には研究員およびその家族も受講が可能である。国際交流科目日本語科目は日本語特別コースの初級、中級レベルを兼ね、全学共通科目日本語科目は日本語特別コースの上級レベルを兼ねて開講されている。すなわち、初級、中級レベルの授業では、国際交流科目または特別コースとして履修する学生が、上級レベルの授業では全学共通教育または特別コースとして履修する学生が混在する形で授業が進められている。

2. 受講までの流れ

受講希望者は、毎学期はじめに実施されるオリエンテーションへの参加が義務づけられている。オリエンテーションでは英語および中国語の通訳を介した説明を行っており、今年度は尾中教員(英語)、国際課の崔職員(中国語)の通訳協力を得た。コース概要、履修方法等を 30 分程度説明し、「受講申込書」の提出を求めた。その後、クラス決定のためのプレースメントテストを実施した。前学期からの継続受講者は前学期の成績によって日本語能力が把握できているため、プレースメントテストは免除した。プレースメントテストの結果は翌日朝に国際課掲示板にて発表し、学生はその結果に基づき、受講科目を選択する。研究生、大学院生には指導教員の承認を得るため「受講承諾書」の提出を求めた。平成 17 年度オリエンテーションは以下のように実施した。

＜前期＞

4 月 5 日(火) 13:30-15:00　学生センターG41教室　参加者 16 名

4 月 7 日(木) 13:30-15:00　学生センターG41教室　参加者 5 名

＜後期＞

10 月 5 日(水) 13:30-15:00　学生センターG41教室　参加者 20 名

10 月 7 日(金) 13:30-15:00　学生センターG41教室　参加者 7 名

なお、諸事情によりオリエンテーションに参加できない受講希望者、および学期途中に来学した受講希望者に対しては担当教員が個別に対応した。今年度は特に外国人研究員が学期の途中

から受講を希望する例が多く、その都度対応したが、授業進度と受講者の日本語力との関係上、通常のクラスとは別にボランティアに対応を依頼したケースもあった。

3. 授業概要

3.1 開講クラス

初習者対象の「日本語初級Ⅰ」、初級前半修了(約 150 時間程度学習した者)対象の「日本語初級Ⅱ」、初級修了程度(約 300 時間程度学習した者)対象の「日本語中級Ⅰ」、中級前半修了(約 450 時間学習した者)対象の「日本語中級Ⅱ」、中級修了(約 600 時間程度学習した者)対象の「上級日本語」の5レベルの授業を毎学期提供している。初級では、基礎的な言語形式の習得を中心とし、中級では 4 技能別、機能別に授業が構成されている。先述したように、初級、中級レベルの授業は国際交流科目日本語科目と日本語特別コースを兼ねて開講している。授業概要は以下の通りである。

＜日本語特別コース科目一覧＞

レベル	科目名	内　容	コマ
初級Ⅰ	日本語初級Ⅰ 総合	初めて日本語を学習する人が対象。初歩的な文法、語彙等についての知識および日常生活に必要なごく基本的な会話および読み書きの技能の習得を目指す。 テキスト:『みんなの日本語初級Ⅰ』(スリーエーネットワーク)	6
初級Ⅱ	日本語初級Ⅱ 総合	日本語を 150 時間程度学習した人が対象。初級後半の文法、語彙等についての知識および日常生活に役立つ会話および読み書きの技能の習得を目指す。 テキスト:『みんなの日本語初級Ⅱ』(スリーエーネットワーク)	4
	日本語初級Ⅱ 漢字	初級後半レベルの漢字 500 字程度の習得を目指す。 テキスト:『BASIC KANJI BOOK Vol.2』(凡人社)	1
中級Ⅰ	日本語中級Ⅰ 総合	初級修了者が対象。大学生活(研究室、授業等)に必要な日本語の会話技能および中級レベルの文法・語彙の知識の習得を目指す。 テキスト:『現代日本語コース中級Ⅰ』(名古屋大学出版会)	2
	日本語中級Ⅰ 会話	成人として日常生活、大学生活に必要な会話技能の習得を目指す。 テキスト:『なめらか日本語会話』(アルク)	1
	日本語中級Ⅰ 読解	アカデミックな文章の基礎読解力の習得を目指す。 テキスト:『大学・大学院留学生の日本語1読解編』(アルク)	1
	日本語中級Ⅰ 作文	アカデミックな文章(レポートなど)の作成能力の習得を目指す。 テキスト:『大学・大学院留学生の日本語1作文編』(アルク)	1

	日本語中級Ⅰ 漢字	中級前半レベルの漢字 300 字の習得を目指す。 テキスト:『INTERMEDIATE KANJI BOOK Vol.1』(凡人社)	1
中級Ⅱ	日本語中級Ⅱ 総合	中級前半修了者が対象。大学生活(研究室、授業等)に必要なより高度な日本語の会話技能および中級レベルの文法・語彙の知識の習得を目指す。 テキスト:『現代日本語コース中級Ⅱ』(名古屋大学出版会)	2
	日本語中級Ⅱ 読解・漢字	より高度なアカデミックな文章の読解力の習得を目指す。 テキスト:ハンドアウト	1
	日本語中級Ⅱ 作文	より高度なアカデミック文章(レポート、小論文等)作成能力の習得を目指す。テキスト:『留学生のための論理的な文章の書き方』(スリーエーネットワーク)	1
	日本語中級Ⅱ 理系日本語	理系学生に必要な基礎的な語彙、文型等の知識の習得を目指す。 テキスト:ハンドアウト	2
	日本語中級Ⅱ 文系日本語	文系学生に必要な基礎的な語彙・文系の知識の習得を目指す。 テキスト;ハンドアウト	1
上級	上級日本語 口頭表現	大学生活に必要な高度な口頭表現力の習得を目指す。 テキスト:ハンドアウト	1
	上級日本語 読解	大学生活に必要な高度な読解力の習得を目指す。 テキスト:ハンドアウト	1
	上級日本語 論文作成	大学生活に必要な高度な文章作成能力の習得を目指す。 テキスト:『大学・大学院留学生の日本語4論文作成編』(アルク) 『大学生と留学生のための論文ワークブック』(くろしお出版)	1

4. 実施状況

初級クラスは前後期とも研究生、研究員、家族の受講者のみで、正規生の受講者はいなかった。中級Ⅰクラスには初めての短期留学特別プログラム生としてテキサス大学オースティン校から 2 名(前期 2 名・後期 1 名)が参加した。後期にはアーラム大学SICEプログラムの学生が初級Ⅱクラス(5名)、中級Ⅰクラス(総合、会話、漢字に各7名)に 12 月初めまで参加した。また、外務省青年招聘事業研修生(キルギス)1 名が 11 月末から 2 月初めまで中級 2 クラス、上級クラスに参加した。各学期の時間、担当者、受講者数は以下のとおりである。

＜前期＞（4 月 12 日～8 月 2 日）

科目名	時　間	担　　当	受講者数		
			特別	国際	共通
日本語初級Ⅰ総合	火水金 1-4	松岡洋子・坂本淳子 大高久枝	3	0	—
日本語初級Ⅱ総合	月木 4	大高久枝・大畑佳代子	4	0	—
日本語初級Ⅱ漢字	月金 5	小笠原洋光	3	0	—
日本語中級Ⅰ総合	月 3.4 木 1.2	尾中夏美 松岡洋子	12	4	—
日本語中級Ⅰ会話	月 3.4	尾中夏美	8	3	—
日本語中級Ⅰ作文	火 5.6	中村ちどり	8	2	—
日本語中級Ⅰ読解	水 7.8	橋本学(人文社会科学部)	9	2	—
日本語中級Ⅰ漢字	月 3.4	尾中夏美	10	1	—
日本語中級Ⅱ総合	月 5.6 水 3.4	松岡洋子	7	2	—
日本語中級Ⅱ読解	水 7.8	岡崎正道	6	0	—
日本語中級Ⅱ作文	木 5.6	中村ちどり	1	0	—
日本語中級Ⅱ 理系日本語	木7-10	小笠原洋光	1	0	—
日本語中級Ⅱ 文系日本語	月 3.4	岡崎正道	13	2	—
上級日本語口頭表現	月 7.8	松岡洋子	8	—	15
上級日本語読解	水 9.10	岡崎正道	9	—	17
上級日本語論文作成	金 3.4	菊地　悟(教育学部)	5	—	10
合　計	27 コマ		107	16	42
			受講者合計 165		

＜後期＞（10 月 12 日～2 月 22 日）

科目名	時　間	担　　当	受講数		
			特別	国際	共通
日本語初級Ⅰ総合	火水金 1－4	松岡洋子・坂本淳子 大高久枝	7	0	—
日本語初級Ⅱ総合	月木 1-4	大高久枝・大畑佳代子	8	5	—

日本語初級Ⅱ漢字	月 5.6	小笠原洋光	5	0	—
日本語中級Ⅰ総合	月木 1.2	松岡洋子	22	1	—
日本語中級Ⅰ会話	月 3.4	尾中夏美	21	1	—
日本語中級Ⅰ作文	火 5.6	中村ちどり	5	1	—
日本語中級Ⅰ読解	水 7.8	橋本学(人文社会科学部)	7	1	—
日本語中級Ⅰ漢字	月 7.8	尾中夏美	13	0	—
日本語中級Ⅱ総合	月 5.6 水 3.4	尾中夏美 松岡洋子	9	2	—
日本語級Ⅱ読解漢字	金 7.8	岡崎正道	8	2	—
日本語中級Ⅱ作文	木 5.6	金田啓子(教育学部)	6	1	—
日本語中級Ⅱ 理系日本語	木7-10	小笠原洋光	2	0	—
日本語中級Ⅱ 文系日本語	月 3.4	岡崎正道	9	3	—
上級日本語口頭表現	月 7.8	松岡洋子	5	—	21
上級日本語読解	水9・10	岡崎正道	8	—	22
上級日本語論文作成	金3・4	小島聡子(人文社会科学部)	8	—	6
合計	27 コマ		143	17	49
			受講者合計 209		

受講数合計は延べ人数

5. 問題点、課題

5.1 施設、設備

学生センター棟の演習室数が不十分で、日本語クラスの教室の確保が困難な状況が続いている。ここ数年、人文社会科学部が専門科目を演習形式で行うケースが増加しており、そのため、中小規模の演習室が必要になっている。この状況は今後とも続くことが予想され、改善策が急がれる。

また、新学期当初および夏休み前には教室の環境が劣悪になる。新学期は暖房が切られているが、盛岡の場合、4 月いっぱいはかなり冷え込む日が多い。一方、6 月終わりごろから暑さのため熱中症の症状を訴える学生も出ており、扇風機、団扇、保冷剤などを教室に持ち込んで対応している。近年の異常気象は学生に我慢を強いる限界を超えており、学習に集中できる環境にはない。経費節減のため一律に冷暖房費を削減することによって、最低限の教育環境を整えることができない現状は問題である。

さらに、今年度新たにオンライン教材を導入し、授業でも試用を始めたが、情報処理セ

ンター教育端末室の使用には時間的制限があり、国際交流センター教員室でのノートパソコンによる授業は準備、後片付けに時間を要し、ノートパソコンの台数および部屋のスペースに制限があるため利用しづらい。

以上の問題は、国際交流センターの専用施設が確保できないことに起因するが、早急に施設を作ることは不可能である。現状でできる限りの改善策を講じていきたい。

5.2 内容、コースの位置付け

学習者の日本語レベル、ニーズが多様であるが、それぞれの絶対数が少ないために効果的なクラスの設置が困難である。今後、国際交流センターの学期設定時期と合致しない時期に多様なプログラムの日本語学習者が合流するケースが増加することが予想される。学生や指導教員に対するにニーズ調査の実施や学習効果の検証を継続し、学生が参加しやすく効果的な日本語教育を提供していきたい。

以上

(文責：松岡洋子)

日本語研修コース実施概要

1. コースの目的

日本語研修コースは、大学院入学前の日本語予備教育プログラムであり、6ヶ月間の日本語集中コースとして開講されている。受講対象となる学生は、岩手大学と近隣の大学の大学院へ進学する予定の留学生(大使館推薦の国費研究留学生および教員研修留学生)であるが、国際交流センターの許可を得た場合は他の留学生も受講することができる。毎年 4 月と 10 月に開講され、日常生活と研究に必要な日本語の基礎を学ぶ。

2. 平成 17 年度前期

(1) 受講生

受講生は6名で、全員が大使館推薦国費研究留学生である。国籍と研修後の配属先は次の通り。

インドネシア(岩手大学人文社会科学部)
ウルグアイ(秋田県立大学)
ガーナ(秋田大学)
南アフリカ(秋田大学)
タンザニア(岩手医科大学)
アルゼンチン(岩手県立大学)

(2) 授業日程

4 月 7 日(木)	プレースメントテスト
4 月 12 日(火)	開講式
4 月 13 日(水)	授業開始
4 月 15 日(金)	留学生のためのオリエンテーション
4 月 29 日～5 月 5 日	連休
7 月 29 日(金)	日本語修了発表会
8 月初旬～下旬	夏休み
8 月下旬～9 月中旬	補習授業
9 月 15 日(木)	修了式

(3) 週間時間割

	(月)	(火)	(水)	(木)	(金)
Ⅰ(9:00～10:30)	総合日本語 A	総合日本語 A	読解・作文 A	総合日本語 A	総合日本語 A
Ⅱ(10:30～12:00)	総合日本語 A	総合日本語 A 個別指導 B	読解・作文 A	総合日本語 A	総合日本語 A 個別指導 B
Ⅲ(13:00～14:30)	漢字 A	漢字 A	コンピュータ	漢字 A	漢字 A
Ⅳ(14:45～16:15)		日本事情	個別指導 A		

※ 漢字クラスは 13:45～14:00 の間は自習時間

※ 日本語授業のレベルは、A が初級 Ⅰ、B が上級

(4) 授業担当者

総合日本語 A: 松林和美、坂本淳子、小野寺淑(国際交流センター非常勤講師)

読解・作文 A: 中村ちどり(国際交流センター専任教員)

漢字 A: 松林和美、坂本淳子、小野寺淑(国際交流センター非常勤講師)

コンピュータ: 小笠原洋光(国際交流センター専任教員)

日本事情: 尾中夏美(国際交流センター専任教員)

個別指導 A・B: 中村ちどり(国際交流センター専任教員)

3. 平成 17 年度後期

(1) 受講生

受講生は 4 名で、内訳は教員研修留学生 2 名(フィリピン人、岩手大学配属)と学内募集の中国人留学生 2 名である。

(2) 授業日程

10 月 11 日(火)	開講式
10 月 12 日(水)	授業開始
10 月 14 日(金)	オリエンテーション
12 月 23 日～1 月 10 日	冬休み
1 月 4 日～6 日	スキー研修旅行
2 月 17 日(金)	日本語修了発表会
2 月下旬～3 月中旬	補習授業
3 月 10 日(金)	修了式
3 月 17 日(金)	留学生送別会

(3) 週間時間割

	(月)	(火)	(水)	(木)	(金)
Ⅰ(9:00～10:30)	総合日本語	総合日本語	読解・作文	総合日本語	総合日本語
Ⅱ(10:30～12:00)	総合日本語	総合日本語	読解・作文	総合日本語	総合日本語
Ⅲ(13:00～14:30)	漢字	漢字	コンピュータ	漢字	漢字
Ⅳ(14:45～16:15)		日本事情	個別指導		

※ 漢字クラスは 13:45～14:00 の間は自習時間

※ 日本語授業のレベルは、全て初級Ⅰ

(4) 授業担当者

総合日本語: 松林和美、坂本淳子、小野寺淑(国際交流センター非常勤講師)

読解・作文: 中村ちどり(国際交流センター専任教員)

漢字: 松林和美、坂本淳子、小野寺淑(国際交流センター非常勤講師)

コンピュータ: 小笠原洋光(国際交流センター専任教員)

日本事情: 尾中夏美(国際交流センター専任教員)

個別指導: 中村ちどり(国際交流センター専任教員)

(担当:中村ちどり)

全学共通教育科目(日本語)

主に新入学の1年生が履修する外国語科目としての日本語であるが、彼らは入学の時点において既に相当程度の日本語能力を有しているので、その実情に合わせて「上級日本語」を3科目用意している。(1)口頭表現 (2)読解 (3)論文作成である。

週3回の授業を3人の教員が分担しているが、受講者は単位取得希望(必須)の学部留学生のほか、高度な日本語力の習得を望む学生やその家族等も参加し、「日本語特別コース」の上級編をも兼ねるものとなっている。

(1)口頭表現では、ハイレベルな話題をもとに議論したり、自分の意見を発表しかつ質疑応答も行なったりする、高度な会話の訓練

(2)読解では、日本の文化・歴史・政治、現代社会の諸問題などに関する、これもレベルの高い文章(新聞等)の読解の訓練

(3)論文作成では、研究した内容や報告する事項を日本語でまとめる訓練

この授業の受講者は原則として、過去において600時間程度の日本語学習歴を有する者に限られているので、相当ハイレベルな内容にもついてこれるはずであるが、それでも漢字圏(中国など)の出身者とそうでない者、専攻分野の違いなどにも起因する関心の度合いの高低等により、おのずと差が生じてくることは避けがたい。

授業担当者は次のとおり

上級日本語A(口頭表現) 松岡洋子

上級日本語B(読解) 岡崎正道

上級日本語C(論文作成) 菊地 悟

(担当:岡崎正道)

全学共通教育科目（日本事情）

この科目は全学共通教育科目「人間と文化」の一つとして留学生を対象に、理系と文系の2コースに分かれていて、前期は「日本事情A」、後期は「日本事情B」として開講されている。

理系コースについて、日本事情Aで使用した資料及び取扱内容は、前年度とほぼ同様に日本の明治以降の技術史を中心に、具体的事例とその考え方についてである。今年度の日本事情Bは、前期に引き続き受講する学生が混在したので、視点を世界に向け、アーノルド・パーシー著『世界文明における技術の千年史』を資料として日本とアジアに関係する内容を採り入れた。

1. 理系

前期については昨年の報告に詳述したので、ここでは、後期についての扱いを述べる。

先ず前期の初めに用いた資料によって、科学技術導入の歴史と日本の大学制度の変遷を、社会の要請と科学の進展を背景において調べ、法人化を選択した日本の大学が今進めている産学官協力に目を向け、科学教育がもたらす社会・文化への影響を考える。続いて、技術の進展は、孤立した一つの国家、あるいは一地方の特異な技能・知識に依拠してきたのではなく、他の多くの国々（地方）からの新しい技能・知識の導入を、既に使用に馴染んだ自国固有の技能・知識との“対話”によって改良・開発を促し、そのようにして得られた新しい技能・知識が再び諸外国へ伝えられ、あるいは逆輸入の形で持ち込まれたりしながら、つまり国と国との“技術の対話”が行われつつ、より高いレベルの技能・知識の形成へと繋がることを見る。こうして明治期から始まる日本の科学・技術の進展が世界史における特異な存在ではなく、網の目で結ばれた世界のあらゆる地域の多種多様な出来事について“時間の流れ”の中での必然とも言うべき事実であるとの認識を得る。

資料は、特に中国や東南アジア諸国を意識した記述を選択して興味を惹きつけ、留学生のレベルには少し高いが日本語として普通のレベルにあるもので、このような書籍を読み進むために付きまとう日本語特有の言い回しや頻出する未修得漢字の困難さから意欲を失うことの無いように配慮しつつ授業を展開した。また、訳文であるため訳者には当然と思われる表現でも、前後の関係から別の言葉を選んだ方が適当と思われる箇所についての評論も加え、更に一文進む度に各段落の要約を書かせ、文の構成と著者の意図する内容の把握、文章表現力をつけるための作文練習をも兼ねた。

1.1 受講生

本年度の受講生数は、前期は工学部生 3 名、後期は前期受講学生3名を含み理系のみならず文系学生を交えた 17 名である。

1.2 授業および評価（前期）

ほぼ昨年同様、以下の項目について、輪読しながら講義・解説及び議論を行った。

1) この講義の目的の説明

2) 資料『科学の社会史』の前書き、序章「社会のなかの科学」、第 1 章「日本における近代科学の基礎工事」、1750 年頃からの大学、諸研究機関設置とその変遷と年表

3) 江戸時代の機械技術・・・和時計の話

4) 大砲製造と反射炉、工作機械と鉄鋼業の話、技術者養成機関としての大学、国産エンジンの話、日本の鉄道と新幹線、電子顕微鏡の歴史とコンピュータを駆使した現在の電子顕微鏡の話題

5) 産学連携

・ 前期の評価は、出席して輪読に参加すること及びレポートで行った。

1.3 授業および評価(後期)

後期の授業内容は、以下の項目についての読解、解説、各段落の要約である。

1) この講義の目的の説明と『科学の社会史』の前書き、及び序章「社会のなかの科学」

2) 『世界文明における技術の千年史』の第 1 章(1)世界史におけるバランス・・・製鉄の話

3) 日本の近代技術・・・大砲製造と反射炉、工作機械と鉄鋼業の話

4) 『世界文明における技術の千年史』の第 5 章(3)銃の製造、(5)日本のマスケット銃・・・鉄の精錬と性質、加工の話

5) 釜石製鉄所の話

6) 『世界文明における技術の千年史』の第 9 章(1)ロシアの鉄道、(2)日本の技術、(3)技術革新と対話、(4)帝国主義の次元

7) 『科学の社会史』の第一章「日本における近代科学の基礎工事」・・・技術者養成機関としての大学(東京大学)

8) 『世界文明における技術の千年史』の第 10 章 「科学革命と技術の夢」の(1)電気学と化学、(2)新しい機関、(3)軽やかに飛ぶツバメへの憧れ、(4)物質という新世界への夢、(5)平和のための原子力、(6)伝統と対話しつつ歩む中国と日本

後期の評価は、出席し輪読に参加(出席点)、随所でその時間に扱った資料についての要約提出(読解力、聴解力)、更に最終回において新しく資料を与えそれについてのレポート提出(期限内に資料を読み、内容を理解する読解力及び表現力)を求めて、これらを総合して行った。

[参考資料] 後期、新たに使用した資料のみ記載

アーノルド・パーシー著、林武監修、東玲子訳 『世界文明における技術の千年史』(新評論)

(理系担当:小笠原洋光)

2. 文系

外国人留学生が日本で学びまた日常生活を営む上で役に立つ、日本に関する諸事情、諸文化事象について講義する。具体的項目は、以下の通り。

(1) 日本人の言語表現の特性

(2) 日本人の精神と日本文化の特質

(3) 日本の歴史、歴史上の人物、日本の思想

(4) 政治・経済・社会・風俗等、現代日本の諸問題

(5) その他、日本と日本人に関するあらゆる事柄、また日本と世界の関係など

これらの中からその都度具体的なテーマを設定して講義するのだが、出席している学生の日本語能力、問題関心等により、内容をいろいろ工夫している。また学生の出身国についても、考慮を払う必要がある。特に政治的に対立する国の学生が授業に出ているような場合は、どちらか一方に与するような(あるいは、そう受け取られかねないような)発言は、極力慎む配慮が望まれる。

(文系担当:岡崎正道)

国際交流科目実施報告

1. 概要

国際交流科目は短期留学特別プログラムの交換留学生を受講対象として実施される科目である。国際交流科目は大学の授業を英語により提供し、日本語力のない留学生が単位を取得することを目的として設置されている。また、日本語学習を希望する留学生に対して入門レベルからの授業を提供している。平成 17 年度 4 月より短期特別留学プログラムの学生が在籍し始め、英語による科目および日本語科目が開講された。

さらに国際交流科目は全学共通教育科目、専門科目、教職科目とともに、全学の正規学部生も受講可能な科目として認定されている。これは、正規学部生が英語により知識を得る機会を与え、実践的な英語力の向上を図るための措置である。

平成 17 年度は短期留学特別プログラムの学生のほか、英語による科目は人文社会科学部生、交換留学生、日本語・日本文化研修生が、日本語科目は交換留学生がそれぞれ受講した。

2. 実施状況

平成 17 年度の開講状況は以下のとおりである。受講学生は短期特別留学プログラムの 2 名（前期 2 名、後期 1 名）および交換留学生である。

＜前期;4 月 12 日～8 月 2 日＞　（国際交流科目として登録者のあった科目のみ記載）

科目名	時間	担当	受講数
現代日本の法律 I The Law of Contemporary Japan I	月 7.8	クリアリ （人文社会科学部）	2
『武士道・日本の魂』を読む Reading "*Bushido,, The Soul of Japan*" by Notobe Inazo	火 5.6	三浦勲夫 （人文社会科学部）	4
映画に見る日本の文化と社会 Japanese Culture and Society Through Film	木 9.10	ファー （人文社会科学部）	2
もうひとつの国：1930 年代のアメリカと現代の誕生 Another Country: The USA in the 1930's and the Birth of Modernity	火 7.8	ファー （人文社会科学部）	2
岩手の文化・歴史地理学 The Cultural and Historical Geography of Iwate	木 5.6	杉浦直 （人文社会科学部）	2
日本語中級 I 総合 Intermediate Japanese I General	月 3.4 木 1.2	尾中夏美 松岡洋子	4

日本語中級Ⅰ会話 Intermediate Japanese I Conversation	月 3.4	尾中夏美	3
日本語中級Ⅰ作文 Intermediate Japanese I Writing	火 5・6	中村ちどり	2
日本語中級Ⅰ読解 Intermediate Japanese I Reading	水 7.8	橋本学 (人文社会科学部)	2
日本語中級Ⅰ漢字 Intermediate Japanese I Kanji	月 3.4	尾中夏美	1
日本語中級Ⅱ総合 Intermediate Japanese II General	月 5.6 水 3.4	松岡洋子	2
日本語中級Ⅱ文系日本語 Intermediate Japanese II for Social Science	月 3.4	岡崎正道	2

＜後期;10 月 12 日～2 月 22 日＞

科目名	時 間	担 当	受講数
現代日本の法律Ⅱ The Law of Contemporary Japan Ⅱ	月 7.8	クリアリ (人文社会科学部)	2
日本のスポーツ Sports in Japan	火 1.2	浅見裕 (代表;教育学部)	1
『武士道の倫理と現代日本』を読む Reading *"The Samurai Ethic and Modern Japan"* by Mishima Yukio	火 5.6	三浦勲夫 (人文社会科学部)	3
日本人の心理的側面 The Psychological Aspects of the Japanese	木 5.6	斎藤博次 (人文社会科学部)	1
宮沢賢治の詩の世界 An Introduction to the Poetic world of Miyazawa Kenji	金 5.6	山本昭彦 (人文社会科学部)	1
日本語中級Ⅰ総合 Intermediate Japanese I General	月木 1.2	松岡洋子	1
日本語中級Ⅰ会話 Intermediate Japanese I Conversation	月 3.4	尾中夏美	1
日本語中級Ⅰ作文 Intermediate Japanese I Writing	火 5.6	中村ちどり	1
日本語中級Ⅰ読解 Intermediate Japanese I Reading	水 7.8	橋本学 (人文社会科学部)	1

日本語中級Ⅱ総合 Intermediate Japanese II General	月 5.6 水 3.4	尾中夏美 松岡洋子	2
日本語中級Ⅱ読解 Intermediate Japanese II Reading	金 7.8	岡崎正道	2
日本語中級Ⅱ作文 Intermediate Japanese II Writing	木 5.6	金田啓子 (教育学部)	1
日本語中級Ⅱ文系日本語 Intermediate Japanese II for Social Science	月 3.4	岡崎正道	3

3. 課題

現段階では学生交流協定校数が少なく、国際交流科目の主たる対象学生である短期留学特別プログラムの学生数はごくわずかである。そのため、毎学期の開講予定科目リストの中から、短期留学特別プログラムの学生が受講申請した科目についてのみ開講するシステムをとっている。英語による授業は担当教員の負担が大きい。そのため、開講準備したものが無駄になることのないように、受講者ゼロの科目を開講しないための措置である。したがって、短期留学特別プログラム以外の学生は上記の経過によって開講の決まった科目の中から受講科目を選択することになる。開講可能な科目は上述の開講状況一覧より多く準備されているが、実際に短期留学特別プログラムの学生が受講を希望しない場合は開講されないことは、短期留学特別プログラムの学生以外の選択肢を狭めることになる。このような状況を改善するために、正規学部生、交換留学生に対する開講前に受講希望調査を実施するなど、受講生確保の方策を講じる必要がある。

また、平成 17 年度は英語による授業が始めて実施されたが、登録、受講生管理、成績管理等について学務課との協力体制が未整備であった。来年度からは、国際課において国際交流科目の学務事務を担当し、学務課と連携するよう体制を整えるよう準備を進めている。

さらに、国際交流科目を恒常的かつ安定的に実施するためには方策が必要である。たとえば、基礎科目を英語で提供することによって、交換留学生が就学期間を延長することなしに卒業するシステムを構築することや、岩手大学ならではの魅力ある科目を提供することなどによって、留学生を獲得することにつなげられる。そのためには、担当教員に対してインセンティブを与えるなど、全学的取り組みが求められる。

以上

(文責:松岡洋子)

夏期休暇日本語補講報告

1. 概要

夏期休暇日本語補講は学期中の通常クラスに参加できない学生や、通常クラスで学習したことを復習したい学生を対象として開講した。また、アーラム大学SICEプログラムの参加学生が10月の通常クラスの開講までに学習予定レベルの授業に支障をきたさないように準備クラスとして利用された。

①初級Ⅱ予備クラス

日時: 2005年9月1日～9月29日 9:00－12:00 (全8回)

対象: 初級Ⅰ修了者、アーラム大学SICEプログラム(参加者 計7名)

担当: 大高久枝 大畑佳代子

内容: 初級前半レベルの総復習。初級の基本文型を使って四技能を総合的に高める。

利用教材: 『げんき1』(The Japan Times)

『みんなの日本語Ⅰ』(スリーエーネットワー) ほか

②中級Ⅰ予備クラス

日時:2005年9月1日～9月29日 9:00-12:00 (全8回)

対象:初級Ⅱ修了者、研修コース修了者、アーラム大学SICEプログラム(参加者 計12名)

担当: 坂本淳子 大高久枝

内容:初級レベルの総復習。特に日本語の音声に慣れ、スムーズな発話に繋がるような練習を中心に行った。

利用教材: 『日本語作文とスピーチのレッスン 初級から中級へ』(アルク)

『日本語集中トレーニング －初級から中級へ－』(アルク) ほか

2. 課題

初級前半終了程度の学習者に対応できる教材が少ないため、担当者は学生の能力を見ながら臨機応変に対応している。しかし、短期間の講座では、その都度教材を自作するのも限界があるため、教材開発が必要である。

また、夏期休暇中は残暑が厳しい日も多く、教室環境が劣悪となる。扇風機等での対応では不十分であり、教室環境の改善策を講じる必要がある。

なお、SICEプログラムの参加学生の日本語レベルが日本での研修には不十分なケースが見られ、送り出し先での事前研修に改善が求められる。

以上

(文責:松岡洋子)

日本語・日本文化研修コース

1. コースの特色

本コースのねらいとするところは、日本語および日本の諸事情、すなわち日本の文化・歴史・地理・政治・経済・社会・教育等々について理解を深めさせることにある。

そして、教室内で教師が何かテキスト等を用いて講義するのを学生が聞くというスタイルにとどまらず、様々な行事や体験学習等がふんだんに用意され、大いに楽しみながら学べるというのが、本学の日本語・日本文化研修コースの大きな特色である。

2. 受講生

2002～03年はロシア人1名、2003～04年はロシア・チェコ・中国各1名の計3名、2004～05年は中国・カザフスタン各1名を受け入れた。2005～06年は中国人1名を受け入れている。

3. 指導体制

留学生の専門分野や興味・関心にマッチする専攻の教員が、指導教官を務める。また日本語の指導や生活・就学上の相談等については、国際交流センターの教員が共同で携わった。

4. 活動内容

周辺の名所・旧跡等を訪ねたり、必要に応じ博物館等の文化施設で研修を行なう。学内・学外のイベント等に積極的に参加させて、関係者や市民との交流を深める。花見・バスツアー・キャンプ・盆踊り・七夕・クリスマス・餅つき・スキーツアー・ひな祭り等々、季節ごとの催しが大学及び学外諸団体によって数多く企画、実施され、留学生たちはこれらを通して日本文化を実体験することができる。

5. 受講資格・修了要件

このコースを受講することができる学生は、中級レベル以上の日本語能力を有し、日本語・日本文化に関する分野を専攻もしくは学習している者である。コースの修了者には修了証を交付、また受講科目については、成績等の条件を満たした場合単位を与える。

（文責：岡崎正道）

日本語・日本文化研修生修了レポート作成報告

1. 対象学生と指導の概要

日本語・日本文化研修プログラムは世界各国の高等教育機関において日本語・日本学を専攻する学生が日本の大学に1年間留学し、各自の専門知識を高めることを目的として文部科学省が実施する制度である。国際交流センターでは、平成17年度は前期(平成16年10月～17年度9月)は大使館推薦1名(カザフスタン)、交流協定校の大学推薦2名(中国)、後期(平成17年10月～平成18年9月)は大学推薦1名(中国)の研修生を受け入れた。日本語・日本文化研修生は各専門の担当教官が指導教官となるが、国際交流センターに所属する学生である。

研修生は各自の専門分野の講義および日本語授業を受講し、知識・技能を高める一方、個別研究を行い、国際交流センターが主催する「修了発表会」において発表し、最終レポートを提出することが義務付けられている。

2. 平成16年～平成17年研修生の個別研究

当該年度の研修生、個別研究課題は以下のとおりである。

氏　　名	出　身	身分	研究課題
サビナ・アダモヴァ	カザフスタン	大使館推薦	持続可能は社会の形成に向けた 環境教育の展開 -先進国とカザフスタンとを比較して-
劉　績 (中国・精華大学)	中国	大学間推薦	日中両国の漢字改革から見る漢字問題

学生は、国際交流センター担当教員が修了発表までのスケジュールを提示し、指導教員の助言のもとに個別研究を進めた。最終段階で、国際交流センター教員が文章の構成および修了発表用資料(スライドおよび発表用テキスト作成)について指導した。両学生とも担当指導教員の指導時間が十分に取られており、研究室学生との交流も多かった。

3. 課題

日本語・日本文化研修生に対する1年間の研修計画が明示されていないため、研修生は各自の研修内容について曖昧な状態に置かれている。今年度は個別研究指導教員と国際交流センター教員が事前に打ち合わせをして1年間の研修計画の概要をたてた。次年度以降は、授業、文化交流、研究を総括した形の研修計画を、センター教員、指導教員、学生との話し合いによって

早期に作成することが望ましい。また、センターと指導教員の一層の協力体制が求められる。

以上

（文責：松岡洋子）

韓国群山大学サマースクール日本語クラス報告

1. 概要

国際交流センターで平成 17 年度初めて実施したこのサマースクール日本語クラスは、群山大学サマースクールの平日午前中(9:30－12:30)のプログラムとして実施された。参加学生の日本語力には個人差が大きかったが、母語話者に対して日本語を使用する機会をできるだけ多く提供するため、日本語を使ったプロジェクトワークを行った。

なお、この授業は教育学部専門科目「日本語教授法」受講生がTAとして参加し、プロジェクトの進行を補佐した。以下にプログラムの概要を示す。

回	日付	内　　容	日本語教授法受講者の役割
1	8 月 18 日 (木)	自己紹介 日本語で話し合おう	会話パートナー
2	8 月 19 日 (金)	日本事情(日本人の日常) 意見を聞こう【健康法、韓流ブーム、携帯事情】 (ホームステイ先でインタビュー準備)	日本事情の情報提供 研究テーマの説明 意見交換の相手 インタビュー話法の説明
	同日午後	(アクティビティ)	プロジェクトのサポート準備 ・情報検索の方法 ・インタビューシート作成 ・インタビューの表現技法 ・比較研究の方法
	8 月 20 日	ホームステイ先でインタビュー(意見収集)	
3	8 月 22 日 (月)	意見収集の結果まとめと学生同士の討論 (比較研究の方法)	収集情報の整理サポート 意見の類型化・比較の視点の提示
4	8 月 23 日 (火)	情報補強法【インターネット＆文献検索】 (トピックに関する多様な情報の収集)	情報検索法の説明 情報収集サポートと整理サポート
5	8 月 24 日 (水)	追加情報の収集(インタビュー)	インタビューサポート
6	8 月 25 日 (木)	調査結果と考察方法 (韓日の事情・意見の比較)	調査結果整理サポート 討論パートナー
7	8 月 26 日 (金)	発表技法入門【比較研究の口頭発表演習】	パワーポイント作成サポート 発表表現指導
	同日午後	成果発表会	

群山大学の学生は学年混合の3グループに分かれ、それぞれテーマを決めて日韓事情の比較を行った。選ばれたテーマは1)携帯電話事情、2)韓流ブームの意識、3)食文化、の 3 つであった。各グループを日本語教授法受講学生が補佐した。まず、グループ討論によって知りたい情報の項目を挙げ、それを整理して、図書館の文献、インターネットなどから情報を収集した。さらに、学内、およびホームステイ先でそれぞれのテーマについて知りたいことをインタビューし、テーマに関する事実と意見を日韓事情の比較という視点で分析し、パワーポイントにまとめて発表を行った。

2. 成果と課題

参加学生は学年、日本語力、興味分野に差が大きく、決められたテーマに対する研究の取り組み姿勢にも差が見られた。そのため、一部の学生に作業が偏ったり、日本語教授法受講学生の誘導によってかろうじて作業が進められたり、といった状況であった。また、インターネットの情報検索作業では、日本語による検索作業に不慣れなために、時間が不足し、補佐役の学生が手伝う場面が多く見られた。最終的にはどのグループも一定レベルの成果発表をすることができたが、プロジェクトワークに対する不慣れさ、作業時間の短さなどへの対処法を考える必要がある。

来年度以降も継続される場合、プロジェクトワークという手法は残しつつ、内容、テーマ、TAの活用法等について改善を行いたい。たとえば、来日までにこちらから課題を出し、準備する時間を与えること、テーマについて主体的に選択すること、日本語能力に基づき事前にグループ分けをしてもらうことなど、考慮したい。

以上

(文責:松岡洋子)

理工系留学生教育・指導について（平成 17 年度）

理工系留学生教育としては、工学部の学部内共通基礎科目として「基礎工学概論」と、農学部及び工学部の大学院生、大学院受験予定者、研究者を対象とする「理系日本語」（国際交流センター・日本語特別コース参照）がある。 ここでは、工学部について述べる。

1. 教育

留学生のために工学部における学部内共通基礎科目として「基礎工学概論」をおき、工学の基礎となる物理学、数学、化学に関する日本語で書かれている文章と、日本の工業事情を新聞記事、ビデオ等で紹介し、日本語の読解力と聴解力を養成すること、日本語で書かれた半導体基礎用語、日本工業規格についての用語を学ぶこと、日本語による報告書（レポート）の書き方を習得することを目的とする。授業内容と教材等については、2004 年度の本センター報告に詳述されている。

受講者及び授業について ： 今期（平成 17 年度前期開講）の受講者は、電気・電子工学科の 1 年次及び 3 年次各 2 名の計 4 名である。対象が電気工学科生である事と、1 年 と 3 年のレベルの異なる学生であることも考慮し、電磁気学を復習しながら、上記の内容を適宜盛り込んでの学習を試みた。

目標は、3 年次生に対してはMaxwellの電磁場の方程式を理解すること、1 年次の学生には、振動、波動の記述から波動方程式を導き、それとベクトル解析の初歩的理解をとりいれながら電磁現象の記述方法を知ることに置いた。教科書を輪読しながら物理法則の理解と、それに必要な基礎的計算技術習得を図り、物理的考えと数学的な扱いとの乖離が生じないように確認しながら進めた。

1.2 授業内容と教材

[授業内容]

(1) 工学の考え方、力学の基本法則、ベクトルの概念（解析的及び幾何学的表現）

(2) 最近の日本の電子産業・・・ビデオ

(3) 振動と波動の数学的扱い：単振動、円運動と周期運動、波動の記述法

(4) 静電場と自己力、ガウスの法則と立体角・・・ガウスの法則の微分形

(5) 物理定数の意味（物質の本性、幾何学的量）、物理法則（Law）と原理（Principle）について

(6) 計測用語について・・・JIS 測定と誤差（絶対誤差、相対誤差、精度、確度等）

(7) ベクトルについて：ベクトル積、**div, grad, rot** について

(8) 静電場、静電ポテンシャル、電気双極子と双極子ポテンシャル

(9) 静電誘導と電気容量、定常電流とオームの法則・・・荷電粒子の力学法則として理解

(10) アンペールの法則・・・**rot** の物理的意味、

(11) ローレンツ力・・・電磁誘導、電磁波・・・波動方程式

1.3 指導方法の問題と改善策について

毎年のことであるが、留学生の日本語、特に書く力はかなり低下してきているように思われる。初学者に対して学習の始めに必要なのは、彼らが持っている能力を引き出す問いかけではなく必要な事柄の判断基準となる標準的表現法を可能な限り正確に提供することであるから、今期は図や数式は勿論、説明文も省略せずに出来るだけ詳しく板書しそれをノートさせることで、上記の問題点克服を図った。

留学生がこのような教授法に慣れることは、実際行われている授業における口頭で述べられる説明文を聞き取りノートできるために必須の学習技術である。半期の限られた学習時間ではあるが、このような視点からの指導法を試みた。

2. 大学院生指導

この期間において、工学部生の受講希望者は無い。

資料

(1) 砂川重信著書「電磁気学の考え方」(岩波)

(2) 砂川重信著書「力学の考え方」(岩波)

(3) Isaac Newton 著書「PRINCIPIA」(Motte's English Translation)

(4) 日本規格協会編集 JIS ハンドブック「品質管理」

(5) E.インゲルスタム、S.ショーベリー、木下是雄共著「応用物理ポケットブック」

(6) 小笠原洋光、平塚貞人、山口勉功、中西良樹共著「物理学実験」

(担当 : 小笠原 洋光)

平成17年度外務省長期青年招聘事業研修報告

1. 受け入れの経緯

平成 16 年度に引き続き、外務省が実施する青年招聘事業の受け入れ機関として専門研修(日本語・日本語教育)を実施した。この事業は外務省が毎年実施する途上国の人材育成事業のひとつで、約 3 ヶ月の日本語研修および文化体験と2ヶ月半の専門研修を行う。今年度はキルギスの日本文化センターの日本語講師を受け入れた。

氏名: ジャニル・ティニスタノヴァ

出身: キルギス

主たる研修事項: 日本語教材開発、日本語学習

研修期間: 平成 17年 11 月 27 日 ～平成 18年2月 17 日

2. 研修の概要

＜日本語学習＞

①岩手大学国際交流センター日本語特別コース受講(週7コマ)

日本語中級Ⅱ総合(月・水) (担当:松岡洋子)

日本語中級Ⅱ読解・漢字(木)(担当:岡崎正道)

日本語中級Ⅱ作文(木) (担当:金田啓子)

上級日本語口頭表現(月) (担当:松岡洋子)

上級日本語読解(水) (担当:岡崎正道)

上級日本語論文作成(金) (担当:小島聡子)

②チュートリアル (火・金) (担当:人文社会科学部 3 年 小川有紀子)

＜教材開発＞

①コンピューター漢字教材開発指導(不定期) (担当:工学部 三輪譲二)

②コンピューター漢字教材開発TA(水) (担当:工学研究科 1 年 江尻 耕治)

③情報収集

・早稲田大学、国際日本語普及協会(平成17年12月9－10 日)

・教育工学会研究集会(東北大学) (平成18年1月 13－14 日

・国際交流基金日本語研修センター図書室(さいたま市)・凡人社(東京都)

(平成 18 年 1 月 12－14 日)

＜体験学習＞

①ホームステイ(平成 17年 12 月 31 日－1 月 3 日)秋田県湯沢市(チューター宅ほか)

②もちつき体験(平成 18 年1月3日) 岩手大学国際交流会館

③スキー合宿(平成18年1月5日－7日) 安比高原スキー場(留学生スキー合宿に参加)

3. 研修効果

当該研修生はキルギス日本文化センターにおいて日本語授業を担当する講師で、今回の研修の主目的はコンピューター漢字教材開発であった。そのため、工学部三輪譲二助教授の全面的な協力を得て、技術指導および、工学研究科の学生TAによる個別指導を受けた。日本語研修については日本語能力試験1級レベルの語彙、文法項目、読解、作文力の習得を目指した。また、日本の文化、歴史事情についても学んだ。研修の効果としては、研修の主目的であるコンピューター漢字教材のシステムがほぼ完成したこと、日本語能力1級合格レベルの能力にほぼ到達したことがあげられる。なお、コンピューター漢字教材の開発に当たっては、教育学部金田啓子講師に教材音声録音作業で多大な協力を得た。三輪助教授、金田講師の両氏に感謝の意を表したい。

5. 研修生からの反応

岩手大学で工学部三輪助教授の指導の下、また、教育学部金田講師の協力を得て、今回の研修の主目的であるコンピューター漢字教材開発がほぼ完成したことが一番の研修効果である。未完部分については帰国後完成させたい。

日本語研修については、自己の弱点が明らかになり、今後の学習の方向性が見えた。また、日本の文化、歴史などに関する知識を講義、見学を通じて得られたことは大きな収穫であった。

6. 課題

①受け入れ形態:

今回の研修生も昨年度同様、国際交流センターで通常実施している日本語特別コースに中途時期から受け入れたが、本人の日本語力が高く、また、研修に対する主体的な態度も大きく、昨年ほど問題はなかった。また、生活支援は国際課事務、チューター、担当教員の連携で臨んだ。今回は本人が比較的健康に過ごしていたが、病気や停電などの突発事態等、緊急時の対応について今後さらに体制を整備する必要がある。

②研修生の専門性:

今回の研修生はコンピューター教材開発を主目的としており、国際交流センターだけでは対応が困難であったため、工学部の全面的な協力を得た。日本語教育研修といってもその目的は多様であり、国際交流センターだけではなく全学の指導協力体制を得られるようにしていきたい。

以上

(文責:松岡洋子)

平成17年度前期日本語研修コース、日本語・日本文化研修コース修了発表会

日本語研修コースと日本語・日本文化研修コースの修了生を対象としたスピーチ発表会である。日本語研修コースは1学期間、日本語・日本文化研修コースは1年間の研修・研究の成果を発表した。またスピーチ発表会後に、留学生と地域の日本人との交流パーティーを行った。

1. 日時・参加者

平成17年7月29日(金) 学生センター棟3階会議室

約50名参加(外国人留学生、教員、日本人学生、地域の外国人、留学生支援団体の方々等)

2. 発表内容

2.1 日本語研修コース修了生

(1) コフィ・アドマコアンサ (ガーナ) 『ようこそガーナへ』

(2) 前田・ガブリエラ・直美 (アルゼンチン) 『私の町―ブエノスアイレス―』

(3) ルッサ・デニス・アファダリ (タンザニア) 『タンザニアの有名なところ』

(4) ベニテス・アレハンドロ (ウルグアイ) 『美しい国ウルグアイ』

(5) ジャン・パナ・ラバト (南アフリカ) 『私の国、南アフリカ』

(6) シャルル・マルタ (インドネシア) 『文学における「芸者」像とその現実』

2.2 日本語・日本文化研修生

(7) 劉 纘 (中国) 『日中両国漢字改革から見る漢字問題』

(8) アダモヴァ・サビナ (カザフスタン) 『持続可能な社会へ向けた環境教育』

(担当:中村ちどり)

平成 17 年度後期日本語研修コース、短期プログラム修了発表会

日本語研修コースと短期プログラムの修了生を対象としたスピーチ発表会である。日本語研修コース修了生は 1 学期間、岩手大学国際交流センターで初級日本語を学習しており、Microsoft PowerPoint を用いた自国の紹介を行った。短期プログラム修了生は協定校のテキサス大学オースティン校(アメリカ)からの留学生であり、1 年間、国際交流科目と日本語を学習した後に、自国と日本との違い等について発表した。スピーチの終了後には、留学生と地域の人々との交流会を開催した。

1. 日時・参加者

平成 18 年 2 月 20 日(月)午後 1 時～3 時　学生センター棟 3 階会議室

約 50 名参加(外国人留学生、教員、日本人学生、地域の外国人、留学生支援団体の方々等)

2. 発表内容

2.1 日本語研修コース修了生

(1) ロウェナ・クルス(フィリピン)　『夢の国 フィリピン』

(2) 王 ショウ(中国)　『中国の遺産』

(3) パルハット・イスラハット(ウィグル)　『ウィグルの自然と暮らし』

(4) マリル・ネル(フィリピン)　『フィリピン、海の宝』

2.2 短期プログラム修了生

(5) フィールズ・ウィリー・ジーン(アメリカ)　『日本とテキサスの異なったイメージ』

(担当:中村ちどり)

ネットアカデミー日本語版使用報告

1. 概 要

ネットアカデミー日本語版は2005年3月末に情報処理センターのネットアカデミー英語版管理サーバーに導入され、同年4月から授業での使用を始めた。ネットアカデミーの大きな特徴はLANを経由した教材の配信と学習履歴の管理にある。学生は教育機関のイントラネットを経由して端末に配信された教材で学習を進める。教員は学生の学習進捗状況をWWWブラウザ上で把握し、学習履歴をサーバーで一括管理する。このように学習履歴をサーバー上で管理することで、教師は学習者に対して学習上の助言を与え、より効果的なシステムの活用が可能となる。今年度はネットアカデミーの特徴を生かす活用方法を探るため授業での試用を行った。

2. ネットアカデミー日本語コースの概要

ネットアカデミー日本語版は語彙、聴解、読解、能力試験ミニテストの4コースからなり、語彙コース以外のそれぞれが日本語能力試験[i]の1級(上級)から4級(初級前半)の各レベル別に構成されている。学習者は各自の日本語能力に応じ、レベル別、スキル別に学習を進めることができる。コンテンツは以下のとおりである。

＜読解コース＞

「本文」「内容理解」「クイズ」「読む練習」「まとめ」の5項目が各ユニットで提示される。「本文」では読むスピードを把握し、「内容理解」で注釈、ルビなどを使って本文を理解する。「クイズ」は内容把握問題と文法問題が提示される。「読む練習」では主述関係、修飾関係、キーワードなどが提示され、読解力向上のためのヒントを与え、さらにスピードリーディング機能を使って読む速度を速める練習も行える。「まとめ」では、英語、中国語の訳文、注釈機能、音声による文章の確認などができる。1、2級各8ユニット、3，4級各7ユニット、計30ユニットからなっている。

＜聴解コース＞

読解と同じく30ユニットで構成される。「本文」「内容理解」「クイズ」「聞きの練習」「まとめ」の5項目が各ユニットで提示される。「本文」はパートごとに区切られ、聞き取れる部分と聞き取れない部分を区別する。「内容理解」では英語、中国語訳、注釈機能を使って聞き取れなかった部分を理解する。「クイズ」で自分の聞きとった内容の理解度を測り、「聞きの練習」ではスピードを変えて聴解能力を高める。最後に「まとめ」で内容の再確認を行う。

＜語彙コース＞

生活、勉学・研究、政治・経済、文化・娯楽、科学・技術の5分野、30カテゴリー、300ユニットで構成される。英語あるいは中国語を選択して、「ワードマッチ」、「カナマッチ」、「サウンドマッチ」、「スペルアウト」等の機能を使って学習する。

＜能力試験ミニテスト＞

日本語能力試験1級から4級まで各級3ユニット、合計12ユニットの演習問題で構成されている。各ユニットは「文字・語彙」「聴解」「読解・文法」の各項目があり、全部あるいは各項目を選択して能力試験に挑戦する。テスト結果が最後に表示され、弱点部分は再挑戦することもできる。

3. 今年度の活用概要

今年度は「日本語初級Ⅱ総合」、「日本語中級Ⅰ総合」および「日本語中級Ⅱ総合」の授業中に以下の2通りの目的で使用した。

① 復習と自己評価としての利用;「日本語初級Ⅱ総合」および「日本語中級Ⅱ総合」

学期の最終週に1学期間に学習した項目を再確認し、定着度を自己評価するために「能力試験ミニテスト」「聴解コース」を利用した。学生は、それぞれの当該レベル(初級Ⅱは3級、中級Ⅱは2級～1級)のいくつかのユニットに挑戦し、わからない部分は教師から個別に指導を受けた。

② 学習項目導入としての利用;「日本語中級Ⅰ総合」

学期中に数回、授業と並行して利用した。授業中に使用する教材にはない学習項目を「読解コース」「聴解コース」によってクラス全体に導入し、個別に問題に取り組ませ、さらにクラス全体にフィードバックを行った。学期の最終週には「能力試験ミニテスト」に個別に挑戦させ日本語能力の自己評価をさせた。

4. 活用効果と今後の課題

昨年度の国際交流センター報告で、ネットアカデミーの活用方法について提案を行ったが、今年度はそれに基づき、学期途中の学習項目補足導入として、および学期終了時の復習として試用した。学期途中での利用については、教科書の補足教材として機能し、より学習効果が高まったという反応を学生から得た。たとえば、「読解コース」で未習の文型、文末表現、語彙などに注目し、それに対して解説を加えてから課題に取り組んだ結果、文法項目の知識を個別に得るだけでなく、既習知識と統合し読解力につなげるトレーニングができた。また、学期終了時の利用では、個々に学んだ項目を統合してスキル別課題に取り組み、読む、聴くという日本語による情報受容力の向上につなげた。初級後半では、教科書を中心にした学習過程では文型知識の習得に焦点がおかれ、そこで得られた個々の知識を統合して活用する学習活動が不足する傾向にある。これを補う方法として、ネットアカデミーの活用は有効であった。また、ネットアカデミーでは各ユニットの課題には個々のペースで取り組むことで、自己の知識の定着度や不足している点を個別に明らかにすることができる。さらに、授業以外でこのシステムを利用した学生もおり、各自の学習、研究上の専門に必要な語彙の整理や、自分の弱点克服のために活用した。オンライン教材を個別に利用することで、取り組んだ課題に対するフィードバックを細かく受けることができるため、学生は飽きることなく、効果的に学習を進められたようである。

ただし、今年度の活用は授業内容とネットアカデミーのコンテンツとの対応について詳細に検討して計画的に利用したわけではなく、昨年提案したような教室での一斉授業の学習項目との有機的なつな

がりについて今後、検討する必要がある。教師が学習者に対して受講している教育課程の全体像を総合的に提示し、教育課程のそれぞれの位置付け、現在の進度、到達目標、各自の到達度などについて情報を提供し、それに対応した学習を奨励しつづけることが重要である。

さらに、システムの利用登録に当たって、いくつかの課題が出た。まず、新入学生は学生証の入手に時間がかかり、学期当初に必要な利用オリエンテーションの時期が遅くなるという現状がある。また、授業には学生の家族も受講しているが、その場合、家族本人はシステムに登録することができず、家族である学生に登録を依頼し、それを借用することになる。大学のサーバーを共同で利用するため、学生、教職員以外の者を登録させることは困難であるが、何らかの対応をしなければならない。

次年度以降は、さらにこのシステムを利用する授業を広げ、担当講師各自の工夫を加えていく予定である。

（文責：松岡洋子）

---

[i] （財）日本国際教育協会主催の日本語能力判定試験。外国語としての日本語能力を証明するものとして全世界で活用されている。なお、大学入学のための日本語能力判定試験としては日本留学試験がある。

日本語学習支援ネットワーク会議 in IWATE 実施報告

1．事業目的と実施形態

本事業は岩手大学国際交流センターの地域貢献の一環として今年度初めて実施された地域日本語教育貢献事業である。岩手県に在住する外国出身者に対する日本語学習等の支援を充実させ、地域の多文化共生を促進するため、日本語学習支援にかかわる関係者による情報交換、事業連携を目的としたネットワークの構築を行った。本事業は財団法人岩手県国際交流協会が共催し、岩手県教育委員会、盛岡国際交流協会から後援を得た。

2. 参加者、スタッフ

岩手、秋田、青森、宮城、福島、山形の東北6県から56名の参加者を得た。また、講師、司会、発題者として9名の講師陣を大阪、東京、新潟、山形、秋田から招いた。センター教員および国際課事務職員1名がスタッフとして参加し、本学学生のアルバイト6名が運営を補佐した。

3. 経費

経費は共催団体の財団法人岩手県国際交流協会と岩手大学国際交流センターが費目ごとに以下のとおり負担した。

負担先	費　目	金　額
岩手大学	旅費	318,600
(財)岩手県国際交流協会	謝金	116,800
	会議費	26,254
	資料作成費	5,492
		467,146

4．実施時期、プログラム

本事業は以下のとおりに実施した。

日時:2006年2月18日(土)9:30－16:20

場所:岩手大学学生センターG18、G4－A/C/D/E

プログラム:

＜午前の部＞　全体会　9：30－12：30

司会:岩手大学国際交流センター　尾中夏美氏

開会のことば　　岩手大学国際交流センター長　堀江皓氏

基調講演1「多文化共生社会に向けて」

多文化共生センター大阪　田村太郎氏

基調講演2「多様な言語・文化が言祝がれる地域づくりのために」

(財)海外技術者研修協会日本語研修センター

春原憲一郎氏

基調報告1「岩手在住外国出身者の現状と課題」

岩手県地域振興部文化国際課　山内雅恵氏

基調報告2「岩手の外国出身児童生徒の現状と課題」

岩手県教育委員会学校教育課　佐藤智一氏

＜午後の部＞　1　分科会　13：30－15：10

第1分科会「日本語教室の運営と学習支援」(参加者:12名)

司会:山形大学　内海由美子氏

発題:ゆうの会　熱海アイ子氏

第2分科会「外国出身の子どもの支援」(参加者:14名)

司会:国際ボランティアセンター山形　横沢由実氏

発題:秋田県子供学習支援ネットワーク　那波百合子氏

第3分科会「共生のための共通言語としての日本語」(ワークショップ)

(参加者:10名)

ファシリテーター:新潟大学　足立祐子氏

第4分科会「在住外国出身者支援と行政の役割」(参加者:12名)

司会:(財)岩手県国際交流協会　川村央隆氏

発題:山形市総務部国際交流課　阿部伸光氏

2　全体会　15：30－16：20

司会:岩手大学国際交流センター　尾中夏美氏

分科会報告　　報告者:各分科会司会者

まとめ　　報告者:岩手大学国際交流センター　松岡洋子

閉会のことば　　岩手大学国際交流センター　岡崎正道氏

5．内容と参加者の反応

5.1 基調講演・基調報告

基調講演は2つの視点から行われた。ひとつは、多文化共生社会の実現に向け、言語だけでなくさまざまな視点から課題をとらえるために、多文化共生センター理事の田村太郎氏から話をしていただいた。日本が確実に多文化社会になっていること、日本に暮らす外国人の現状、多文化共生に向けて外国人の人権保障、受け入れ地域社会の変化の方向性などについて、自治体と市民社会がどのような協働を行えるのか、具体例を見ながら考えることができた。参加者の反応は好評で、もっと話を聞きたいという意見が多く見られた。

もうひとつは、言語、文化の視点から新しい地域づくりをするためのビジョンについて(財)海外技術者研修センターの春原憲一郎氏からお話しいただいた。春原氏の豊富な知識に裏打ちされたさまざまな角度からの日本人的思考の特徴の解説と異文化を受け入れるため、相互理解、共存のための発想法についてヒントを得ることができた。参加者からは、発想の転換ができた、多くの行政関係者に聞いてほしい話だった、といった評価を得た。

基調報告は成人と就学児童生徒のふたつの実態について行政機関からの報告を得た。まず、在住外国人に関する岩手県の所轄部署である文化国際課山内雅恵氏から岩手県内の在住外国人数、在住外国人に対する岩手県の施策等について報告をしていただいた。岩手県でも他県と同様に外国人登録者数が増加傾向にあり、また、滞在の長期化、定住化の傾向が認められるようになっている。岩手県では相互理解の促進、ボランティア養成や情報提供などの日本語学習支援事業、パンフレット、看板等の多言語情報提供や外国人相談事業などにより在住外国人の生活支援を行っており、今後も継続させていくということである。参加者からの反応として、具体的な統計資料などを配布してほしかった、焦点を絞った話をしてほしかった、といった反応があった。

就学期の子どもについては、岩手県教育委員会の佐藤智一氏が、日本語指導が必要な外国人児童生徒の実態について統計資料に基づきご報告いただいた。岩手県では日本語指導を行うために教員の加配、文部科学省が主催する日本語指導者研修への教員派遣などを実施しているが、今後は市町村教育委員会、各種団体との連携により外国人児童生徒の支援事業を促進させたいということであった。参加者からは、教育現場の具体例などをもっと知りたいという意見が寄せられた。

5.2 分科会

分科会はネットワーク会議の主目的である、日本語学習支援関係者のネットワーク構築に直接結びつく企画である。今回は地域で実際に展開されている日本語教室の運営についての課題解決に向けた意見交換、現在問題が深刻化している外国出身の子どもの学習支援、外国人と日本人がコミュニケーションに使う共通言語としての日本語について考えるワークショップ、行政関係者の情報交換という4つのテーマで分科会を設置した。各分科会のテーマについてさまざまな実践についての情報を得て、多様なネットワークを構築するために、各分科会の司会者、発題者は岩手県外の実践者を中心に依頼し、情報を得た。

5.2.1 第1分科会「日本語教室の運営と学習支援」

第1分科会では地域で展開されている日本語教室の課題について、東北各地の関係者が情報交換を行った。司会は山形大学留学生センターの内海由美子氏。発題者として岩手県一関市でボランティアとして長年日本語学習支援活動を行っている「ゆうの会」代表の熱海アイ子氏が日本語教室の現状と課題を報告した。「ゆうの会」は日本人との婚姻のために来日した配偶者を中心に日本語学習、文化体験などをしている。学習に来る配偶者たちは教室で情報交換をし、交流を楽しみ、さまざまな問題をお互いに助け合って解決している。つまり、日本語教室は単に言語学習の場としてではなく、配偶者が相互に助け合うコミュニティとしての機能を果たしていることを指摘した。また、日本語教室開催の頻度が週1回2時間程度で、学習する側にとっては不十分だという声が多いが、ボランティアの確保が難しいという現状がある。また、日本語教室同士の情報交換は、活動を活性化させ、課題の解決方法を探るために重要だということである。

熱海氏からの話のあと、意見交換が行われたが、日本語学習支援活動の経験の長い参加者からは、もっときちんと日本語を教えるべきだという意見が多く出された。司会の内海氏は日本語を教えることだけに活動の意義を見出すのではなく、地域で外国人が生活するためにどのような日本語が必要か考えていくことも重要だという指摘をした。参加者の日本語学習支援歴によって意見の偏りが見られ、多様な日本語教室のあり方について今後も考える機会を設けるべきだという指摘があった。

5.2.2 第2分科会「外国出身の子どもの学習支援」

ここ数年、外国出身の子どもの教育問題が全国的に注目されるようになったが、岩手県では当該児童生徒を受け入れた学校が孤軍奮闘している例が多い。この分科会では、東北地域での先進事例として秋田、山形の状況が報告された。司会は NPO 法人国際ボランティアセンター山形の横沢由実氏。発題者として秋田県子ども学習支援ネットワーク代表那波百合子氏から秋田の子どもの学習支援活動の変遷と問題分析について報告があった。当初は民間のボランティアが県外の活動から学びながら活動を始めたが、行政との連携事業を行うようになった。子どもの滞在の長期化傾向が強まり、今後は継続的な指導、支援が必要となること、学校教育現場の人材育成、研修が重要であることなどが課題として指摘された。同じ東北地区でも場所によって在住する外国出身者の背景が異なるが、東北地区全体が連携し、情報交換を行いながら、教育システムを構築する重要性が確認され、今後もネットワークを継続するよう要望が出された。

5.2.3 第3分科会「共生のための共通言語として日本語学習」

第3分科会は在住外国出身者と受け入れ住民が共生するためにどのような日本語が必要かを考えるためのワークショップであった。ファシリテーターは新潟大学国際センターの足立祐子氏。今回はゲスト参加者として、岩手大学の留学生4名が加わり、どのような日本語を使ったら情報が伝わり、コミュニケーションが成立するか、いくつかの課題にグループごとに取り組むことによって考え

た。このワークショップを通じて、外国人と受け入れ住民がコミュニケーションするためには、日本語教室などで外国人が一方的に日本語を学ぶだけでなく、日本人も共通言語としての日本語について学ぶ必要があることを参加者は実感した。

5.2.4　第4分科会「在住外国出身者の支援と行政の役割」

第4分科会は行政関係者が集まり、市町村レベルの横の情報交換を行った。司会は(財)岩手県国際交流協会の川村央隆氏。他市町村の情報提供として国際結婚による外国人配偶者が多く在住する山形市国際交流課の阿部伸光氏から山形市の行政による外国人支援事業について報告があった。配偶者は長期定住外国人であり、一般的な言語、医療等の支援や相談業務のほか、子育て、教育にかかわる支援の必要性が高い。ここ数年は再婚による連れ子の教育問題が起こり、広域市町村連携による外国人児童生徒対象の日本語指導も行うようになったという報告があった。続いて、岩手県内を中心とした参加市町村関係者から各地域の状況報告と質疑応答が行われた。地域ごとに在住する外国人の背景、人数などに違いがあるが、広域に散在する外国人支援をいかに進めるか、行政と民間、行政同士がどのように連携するか、今後も継続的に意見交換を進めたいということで総括された。

6．今後の課題

岩手県内の日本語学習支援関係者のみならず東北各県からの参加者を得た。また、民間と行政の関係者が集まったことにより、連携の現状と可能性について意見交換を行うことができた。今回は初回ということで、他地域からの先進的な事例についての情報を得ること、会議を通じて同じ活動を行う人同士が出会うことを目的とした。そのため、参加者同士の討論の時間は十分にとることができなかった。さらに、開催時期が2月中旬となり、参加者の移動に気候的リスクを伴ったことも課題としてあげられた。

今後は総論的な話題だけでなく、テーマを絞った議論や、ワークショップ、在住外国人との意見交換、専門家による講演などに対する需要にも応えていきたい。なお、現時点での具体的な動きとしては、東北地区の民間団体、大学との連携による子どもの学習支援に関するシンポジウムの開催が検討されている。

大学の地域貢献事業として、岩手のみならず、広く東北地区、全国の団体、大学との連携を図る機会提供を行いたい。また、そのための基礎研究、調査も継続して行いたい。

以上

(文責:松岡洋子)

平成17年度岩手大学UURRプロジェクト報告

UURRプロジェクト委員

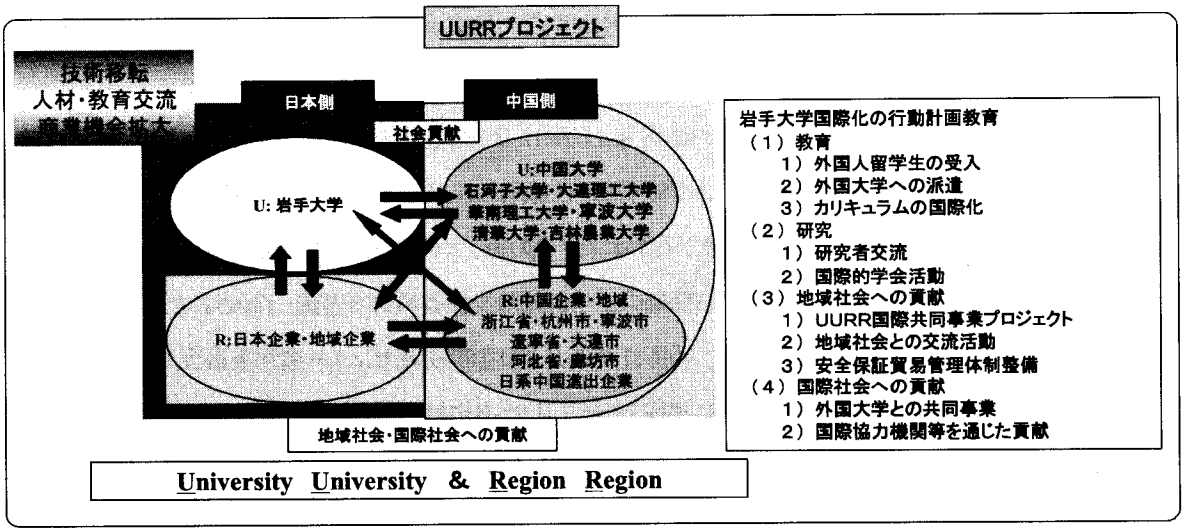
堀江　皓　　UURRプロジェクトチームリーダー　工学部材料物性工学科　教授
壽松木　章　　農学部農業生命科学科　教授
藪　敏裕　　教育学部国語教育　教授
新妻　二男　　教育学部学校教育　助教授
平原　英俊　　工学研究科フロンティア材料機能工学専攻　助教授
小野寺純治　　地域連携推進センター教授
対馬　正秋　　地域連携推進センター　技術移転マネージャー
松森　康夫　　研究交流部研究協力課課長補佐
高橋　良彦　　研究交流部国際課課長補佐
崔　華月　　研究交流部国際課　外国語専門職員

UURRプロジェクトの趣旨

成長著しい中国においては、産学連携が経済発展の一翼を担っている。一方、日本の産業界は市場の将来性を展望し、改めて中国への技術・資本の進出を開始しようとしている。

このような背景のなかで、地域連携を積極的に進めてきた岩手大学は、中国の大学とその連携地域と、いままでの学術交流の成果を踏まえ、国境を越えた中小企業同士のビジネス・チャンスの場を作り出すため、UURR(University and University＋Region and Region＝大学・大学と地域・地域の連携事業)国際共同交流プロジェクトを推進する。

岩手大学は、国際学術および産業技術交流活動を展開するため、中国の大学、その連携地域公設の研究機関、研究支援機関との連携強化を図る。例えば、中国の大学としては清華大学、大連理工大学、北京大学・石河子大学、華南理工大学ほか、中国地域としては、杭州・廊坊、大連、石河子、広州などである。



国際化の必要性

岩手大学は地方に設置された高等教育機関として地域の発展に貢献してきた長い伝統を一つの特色としており，国際社会においても，主にアジア諸国からの留学生受入れ等を通じてその役割を果たしてきた。今後はこれまで培ってきた地域社会への貢献を世界にも広げる視点にたって、本学にふさわしい国際化に意識的に取り組んでいく必要がある。

国際化のミッション

岩手大学は次の目標を掲げて地域社会の成熟と国際社会の発展に寄与したいと考えている。

1) 積極的かつ自立的に地球市民としての責任を果たせる人材を育成する。
2) グローバルな視点に立った研究を推進する。
3) 大学の国際化を通して地域の国際化に貢献する。
4) 研究成果及び教育資源を通して国際社会の発展に貢献する。

1. 大連理工大学との UURR 事業

平成17年度の大連理工大学とのUURR事業の検討事項について、過去の大連理工大学とのUURR事業の経緯とともに報告する。平成16年8月24日にUURRメンバーは岩手大学鋳造センターとの連携、岩手大学の技術を大連地域企業に技術移転する際の窓口機能の構築と連携のために、中華人民共和国大連理工大学を訪問し協議した。大連理工大は、1949年に大連学院として開学した大学である。1960年、政府の教育部直轄の全国重点大学(26大学)の1つに認可された。現在、31学部で学生は約4万人、教職員は3109人である。岩手大学と大連理工大学の交流について述べると、堀江皓教授と大連理工大学・金俊沢教授とは1980年以来鋳造分野での研究交流が続いており、大連理工大学は1989年に中国で初めての鋳造センターを設立した経緯もある。岩手大学としては鋳造センター(現、平成18年1月1日開設した工学部付属鋳造技術センター)とともに、大連理工大学と緊密な関係の構築が期待されると言うことで訪問する運びとなった。大連理工大学・校務委員会主任、林安西教授(日本では学長に当たる)と面談し、岩手大学のUURR事業について説明した。その後、平成16年11月17日、大連理工大学・校務委員会主任、林安西教授、鋳造技術中心主任・金俊沢教授、日本学研究所・杜鳳剛教授が岩手大学を視察され、岩手大学との技術交流・研究者交流についての意見交換が行われた。その後、大連理工大学と国際学術交流協定を締結することについて、平成16年12月22日開催の工学部国際交流委員会で審議・了承されたことが平成17年1月25日の工学部教授会で報告され、平成17年3月4日国際交流センター運営委員会で承認された。

中国の反日デモの影響が懸念されたが、平成17年5月23日には、岩手大学と大連理工との国際学術交流協定締結式を大連理工大学において行った。これまで、鋳造技術を専門とする教員の交流を契機に、平

成15年3月26日に岩手大学地域共同研究センター(現、地域連携推進センター)と大連理工大学鋳造技術研究センターとで部局間交流協定を締結しおり、今回、更に教育学部と工学部が加わり、大学間交流協定に発展させた。岩手大学からは平山健一学長、菊地俊彦理事、森邦夫工学部長、星野勝利教育学部長、堀江皓国際交流センター長、他15人が出席した。平山学長は「両大学の教育、研究分野での発展を図り、大学の成果を地域社会に還元したい。教職員、学生の一層の交流、両国の真の友好を強く願う」と強調し、当面の教員交流・学生交流計画について積極的に意見交換を行った。また、この日は岩手県と宮城県が合同で大連市に経済事務所を開設しており、今後は、この事務所を拠点として大連理工大学をはじめ、中国の他の大学との交流(UURR プロジェクト＝大学・大学・地域・地域の産学官連携)へと発展させていく計画も提案された。

岩手日報 平成17年5月31日

岩手大

大連理工大と学術協定

人材交流や共同研究

学長大学山健一学長)は学術交流の協定を締結した。学術のほか、大連理工大と教員、研究者の交流や共同研究を目的とした学生との地域くるみ市と岩手との交流推進にも期待が高まる。

調印式は、大連理工大でこのほど行われた。岩手大からは平山学長、菊地理事、星野勝利教育学部長、森邦夫工学部長ら十人、大連理工大からは林宏宇教授(同大校務委員会主任)ら五人が出席した。

平山学長はあいさつの中で「両大学の教育、研究分野での発展を図り、大学の成果を地域社会に還元したい。教職員、学生の一層の交流、両国の真の友好を強く願う」と強調した。

調印式を終えた一行は、世界規模のバレーボールの試合会場にもなるという約五千人収容の体育館などを見学した。

両大は、大連理工学鋳造技術センターと岩手大工学部材料物性工学科(金型工学科)を中心に二十年前から学術交流を続けてきた。今後の具体的計画は立っていないが、教員交流や学生の相互受け入れなどが検討される。

大連理工大は、一九四九年に大連理工大工学院として開学。六〇年、政府の教育部直轄の全国重点大学二十大学の一つに認可された。現在、三十一学部で学生は約四万人、教職員は三千百九人。岩手大が学術協定を結んだ海外の大学は、これで十三大学目。中国では五大学目となる。

平成17年10月3日から10月7日には大連理工大学から郭東明副校長(科学技術研究主管)、李俊傑教授(科学技術処処長、技術転移中心主任、科技園総経理)、金俊澤教授(鋳造技術研究中心主任)、李廷挙教授(材料電磁加工研究所所長)が来訪され、大連理工大の産学連携紹介、本学技術移転希望シーズ、対応方針案が説明され、岩手大学と大連理工大学の連携による技術移転方法について協議した。両大学が共同して「国際技術移転中心(センター)」を設立し、マーケット活動、大連理工大と岩手大の研究者交流を行う案も検討された。

平成17年12月20日に小野寺、対馬UURR委員李俊傑科学技術処処長を訪問して、“人材教育、共同研究、技術移転”などの連携ができるセンター「国際技術移転中心(センター)」について協議した。大連理工大では12月16日に開催された科技園の総会で、岩手大学と大連理工大学の国際技術移転センタープロジェクトの概要と岩手大学の技術案件について来場した大手企業27社に対して紹介したことの報告があった。

平成18年1月27日の定例記者会見で、平山学長は岩手大学と大連理工大とのUURR事業について「大学・大学と地域・地域の連携を意味するUURRプロジェクトの一環として、平成18年4月大連理工大学との

技術移転に向けたプロジェクトに乗り出し、大連理工大学に両大学の技術移転事務室開設を予定している」ことを発表した。

2. 寧波大学との UURR 事業

岩手大学と寧波大学の交流は、平成 15 年 3 月 17 日に教育学部と寧波大学・外語学院との間で学部間学術交流協定と学生交流協定が締結され、岩手大学の学生の派遣と寧波大学の学生を受け入れ、また岩手大学卒業生を寧波大学外語学院日本語系教員として派遣等の交流を行っている。教育学部藪教授(UURR 委員)が中心となって、平成17年度文部科学省科学研究費補助金・特定領域研究「東アジアの海域交流と日本伝統文化の形成—寧波を焦点とする学際的創生—」の一課題として「東アジアにおける死と生の景観」が採択され、この研究課題を基に寧波大学と共同研究を行い、平成18年2月には寧波大学の戴先生を招聘して講演会を開催した。また、過去に国際共同交流プロジェクト(UURR 事業)の 1 つとして、平成 15 年 11 月 3 日(月)、4 日(火)の 2 日間にわたり、清華大学、岩手県及び浙江省とともに、中国浙江省杭州市において「日中中小企業技術製品交流懇談会」を開催した。その時の、寧波大学・外語学院楊建華副教授(日本語系副主任、元岩手大学留学生)と、当時日本語系 3 年次学生 2 名(内 1 名は現在教育学部在籍留学生)は本学の UURR 事業のサポートおよび企業技術面談の際の通訳として協力を頂いた経緯がある。

平成 17 年度においては、平成 17 年 7 月 10 日から 14 日に外語学院と教育学部では、これまでの留学生の派遣以外に共同研究、共同シンポジウム、ダブルディグリーのような実質的な交流と他学部との交流の可能性について協議するために、寧波大学外国語学院・範誼院長、盛育冬副院長、楊建華日本語系副主任が来学された。本学の UURR プロジェクトの紹介、工学部において寧波大学学生の日系企業インターンシップ状況の説明、インターンシップ時の協力について協議した。帰国後、範誼院長は岩手大学の様子、教育学部以外の学部との交流の進め方についての報告書を寧波大学学長へ提出し、学長からは外国語学院と教育学部との交流とともに、この経験を寧波大学の他の学院にも広めてほしいとの提案があり、岩手大学に対して興味を示していた。この連絡によって、平成 18 年 1 月 6 日から 10 日の間に UURR メンバー(堀江皓国際交流センター長、他 5 名)が寧波大学を訪問した。范院長から 2006 年の両大学の交流について以下の 6 項目の提案があった。1)寧波大学工学院と交流の可能性。2)寧波大

学材料与化学工程学院と交流の可能性。3)平成18年11月に地域貢献に関するシンポジウムの開催。4)学部交換留学の継続と、半年ないし3ヶ月間の大学院生(修士)の交換留学の検討。5)学術研究の交流、人文教育から工学系への拡大。6)平成18年10月の寧波大学20周年記念事業への平山学長の招聘。特に、岩手大学の地域貢献(ローカル経済の貢献実績)に対して、寧波大学も地域の総合大学としての地域貢献策について岩手大学の協力を求められた。寧波大学工学院院長および材料与化学工学院からは、上記提案と共に日本政府または中国政府共同プロジェクトへの申請および学生交流の提案、同様に地域貢献のあり方についてシンポジウムを開催したいとの提案があった。UURR委員は本提案について岩手大学で検討し、寧波大学との連絡を密にすることとした。

3. 吉林農業大学・ほかとのUURR事業

西澤直行教授の雑穀を対象とした「食品の健康機能性研究と新食品開発・事業化」がシーズとして提供されたこともあるが、検討段階に留まっている。このシーズは岩手県内では雑穀入り食パン等を商品化しており、UURR 事業としても今後期待される分野である。そのほか、すでに中国国内で合弁会社を設立している県内企業(T 食品)が中国国内での納豆製品の開発を目指して、中国東北部の吉林省長春市にある吉林農業大学食品工程学院に研究センターを 2006 年に共同設立する情報があった。当該企業は開発商品の販売市場を中国東北部に定め、その拠点として大連市を考えており、そのための方法等を農学部に相談に来ている。本企業と農学部の食品関係の教員が連携しシーズとして醸成できれば、大連理工大学との UURR 事業に有効なシーズとして提供できる可能性があるので、来年度の検討課題として提起したい。

その他、新疆ウイグル自治区にある石河子大学とも交流を行っているが、研究交流および学生交流が中心で、UURR事業としては検討中である。

4. 清華大学とのUURR事業

平成17年1月16日～17日に、周軍(杭州市技術局副局長)、石福慶(清華大学技術開発部副総工程師)他6名が岩手大学に来訪し、平成15年11月3日(月)、4日(火)の2日間にわたり、清華大学、岩手県及び浙江省とともに、中国浙江省杭州市において実施した「日中中小企業技術製品交流懇談会」での課題であった技術移転について再度協議した。中国側からは技術合作(日中中小企業技術製品交流懇談会)は常にお互いに交流を深めることで実際的な交流に繋がるものであり、1 回だけの交流懇談会では不十分であるという意見もあり、今後の杭州と岩手の UURR プロジェクトの成果をより明確にするために今後とも緊密な情報交換のもとで進めることとなった。一方、具体的な技術移転には至っていない原因として、本交流懇談会は技術というよりも製造の手段、設備導入の紹介依頼相談がほとんどであった。しかも、日本の設備を使

って中国ですぐに取り入れて、市場に出したいという傾向の相談も多かったため教員として生産指導まで対応できるかといった点で無理があったとも考えられる。この経験は大学が中国との技術移転を行う上で、非常に大切な機会となった。今後の交流の方法を知財コンサルタント、中国移転コンサルタントの有識者を交えて再度検討する必要がある。

5. 国内活動

平成 18 年1月 30 日、(独)日本学術振興会と(社)科学技術国際交流センター主催の公開シンポジウム「大学の国際戦略―戦略的・組織的な取組を目指して―」が開催され、塩原部長　平原 UURR 委員が参加した。これは、大学国際戦略本部強化事業の一環として開催された初のシンポジウムで、約 220 名が参加していた。シンポジウムでは小野元之日本学術振興会理事長、小田公彦文部科学省科学技術・学術政策局長による挨拶の後、木村孟大学評価・学位授与機構長による基調講演、「大学の国際戦略－組織づくり・目標設定－」「研究の国際展開－外部資金の獲得・海外拠点－」「内なる国際化－キャンパスの国際化・職員養成－」をテーマとした3つのセッションにて事業採択機関の活動状況やパネリストによる議論が繰り広げられた。セッション1の(テーマ「大学の国際戦略－組織づくり・目標設定－」)では、本事業採択以前から学内の国際業務担当組織整備を行っていた慶應義塾大学と、国際コンソーシアム主幹校として国際活動やベンチマーキングに取り組む名古屋大学から活動事例の紹介があった。事例紹介後のパネルディスカッションでは、国際戦略策定や目標設定において重要となるポイントについて、パネリストより指摘があった。セッション2の(テーマ「研究の国際展開－外部資金の獲得・海外拠点－」)では、長崎大学・鳥取大学からはそれぞれ強みのある研究を中核とした国際展開について、また早稲田大学からは海外拠点を活用した研究展開などについて報告された。海外活動には避けて通れない危機管理の問題や、海外拠点のあり方などについて議論された。セッション3(テーマ「内なる国際化－キャンパスの国際化・職員養成－」)では、教員の約 40%が外国人である会津大学の取組、またインターネットを活用した外国人留学生・研究者支援に挑む大阪大学の活動事例が発表された。会場の参加者からも所属機関の「内なる国際化」への取組について紹介された。パネリストからは、大学の国際業務に通じたスペシャリストとしての職員養成が強調されるなど、これからの大学国際化に向けた課題が述べられた。今後の岩手大学の UURR プロジェクトの活動にとって非常に有意義な講演であった。

(参考、引用　http://www.u-kokusen.jp/index.html)

(平原 英俊　岩手大学工学研究科)

短期留学プログラムによる受け入れ・派遣

1. 受け入れ

今年度初めて米国の協定大学から短期留学プログラムによる学生を2名受け入れた。日本語科目以外は英語による開講科目であり、日本人や他の留学生との共修科目である。

表 2. 交換学生の国際交流科目履修状況

	ウィリー (滞在期間:2005年4月～2006年3月)	レアン (滞在期間:2005年4月～8月)
前期履修科目	日本語中級Ⅰ総合A	日本語中級Ⅰ総合A
	日本語中級Ⅰ漢字	日本語中級Ⅰ漢字
	現代日本の法律Ⅰ	日本語初級Ⅱ漢字
	「武士道・日本の魂」を読む	「武士道・日本の魂」を読む
	日本語中級Ⅰ読解	もうひとつの国:1930年代のアメリカと現代の誕生
	日本語中級Ⅰ総合B	日本語中級Ⅰ読解
	日本語中級Ⅰ会話	日本語中級Ⅰ総合B
	岩手の文化・歴史地理学	日本語中級Ⅰ会話
	映画に見る日本の文化と社会	岩手の文化・歴史地理学
		映画に見る日本の文化と社会
後期履修科目	日本語中級Ⅱ文系日本語	
	日本語中級Ⅱ総合A	
	日本事情B	
	日本語中級Ⅱ総合B	
	上級日本語F	
	日本語中級Ⅱ読解・漢字	
	初級中国語発展	
	現代日本の法律Ⅱ	
	「武士道の倫理と現代日本」を読む	
	日本人の心理的側面	
	日本のスポーツ	

滞在中履修科目以外の地域イベントなどにも参加する機会を提供した。帰国時には岩手での留学生活についての感想などを聞いたが、概ね満足した様子である。ただし、英語で開講している国際交流科目については読書やレポートなどの課題が多い原籍大学での評価に比較して内容が易しすぎるらしく、評価全体が甘いという指摘もあった。この点については開講科目の質の管理にも関係するので改善を図りたい。

カナダの協定校からは1名受け入れる予定があったが、学生の個人的な都合で取り消しになった。派遣とのバランスもあるので、先方が来やすいような情報提供や環境整備を図りたい。

2. 派遣

今年度より学生交流の全学協定を結んだカナダのセント・メアリーズ大学と米国のテキサス大学オースティン校に表1のように派遣することができた。

派遣学生は全員が留学準備のための英語トレーニングであるスーパー・イングリッシュプログラム(後述)の受講生である。そのうち半年派遣の学生は出発当初英語力不足と認定されたため、交換留学ではなく、岩手

表 1. 派遣学生数

派遣期間	セント・メアリーズ大学	テキサス大学 オースティン校
半年	1名	なし
1年	1名	2名

大学を休学して協定大学の語学センターで語学留学をすることになった。しかし、英語力不足が解消し先方で枠に余裕があるので交換学生として受け入れてもよいとの連絡があったので、岩手大学への復学手続きをして交換学生としての留学に切り替えた。交換留学中のいずれの学生も派遣先での成績は良好で、現時点まで単位を取得できている。

岩手大学からの派遣に先駆けて、テキサス大学から 2 名の受け入れ学生が来日したため、派遣予定の日本人学生を彼らのチューターとして配置し、お互いに情報交換をして助け合えるような環境作りをした。彼らは大変親しくなり、半年の岩手大学留学を終えて帰国したテキサス大学生と、その時点でテキサス大学に留学している日本人学生がアパートでルームメイトとして生活するなど、双方にとって有益な人間関係ができたようである。

写真 1. 各種留学・研修体験記が読めるウェブ

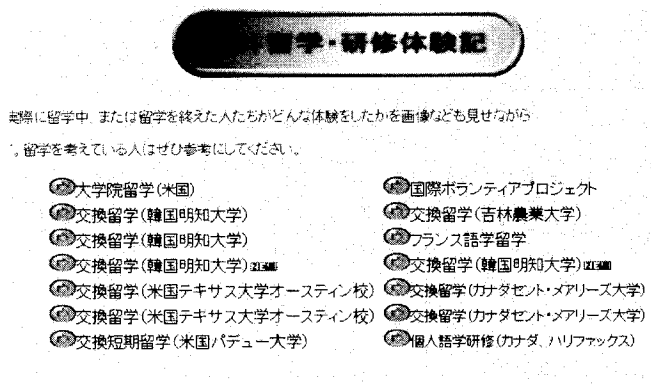
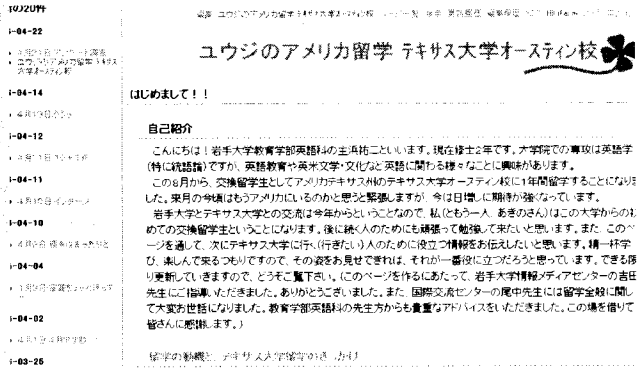


写真 2. リアルタイムで読める体験記



海外での留学や研修の希望者を増やすために、ウェブ上で体験記を公開している。帰国した時点で体験記を書いてもらう場合もあるが、交換留学に関しては、出発前に Wiki の使い方を指導してブログ形式で日々の暮らしなどを記録するよう指導した。今後留学を考えている学生はサイトに書き込むことにより疑問を直接学生に問い合わせることも可能で、情報交流に役立っている。

派遣留学期間中の危機管理については、その必要性を学生に説明した上で学生が長期休暇中にキャンパスを離れる場合には、移動場所と宿泊場所などについてメールで知らせてもらうこととした。

（報告：尾中夏美）

米国アーラム大学サイスプログラム関連事業報告

1. 2005年度サイスプログラム概要

岩手大学では米国インディアナ州にあるアーラム大学と平成15年8月11日に学術協定を締結し、今年度はさらに学生交流の覚え書きを交わした。本学はアーラム大学が毎年盛岡市に海外研修プログラムとして派遣するサイスプログラム(SICE: Studies in Cross-Cultural Education)に対して以下の支援を行っている。

(1) サイス学生に対する日本語教育の提供

(2) サイスプログラムの引率教員がサイス参加学生に対して授業を行う教室の提供

今年度のプログラムは以下の通りである。

受け入れ期間:2005年8月22日(月)～12月8日(木)

参加人数:12名

2. 日本語教育

アーラム大学SICEプログラム参加学生は8月の中旬に来日し、12月上旬に帰国する。そのため、国際交流センターでは当該プログラム日本語研修を、1)夏期休暇日本語補講、2)国際交流科目後期通常クラスの前半部に、それぞれ参加する形で2期に分けて実施した。8月到着後にオリエンテーションおよびプレースメントを行い、その結果、サイスの学生を初級後半および中級前半の2クラスに分けて日本語研修を行うことにした。研修の流れは以下のとおりである。

① プレースメントテスト　　:8月下旬

② 1期:夏期休暇日本語補講　:9月

③ 2期:国際交流科目日本語初級Ⅱ総合・日本語中級Ⅰ　:10－12月初旬

④ 修了試験　　:12月初旬

クラス

A. 日本語初級Ⅱ　　対象: アーラム大学SICEプログラム(参加者　計5名)

〔1期〕 夏期補講初級Ⅱ予備クラス

日時: 2005年9月1日－9月29日　9:00－12:00 (毎週月・木曜全8回)

担当: 大高久枝　大畑佳代子

教材: 『げんき1』(The Japan Times)

『みんなの日本語Ⅰ』(スリーエーネットワーク) ほか

〔2期〕 国際交流科目日本語初級Ⅱ総合

日時:2005年10月13日(木)－12月7日(木)　月・木曜 9:00-12:00

担当:大高久枝　大畑佳代子

利用教材:『みんなの日本語Ⅱ』(スリーエーネットワーク)　ほか

B. 日本語中級Ⅰ　　対象:アーラム大学 SICE プログラム(参加者　計7名)

〔1 期〕 夏期補講中級Ⅰ予備クラス

・　日時:2005 年 9 月 1 日～9 月 29 日　9:00-12:00　(毎週月・木曜全8回)

担当:　坂本淳子　大高久枝

教材:『日本語作文とスピーチのレッスン　初級から中級へ』(アルク)

『日本語集中トレーニング　－初級から中級へ－』(アルク)　ほか

〔2 期〕 ①国際交流科目日本語中級Ⅰ総合

日時:2005 年 10 月 13 日(木)－12 月 7 日(木)　月・木曜 8:40-10:10

担当:松岡洋子

教材:『現代日本語コース中級Ⅰ』(名古屋大学出版会)

②国際交流科目日本語中級Ⅰ会話

日時:2005 年 10 月 13 日(木)－12 月 7 日(木)　木 10:30－12:00

担当:尾中夏美

教材:『なめらか日本語会話』(アルク)

③国際交流科目日本語中級Ⅰ漢字

日時:2005 年 10 月 16 日(月)－12 月 4 日(月)　月 10:30－12:00

担当:尾中夏美

教材:『Intermediate Kanji Book vol.1』(凡人社)

(文責:日本語教育担当　松岡洋子)

3.　ハローパーティーとイングリッシュ・カフェ

岩手大学生とサイス学生との交流の場を提供する目的で、ハローパーティー(アーラム大学主催)とイングリッシュ・カフェ(岩手大学主催)の 2 度の交流事業を実施した。内容は表 1 の通りである。

ハローパーティーは出会いを主たる目的としているので使用言語に制限がない。一方、イングリッシュ・カフェは少人数で英語での会話が楽しめるように設定し、“カフェ”のようにお茶とお菓子を食べながらのリラックスした雰囲気での交流の場となっている。サイス学生は岩大生のために全て英語で会話をすることに取り決めている。参加者には岩手大学の留学生もいた。

表 1.事業内容

事業名	日　程	参加人数
ハローパーティー	10 月 13 日(木)16:30－18:00	50 名
イングリッシュ・カフェ	11 月 10 日(木)16:30－18:00	26 名

4. 学内留学

サイス学生は引率教員の専門分野の講義をプログラムの一環として英語で受講する。昨年度から岩手大学とサイスプログラム担当者とで協議して、若干名の日本人岩大生が引率教員の講義を聴講できることとなり、岩手大学ではこれを「学内留学」と呼んでいる。今年度の概要は表2の通りである。初年度の参加者からの要望を踏まえて、今年度は前年度より早い6月に学内留学の参加者募集を行って、参加者希望者が各自の時間割に組み込むことをしやすいように配慮した。

表 2.学内留学概要

開講日程	平成 17 年 8 月 25 日(木)から 12 月 8 日(木) 毎週木曜日 13:00－16:00
テーマ	日本の映画:ドキュメンタリー
受講の形態	聴講生として授業に参加し単位は認めないが、受講評価は受ける。
受講条件	十分な英語力と意欲を有する人文社会学部または教育学部の学部生または院生
選抜方法	各学部の担当教員が推薦した学生から 4 名が選ばれた

終了後参加者に対するアンケートをとった。満足度は高かったが、どんなことにも自分の意見を求められ、ディスカッション中心の授業だったので、英語力に自信がなくてももっと積極的に発言するべきだったということが各自の反省点として共通していた。

またこの学内留学を経験してのコメントとして全員が英語の聴解力がよくなったと感じているが、能動的に授業参加するためにはやはり話せることが大切であること、また授業形態が日本とは全く異なるために、レポートを書くことや予習のリーディングがかなり大変だったと感じていた。

5. 英語による特別講義

サイスプログラムの受け入れ期間中に一度、引率教員は岩大において特別講義を実施することになっている。今年度の引率教員は日本人教員で日本の大衆文化論が専門であったため、表 3 のような講義となった。講演に先立って講義内容の概要を英語と日本語で作成してもらい、当日の配布資料とした。題材がアニメということから取っ付きはよかったと思われるがかなり学術的分析の多い講義だったので、英語での講義を受けた経験の少ない日本人学生にとってはかなり難解であったと思われるが、講義はパワーポイントを使って行われたので視覚情報が多く理解の一助になったと推測される。

表 3.特別講義概要

開催日時	平成 17 年 11 月 17 日(月) 16:30－18:00
講演題目	Anime as an Object of Knowledge: Understanding Academic Contexts of Japanese Animation アメリカの学術的文脈におけるアニメ
参加人数	25 名

6. サイスプログラム学生対象の英語による特別授業の提供

岩手大学では岩手大学教員により英語で授業が行われる国際交流科目があり、サイスプログラム受け入れ期間中に一度だけ、引率教員が1科目をこの中から選んで、岩手大学教員がサイス学生対象に英語で特別授業を実施することにしている。今年度は表 4 の要領で実施した。

表 4.特別授業概要

開講日時	平成 76 年 11 月 14 日(月) 13:00－16:00
授業題目	The Law of Contemporary Japan
担当教員	人文社会科学部教員

7. 結果と今後の課題

7.1 日本語教育関連

今年度は早い時期からアーラム大学日本事務局担当者との密な情報交換を行うことで、参加学生のプロフィールを事前に把握することができ、比較的円滑に受け入れができた。また、日本語研修期間も昨年度よりも長期間実施することができ、その結果、岩手大学の学生との交流も深められた。今期は日本語力が比較的高い学生が多く、中級前半レベルで学習した学生たちの成績は概ね良好であった。しかし、初級後半レベルで学習した学生たちの日本語力、学習姿勢等に個人差が見られ、中級レベルとの差が目立った。また、昨年度の反省から授業の進め方、課題、評価について詳しい方法を提示した上で授業を行ったが、その結果、学生たちにはやるべきことが明確になり、日本語力の向上に役立った。

来年度は、アーラム大学における日本語教育の内容と、岩手大学での日本語教育の内容のズレに配慮し、渡日前の事前学習を課すことで、岩手大学の日本語研修にスムーズに合流できるようにすることを計画している。今後、授業方法等についてさらにプログラム担当者と協議し、改善を図りたい。

(文責:日本語教育担当　松岡洋子)

7.2 広範な交流

大学における通常の学生交流は 1, 2 名という極めて少人数の交換学生と彼らと交流できたごくわずかな日本人学生のみに受益者が限定される傾向にある。しかし、この事業では短期ではあるがまとまった人数の学生が多くの岩大生と交流の機会を持つことにより、本来国際交流に関心の薄かった、または関心は持っていても交流の機会を自ら作る勇気の持てなかったかなり広範囲の日本人学生に働きかけることが可能となった。しかしながら、本学からアーラム大学への留学者はまだいない現状を鑑み、交流のバランスの面からさらに改善に努めたい。

7.3 英語を使用する機会の提供

外国語として英語を履修する学生が多いが、実際に使用できる機会があまりないためモーティベー

ションを維持できず、英語学習が構文を暗記し訳読するだけの「死語化」する傾向にある。同年代の米国大学生との交流を持つことで英語を実際に話す機会を提供することは、異文化理解と語学力維持の両面から大変有意義と言えよう。また、海外研修を現実にしている米国大学生に触れることで自らも留学を決意する学生も出てきた。「留学」を別世界の遠い存在から身近で自ら実施する可能性を持った具体的な存在に変えることができた。

7.4 学内留学による留学疑似体験

語学は学ぶべきターゲットから知識を得るための道具として使用されるようになって、本当に実力がつく。学内留学を今回経験した学生は最初から意欲の高い学生たちであったが、アンケートで学習そのものへの意欲がさらに高まり、英語の運用能力も上がったことを感じるという報告があった。

今回は図書を事前に入手してできるかぎり前倒しでリーディングをしておくようにとの指示を出していたが、それでもいきなりかなりハードな環境に投げ出された形になるようなので、次回からは参加者へのオリエンテーションや事前準備などをもっと徹底する必要が感じられる。

協定ができても実際に留学するには費用や時間の問題など学生が解決しなければ問題は多い。学内留学という機会を設けることにより、選択肢が増えたことの意義は大きい。今年度までは単位を認めていないが授業時間数や授業内容が本学の単位が認定される授業と比較しても十分な質が保障されているので、次年度から単位を認定する方向で現在調整を進めている。

7.5 英語による岩手大学生対象の特別講義受講の体験

学内留学のように、アメリカ人対象の英語による授業を連続して受けられない学生でも、英語を学ぶ学生は日本人向けの英語による講義を少し体験することで「生の英語と本場の授業」を体験できる。全ての内容を理解することは無理でも、少しずつ理解度が増すと努力の成果が感じられ、さらなる努力につながる。前回と今回の講義はかなり学術的で一般学生には理解が難しい内容であったので、講義の内容や構成の仕方は今後の工夫が必要だと感じられた。

（文責：尾中夏美）

群山大学サマープログラム

1. プログラム概要

今年度初めて、国際交流センターが企画して韓国群山市にある国立大学群山大学の学生10名を受け入れた。研修の概要とスケジュールは表 1、表 2 の通りである。群山大学は現時点で協定校ではなく、本プログラムの運営経費は参加者が支払う参加費で全て賄ったので国際交流センター主催の収益事業と位置づけることができる。プログラムの内容は日本語研修と日本文化体験である。

参加学生の選抜は群山大学が行い、当初14名の参加希望者がいたが確実に確保できるホストファミリーの数がはっきりしなかったので定員を10名とした。参加学生の中には日本に来たことがある学生もいて、日本語能力は初級から中級まで能力差が大きかったので2クラスに分けることも考えたが、費用との兼ね合いから1クラスで対応した。宿舎は大学キャンパスから離れた場所にあったので、チャーターバスで毎日往復した。

参加者にはプログラム修了後に修了式において修了証書を授与した。

表 1.プログラム概要

受け入れ期間	平成17年8月17日から8月27日
受け入れ学生数とプロフィール	韓国群山大学日語・日文学科2年生～4年生10名（全員女子）
宿舎	滝沢村演習林学生宿舎棟・週末はホームステイ
開講日本語クラス	1クラス
経費	プログラム代金実費を徴収

表 2.研修スケジュール

日付	17日（水）	18日（木）	19日（金）	20日（土）	21日（日）	22日（月）
午前	仙台空港出迎え	日本語授業	日本語授業	ホームステイ	ホームステイ	日本語授業
午後	盛岡到着 チェックイン オリエンテーション	歓迎会 日本人学生と市内散策	昼食後宿舎にてホストファミリーと対面	ホームステイ	ホームステイ 午後5時に宿舎へ	カラオケ交流会
日付	23日（火）	24日（水）	25日（木）	26日（金）	27日（土）	

午前	日本語授業	東松園小学校訪問交流	日本語授業	日本語授業	仙台空港より帰国	
午後	着物体験	日本語授業	中央公民館、五百羅漢、岩山展望台など見学	修了発表と修了式 BBQ 送別会		

2. 受け入れに係わる準備について

6月中旬に群山大学の担当者よりプログラム参加決定をうけて、本格的な準備に取り掛かった。可能性を検討していた時点と学内の事情が変わり、使用許可に手間取ったこともあった。宿舎に何度も足を運んでの部屋割り作成、食事計画作成、施設使用にかかわる規則の確認、参加者対象の日本語、韓国語併記のハンドブック作り、修了証書作り、センター教員の担当割り振りなど細部にわたっての準備を行った。

経費に関しては、国際交流センター主催の事業ではあるものの、大学の財務手続き上に「仮払い」というシステムがないため、参加費を受け取るまでの間、担当教員が個人的に経費の立替を行わざるをえなかった。

3 日本語教育

このサマースクール日本語クラスは、平日午前中(9:30－12:30)のプログラムとして実施された。参加学生の日本語力には個人差が大きかったが、母語話者に対して日本語を使用する機会をできるだけ多く提供するため、日本語を使ったプロジェクトワークを行った。

なお、この授業は教育学部専門科目「日本語教授法」受講生がTAとして参加し、プロジェクトの進行を補佐した。以下にプログラムの概要を示す。

表 3. 日本語プログラムのスケジュール

回	日付	内　容	日本語教授法受講者(TA)の役割
1	8月18日 (木)	自己紹介 日本語で話し合おう	会話パートナー
2	8月19日 (金)	日本事情(日本人の日常) 意見を聞こう【健康法、韓流ブーム、携帯事情】 (ホームステイ先でインタビュー準備)	日本事情の情報提供 研究テーマの説明 意見交換の相手 インタビュー話法の説明

	同日午後		プロジェクトのサポート準備 ・情報検索の方法 ・インタビューシート作成 ・インタビューの表現技法 ・比較研究の方法
	8月20日	ホームステイ先でインタビュー(意見収集)	
3	8月22日 (月)	意見収集の結果まとめと学生同士の討論 (比較研究の方法)	収集情報の整理サポート 意見の類型化・比較の視点の提示
4	8月23日 (火)	情報補強法【インターネット&文献検索】 (トピックに関する多様な情報の収集)	情報検索法の説明 情報収集サポートと整理サポート
5	8月24日 (水)	追加情報の収集(インタビュー)	インタビューサポート
6	8月25日 (木)	調査結果と考察方法 (韓日の事情・意見の比較)	調査結果整理サポート 討論パートナー
7	8月26日 (金)	発表技法入門【比較研究の口頭発表演習】	パワーポイント作成サポート 発表表現指導
	同日午後	成果発表会	

群山大学の学生は学年混合の3グループに分かれ、それぞれテーマを決めて日韓事情の比較を行った。選ばれたテーマは1)携帯電話事情、2)韓流ブームの意識、3)食文化、の3つであった。各グループを日本語教授法受講学生が補佐した。まず、グループ討論によって知りたい情報の項目を挙げ、それを整理して、図書館の文献、インターネットなどから情報を収集した。さらに、学内、およびホームステイ先でそれぞれのテーマについて知りたいことをインタビューし、テーマに関する事実と意見を日韓事情の比較という視点で分析し、パワーポイントにまとめて発表を行った。

(文責:日本語教育担当　松岡洋子)

4 日本文化体験活動

毎日午後を日本文化体験活動に充てた。活動にはできるだけ日本人学生の参加も募集などを行ったが夏休み中という時期的な問題から、参加した学生はそれほど多くなかった。

写真1. 給食交流

様々な体験の中でも、地域の小学校訪問プログラムでの3年生、5年生との交流は大変印象深かったようで、子どもたちから寄せられる質問に電子辞書を片手に一生懸命答えていた。そして、学校長からは小学校での総合学習の中で韓国を含む外国文化に触れる学習を行っていることなどが紹介され

た。交流後は子どもたちと一緒に給食を食べて、日本の子どもたちがどのような学校生活を送るかを観察できた。

5 宿舎と食事について

宿舎には学内施設である農学部の学生宿舎を使用することとした。宿舎の規則で定期的な清掃や入浴時間の制約、使用後の食器は各自で洗浄するなどがあったが、10名の学生と宿直教員1名で独占できたので自由な雰囲気があった。クーラーがなくて部屋が暑かったなど設備面での問題はあったものの結果的に学生の評判はまずまずであった。掃除なども慣れているようで特に苦情が出るようなことはなかった。

食事に関しては、事前打ち合わせでは調理室があるので朝食と夕食を提供できるということだったが、具体的な打ち合わせに入った時点で調理師の手配ができないことがわかった。そこで、朝食はパンやおにぎり、コーンフレーク、ジュース・ミルク、果物などを冷蔵庫に準備し、担当者が消費状況を把握しながら補充した。夕食は惣菜や出前、外食などで対応した。最初はパンを中心とした食品を提供していたが、米食を望む声が聞かれたので後半はおにぎりやパックご飯なども用意した。

6 ホームステイ

語学研修・日本文化体験の目玉はやはりホームステイである。ポスターを作り、6月いっぱいでホストファミリーの募集を行った。直前に日韓で政治問題が紛糾し、十分な応募があるかどうか多少不安もあったが、折からの韓流ブームでホストファミリーは予定数集まった。群山大学からホームステイ用の参加者プロフィールが届いてからホストファミリーとのマッチングを行い、7月中旬にホストファミリーのためのオリエンテーションを実施した。ホストファミリーには学生の到着までに可能な限りメールや葉書などで連絡を取っていただくようにお願いした。ホストファミリーからの連絡がなかった学生には、岩手到着後に宿舎から電話をかけさせた。

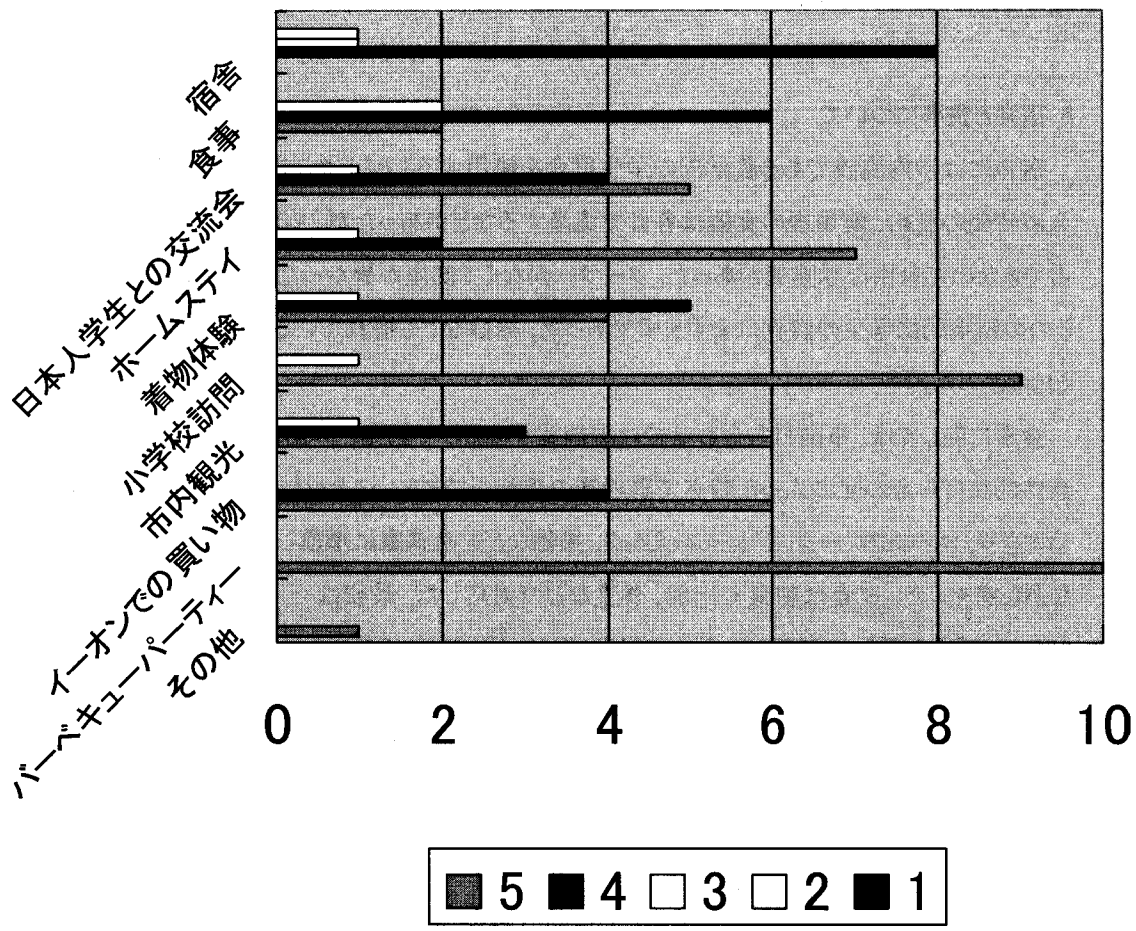
終了後アンケート調査を行ったところ、回答をよせた9家族のうち7家族がまたホストファミリーをやってもよいと思っていることがわかった。受け入れが短期間であるということが双方が疲れずによい交流の機会にできる条件なのかもしれない。

7 参加者アンケートの結果

プログラム終了時に参加者全員に対してアンケート調査を行った。正確を期するために韓国語で実施した。まず5段階で全体の満足度を問うたところ、「大変良かった」が5名、「だいたいよかった」が4名、「普通」が1名と、満足度が高かったことがわかった。

個別の活動に関する評価は表 4 の通りである。

表 4. 個別の活動評価



「来日前と現在で日本や日本人へのイメージが変わったか」という問いに対してほとんどの学生が、来日前には日本人は自己中心的、または冷たいといったマイナスイメージを持っていたのが、親切で温かい人情に触れてまた来日したいと思う、とプラスイメージに転換したというコメントを書いている。

8 結果と今後の課題

今回は初めてのプログラムだったこともあり色々と改善すべき点が見えた。

8.1 日本語研修

参加学生は学年、日本語力、興味分野に差が大きく、決められたテーマに対する研究の取り組み姿勢にも差が見られた。そのため、一部の学生に作業が偏ったり、日本語教授法受講学生の誘導によってかろうじて作業が進められたり、といった状況であった。また、インターネットの情報検索作業では、日本語による検索作業に不慣れなために、時間が不足し、補佐役の学生が手伝う場面が多く見られた。最終的にはどのグループも一定レベルの成果発表をすることができたが、プロジェクトワークに対する不慣れさ、作業時間の短さなどへの対処法を考える必要がある。

来年度以降も継続される場合、プロジェクトワークという手法は残しつつ、内容、テーマ、TAの活用法等について改善を行いたい。たとえば、来日までにこちらから課題を出し、準備する時間を与えるこ

と、テーマについて主体的に選択すること、日本語能力に基づき事前にグループ分けをしてもらうことなど、考慮したい。

（文責：日本語教育担当　松岡洋子）

8.2 宿舎

宿舎は当初予見できなかったことが色々と発生した。計画段階で予定していた調理師の手配ができないことがわかり、食事の手配にかなりの労力が必要となった。経費節減のために大学施設の使用を決めたが、今後このプログラムを継続するなら宿舎の見直しをしなければならない。

8.3 プログラム構成

全体的にプログラムが盛りだくさんで忙しかったので活動の精査が必要で、もう少し自由時間を与えた方がよかったと思われる。また、担当教員の仕事が過重だったことも息の長いプログラム運営を考える上で改善すべき点であろう。

9 継続に向けての取組と今後の展望

3月27日に群山大学を訪問し、次年度のサマープログラムについての説明会を実施した。日語・日文学科の学生約60名が対象であった。この場に今年度のサマープログラム参加者のほぼ全員が集まってくれた。担当教員の話では帰国後岩手大学への正規留学を希望して、資金作りのために休学して働いている学生もいるとのことであった。このことから、このような短期プログラムを継続することにより、短期研修プログラムが本学への長期留学の呼び水になり得ることが推測される。

（報告：尾中夏美）

石河子大学学生派遣プログラム実施報告

1. 岩手大学派遣メンバーと石河子大学担当者

派遣学生は 12 名の応募者から 5 名が面接によって選考された。選考基準は、学生の意欲、参加動機、所属学部、学年等が総合的に考慮された。また、国際交流センターおよび国際課から引率教員が 4 名参加した。石河子大学の受け入れは、副学長、学工部長、国際交流センター関係者に担当していただいた。メンバーは以下のとおりである。

(1) 岩手大学学生交流訪問団メンバー

学生: 小川 有紀子　人文社会科学部国際文化課程 3 年
真田 良枝　教育学部生涯教育課程 1 年
佐藤 美由希　農学部農林環境科学科 2 年
大内 匠　農学部農業生命科学科 2 年
岩崎 絢子　農学部獣医学科 5 年

引率: 堀江 皓　国際交流センター長
小笠原 洋光　国際交流センター助教授
高橋 良彦　研究交流部国際課国際企画グループ主査
崔 華月　研究交流部国際課国際企画グループ外国語専門職員

(2) 石河子大学受け入れ担当者

楊 磊　副校長
楊 衛華　学工部長
張 洪鈞　対外交流與合作処処長
高 卉　対外交流與合作処主任
王 氷一　対外交流與合作処

2. 日程および交流概要

＜準備＞

参加学生は出発前の約 1 ヵ月半、訪問のための準備を行った。準備期間中 3 回の打ち合わせを実施した。訪問期間中に岩手大学および岩手、日本事情紹介のプレゼンテーションを行うため、担当項目を分担し、発表用スライド作成と発表練習を行った。また、歓迎会でのアトラクション用にさんさ踊りなどの練習を行った。打ち合わせは主に引率担当者の小笠原助教授と国際課崔職員が担当した。準備期間は学期末試験から夏季休業期間だったが、学生は日程を調整して積極的に役割を担った。

なお、今回の派遣事業の学生参加費用は 18 万円で半額は教育支援施設戦略経費から支出し、半額は参加者の自己負担であった。

【準備日程】

日付	内容
6 月上旬～	参加者公募開始
7 月 20 日	面接選考(応募者 12 名より 5 名選考)
8 月　5 日(金)	第 1 回打ち合わせ　；　メンバー紹介、日程説明、諸手続き等
8 月 25 日(木)	第 2 回打ち合わせ　；　プレンテーションおよびアトラクション準備
9 月 12 日(月)	第 3 回打ち合わせ　；　日程最終確認、プレンテーションおよびアトラクション準備

＜訪問＞

訪問中は、学生および小笠原助教授、崔職員が全日程参加した。また、堀江センター長、国際課高橋職員はスケジュール途中で合流し、大学を表敬訪問した。

石河子大学での初日には岩手大学、日本事情紹介のプレゼンテーションが行われ、約 40 名の参加者を得た。また、座談会では、崔職員の通訳により双方の学生たちがお互いの学生生活や興味分野などについて積極的に話し合った。夜は歓迎夕食会が開かれ、両大学からさまざまな出し物が披露され、和やかに交流が行われた。大学での 2 日目には石河子大学の中国語教員による中国事情および中国語講座が持たれた。3 日目以降は見学、交流などが行われ、各所で参加学生の積極的な態度が高い評価を得た。また、4 日目には教職員による相互交流事業の打ち合わせも持たれた。また、参加学生による帰国報告会が 10 月に開催された。

【訪問日程】

日付	内容
9 月 16 日(金)	移動；　盛岡→仙台→北京(北京泊)
9 月 17 日(土)	移動；　北京→ウルムチ　　ウルムチ市内見学(ウルムチ泊)
9 月 18 日(日)	トルファン見学　　石河子へ移動
9 月 19 日(月)	【午前】表敬、学内見学 【午後】岩手大学学生によるプレゼンテーション、座談会、歓迎夕食会
9 月 20 日(火)	【午前】中国事情および中国語講座 【午後】見学(博物館、学生寮)
9 月 21 日(水)	見学；　綿花畑、砂漠　　晩餐会
9 月 22 日(木)	【午前】授業見学 【午後】(学生)研究室見学、日本語クラス見学 (教職員)交流打ち合わせ　　送別会
9 月 23 日(金)	移動；　石河子→ウルムチ→北京(北京市内見学)
9 月 24 日(土)	移動；　北京→仙台→盛岡

3. 交流実績、効果

(1)学生交流

今年度から学生交流が始まり、その最初の事業として石河子大学訪問事業が実施された。移動に長時間とられるため実質的な交流事業は1週間という限られたものだったが、学生が積極的に各プログラムに参加し、石河子大学関係者から高い評価を得た。

引率の小笠原教員は以下のような評価を記した。

1) 学生の行動について:比較的に纏まり良く行動していたように見受けられた。中国の一般の人々とは、空港、機内、町での買い物における店員などと各自の力量で話し掛けたり、話し掛けられたりしながら多くの関わりを持ったようである。
2) 食事について:食事は食材が比較的豊富で、栄養の偏りは日本より心配ない。しかし、香辛料に慣れていない為、腹痛を起す学生がでたが、帰国まで大事に至らず無事過ごすことが出来た。
3) 学生間の交流:学生同士の接触する時間が少なかったように思うが、各自各々の観点と力量で交流し、中国事情を感得したようである。
4) 宿泊について:石河子大学内の専用ホテルで、日本の中級ホテルのツインルーム相当であり、大変厚いもてなしを受けた。食事は教職員専用の食堂や学生食堂にある個室が用意されたが、食事内容は学生と同じものであるとの事であった。
5) その他:心配された反日感情の捌け口の対象とされるようなことはなく、どこでも穏やかに移動することが出来た。

(2)交流打ち合わせ

石河子大学からは楊副学長、張国際交流センター長、岩手大学からは堀江センター長、小笠原助教授が参加して打ち合わせが行われた。今回の訪問目的は、センター長交代の挨拶、今回の交流の視察、および今後の交流事業打ち合わせであった。打ち合わせでは(1)学生交流、(2)研究者交流、(3)日本語教師派遣、(4)図書館交流について確認が行われた。図書館交流はすでに職員相互訪問、および資料交換が実施された。日本語教師は、8 月に派遣が行われた。来年度も継続して、1 年間派遣予定であるが、日本語教育専攻の学生の派遣は人材不足のため困難であり、他の専攻分野の人材が日本語教師として派遣される可能性の高いことを伝え了承を得た。研究者交流は JICA との連携事業が計画されていたが、口蹄疫のため、今回は見送りとなった。その外、農学部関係で、期間一週間の短期での受け入れは実現した。長期の受け入れについては、受け入れ費用の予算のことがあり、文部科学省の留学生枠で申請したい。さらに、教員交流では、学位取得のため石河子大学の教員派遣の希望があるが、奨学金が派遣条件となっているため、推薦順位の配慮等検討することとした。(筆者注:文部科学省奨学金申請の学内審査で石河子大学推薦教員の推薦順位が低くなり、留学派遣は見送りとなった。)今後も引き続き各種交流事業を推進するため、具体的な検討を継続させることで合意した。

4. 今後の課題

引率教職員の小笠原助教授、崔職員から以下のような課題が指摘された。

1） 派遣学生の選考時、語学力（中国語または英語）や特技を選考条件とすべきである。
2） 中国語や中国の文化、習慣などについて事前研修を行う。
3） 募集時期を早め、準備期間を長くする。
4） トラブルに対処できるよう、旅行会社や受け入れ機関と準備すべきこと等について事前連絡を取るようにする。
5） 長い移動時間を有効利用するため、学生達に中国ガイドブックなどを用意させ、移動中に読ませておくとよい。
6） 今回、現地で岩手大学卒業生が案内等を行った。今後も卒業生を活用すべきである。
7） 学生同士の交流時間をもっと長く取るべきである。
8） 研究室訪問では言葉の壁を感じた。派遣学生の選考の際、語学力を条件に入れるべきである。
9） 疲れや不慣れな環境のため、体調を崩す学生もいた。薬の携帯は必須である。また、スケジュールに余裕を持たせたほうがよい。
10） 参加学生に対して交流事業参加に際し、明確な課題を与えるべきである。単なる交流ではなく、何か学び取る機会としたほうがよい。

初回の学生派遣事業として以上のような課題が明らかになったが、次年度は語学研修等を積極的に取り入れ、短期研修の形で単位化できるような内容のプログラムに発展させたい。

（文責：松岡洋子）

石河子大学学生受け入れプログラム実施報告

1．岩手大学派遣メンバーと石河子大学担当者

学生交流事業の一環として、10月は石河子大学からの訪問団受け入れ事業を行った。石河子大学の5学部（岩手大学に関係分野のある学部）からの代表の学生が1名ずつと引率教員2名の計7名の訪問団であった。メンバーは以下のとおりである。

＜学生＞

卒　新勝(男)　Bi XinSheng　機械電子工程学院　大学院2年

袁　民耀(男)　Yuan MinYao　政法学院　学部4年

王　彦波(男)　Wang Yanbo　農学院　学部4年

馬　暁菁(女)　Ma XiaoJing　動物科技学院　学部3年

付　蓉(女)　Fu Rong　文学芸術学院　学部2年

＜引率教職員＞

楊　衛華(女)　Yang WeiHua　学工部長

高　卉(女)　Gao Hui　国際交流中心主任

2．日程および交流概要

受け入れ準備は8月から始められ、スケジュール作成、宿舎および交通機関等の手配、訪問先研究室教員および受け入れ学生ボランティアとの打ち合わせ等が国際交流センター教員と国際課職員によって進められた。また、情報メディアセンター図書館、ミュージアム見学、全学共通教育科目英語授業の体験、研究室訪問などの実施に当たり全学的な協力、支援を得た。さらに、学生同士の交流を深めるため、歓迎会、交流会等で9月の派遣事業に参加した学生たちを中心に、本学サークル（三曲、競技舞踏部、しどろもどろ)、ボランティア等の多くの学生がプログラムの運営に協力した。訪問した研究室は以下のとおりである。なお、研究室の訪問にあたり、通訳として本学学生の協力を得た。訪問した研究室は以下のとおりである。

＜学生の訪問先研究室＞

卒　新勝；農学部(農業機械関係)担当:武田純一　(通訳:張　会均)

袁　民耀；人文社会科学部(法律)担当:丸山仁　(通訳:権　慶梅)

王　彦波；農学部(林学)担当:壽松木章、澤邉攻、小藤田久義、白旗学(通訳:何　暁嵐)

馬　暁菁；農学部　獣医関係の各研究室(通訳・案内:岩崎　絢子)

付　蓉；教育学部(音楽)　担当:佐々木正利(通訳:姚　暁艶)

＜スケジュール＞

日付	活動内容
10月23日(日)	移動:北京→仙台→盛岡　　歓迎夕食会
10月24日(月)	【午前】学長・副学長表敬訪問　大学紹介　サバイバル日本語講座
	【午後】学内見学;ミュージアム本館、農業教育資料館、図書館 学長主催歓迎会
10月25日(火)	【午前】英語授業参加　日本語授業参加
	【午後】買い物(アネックスカワトク)　着物体験　わんこそば体験
10月26日(水)	【午前】研究室訪問 【午後】石河子大学紹介および質疑応答　国際交流会館見学 カラオケ交流
10月27日(木)	市内および近郊見学 石割桜、岩山展望台、中央公民館、イオンショッピングセンター、 デンコード、小岩井農場、手作り村 夜;副学長主催送別会
10月28日(金)	沿岸部見学（宮古浄土ヶ浜、グリンピア田老） 夜;農学部主催夕食会
10月29日(土)	移動:盛岡→東京(日本大学訪問)

3．交流効果と今後の課題

今回の学生受け入れ事業では、5学部の代表5名との交流が行われた。受け入れに際しては短期間でできる限り学生同士の交流が図れるよう、9月に訪問した5名の学生の協力を得てプログラム作成を行った。中国訪問時よりも学生同士が親密にすごす時間が増えたことが一番の効果である。学生たちは帰国後も電子メール等で連絡を取り合い、お互いの進路や現在の研究等について情報交換している。大学間交流では、学位取得、研究実績など目に見える効果が得られることも重要である。しかし、日中関係が政治的に多くの課題を抱えている時期に、一人ひとりの学生同士が人間として語り合い、お互いの国、個人について主体的にかかわることができたことも大きな成果といえよう。ただ、交流のできた学生数は限られたものであり、今後は全学の多くの学生たちに関心を持たせるような改善が求められる。

また、事業経費として、石河子大学から仙台までの移動費は石河子大学が、仙台から東京までの移動費、宿泊費（食費）、交流事業にかかる経費は岩手大学がそれぞれ負担した。しかし、大学の経費が十分ではない状況で今後、同様の事業を継続することについては経費の使途を改善すべきである。たとえば、公的な宿泊研修施設の利用、見学、文化体験が大半を占めるプログラムではなく、双方の大学の参加学生が課題を発見し解決する活動が中心となるプログラムの設定など、限られた経費で最大の効果を得られる事業にすべく再検討を行いたい。

（文責:松岡洋子）

石河子大学日本語教師派遣事業報告

派遣期間 ： 平成 17 年 8 月 17 日～平成 18 年 8 月 16 日(1 年間)

派遣教師 ： 佐々木仁美(岩手大学大学院教育研究科修士 1 年)

Ⅰ. 派遣までの経緯

平成16年度に猪内前学術担当理事が石河子大学を訪問した際に石河子大学学長と交わした覚書に基づき、平成 17 年度 8 月より日本語教師 1 名が岩手大学から派遣された。当初、2 名の教師派遣要請があったが、日本語授業の受講希望者数状況から 1 名の派遣になった。日本語教師の選定にあたっては、日本語教育の知識があること、中国語能力を有することが優先され、教育研究科修士 1 年の佐々木仁美氏が派遣された。

Ⅱ. 派遣前研修

1. 日本語教育研修

派遣前 3 ヶ月間、国際交流センターにおいて、日本語教育研修を実施した。研修内容は以下のとおりである。教授経験がほとんどないため、実習を多く取り入れ、即戦力となる知識、技能の養成を目指した研修を実施した。

1) 日本語教育基礎知識習得研修：日本語教授法等の概論書の講読、教科書分析、教案作成方法講義等(週 1 回)
2) 授業見学：日本語特別コースの授業見学と見学レポート作成(週 2～3 回)
3) 授業実習：日本語特別コースの中級前半レベルの授業実習(週 2 回。見学含む)
4) カリキュラム作成：授業使用予定教材による 1 学期間のカリキュラム作成

2. 中国語研修

佐々木氏は中国に 1 年間の留学経験があり、中国語研修は実施しなかった。

Ⅲ. 任期中の担当業務

1)前期の担当授業科目名と時間帯・単位数・受講対象・受講者数

日本語(一)単位数 4 一学期 72 時間 19 週(週に 2 コマ 計4時間)

受講者 外国語学院英語専攻 3 年生 58 人

日本語(三)単位数 3 一学期 54 時間(週に 3 コマ 計 6 時間)

9・12 月の 2 ヶ月(10～11 月は 4 年生が教育実習のため授業なし)

受講者 外国語学院英語専攻 4 年生 60 人

日本語促成班　10 月 11 月2ヶ月間の週末 1 日 3 時間の初級クラス

英語専攻以外の学生が自由に受講できるが、受講料は 1 人 120 元。

2)後期の担当授業科目名と時間帯・単位数・受講対象・受講者数

日本語(二)　前期の日本語(一)の続き

受講者　外国語学院英語専攻　3 年生　58 人

単位数　4　一学期 72 時間　19 週

日本語(二)　受講者　科技学院　英語専攻　3 年生 30 人

単位数　4　一学期　72 時間　19 週

(前期は中国人教師が教えていた)

外国語学院英語専攻の授業とは教科書が異なる。

日本語促成班　4 月 5 月2ヶ月間

週末 1 日 3 時間の初級クラスと中級クラス　約 50 人

英語専攻以外の学生が自由に受講できるが、受講料は一人 100 元。

3)その他の業務

教職員対象に日本語指導を個別に依頼される場合もある。

Ⅳ. 今後の課題

◎以下の課題に対処するため、石河子大学の日本語科目担当教員との連絡を密にする必要がある。

- 教科書の選定について相談する
- 対象学生の日本語学習歴を事前に把握する
- 業務の詳細について事前に把握し、準備を進める

◎　派遣教師の選定について、枠組みを定める必要がある。

◎　評価基準を定め、授業の成果について検証を行うべきである。

◎　教材の寄贈など、教育環境の整備に努める。

◎　派遣教師の支援体制を確立する。

(文責:松岡洋子)

海外派遣のための語学支援

1. スーパー・イングリッシュ

スーパー・イングリッシュは留学準備のための英語集中コースとして位置づけ、大学の教室を使用するが大学のカリキュラムには組み込まれていない。短期間での効果を上げるために受講資格を設けた。概要は以下の通りである。

開講期間(11週間): 前期 4月18日～7月8日、 後期 10月5日～12月21日
授業時間:月、水、金の18時20分～19時50分
受講資格:学部は問わない。英語検定準1級以下2級以上、TOEFLまたはTOEFL-ITPで480点以上530点未満、またはTOEIC700点以上
募集定員:15名
受講料:有料

教員は外部から雇用した、英語を母国語とする英語教育の専門教員で、英語圏で実施されているESLプログラムに準じた構成である。授業は全て英語のみで実施した。曜日毎に聴解、読解、作文の各スキル分野に特化した授業を行った。受講者数は表1の通りである。

表1. 受講者数

	2005年前期					2005年後期				
所属学部	人社	教育	工学	農学	合計	人社	教育	工学	農学	合計
人数	3	3	1	3	10	0	1	3	1	5

終了後のアンケート調査では内容について満足であると答えているが、受講資格が英検2級では低すぎるという指摘が見られた。しかし、英検準1級を最低条件とした場合、受講できる資格のある学生数が激減することが予想されるので、指摘に妥当性があると推察されるものの今後も受講資格はこのままで据え置くこととする。

2. ムービーナイト

英語に接する機会を増やすため、毎月第3木曜日に映画の上映会を始めた。上映する映画は英語で音声を聞きながら字幕も英語で表示することにより、目と耳で内容理解ができるように配慮している。会場ではワークシートを配布し、映画終了後に理解度をチェックして翌日ウェブで正解を確認できるようにしている。

まだ広報が不十分であり、試験期間や大学祭準備期間に重なるなどして参加人数が伸びていないので、今後改善に努めたい。

表2. 上映作品

月	上映作品	参加人数
10月	Home Alone	9
11月	Castle in the Sky	11
12月	Home Alone 2	0
1月	Harry Potter and the Sorcerer's Stone	4

(報告:尾中夏美)

海外留学情報提供

海外の大学との学生交流や海外研修プログラムに関心をもってもらうと同時に、基礎語学力の習得を支援する目的で以下の事業を実施した。

1 海外留学・研修オリエンテーション

海外留学・研修オリエンテーションは例年5月に開催していたが、他のオリエンテーションと重なるので、時期をずらして6月に開催して参加状況を観察することにした。実施日程と参加人数は以下の通りである。

実施日程:6月16日(木) 午後4時30分～午後7時
参加人数:約60名

前日には大学生協主催の TOEIC 体験と講演会も催され、この二日間を大学生協との国際教育共催事業と位置づけた。オリエンテーションの内容は、留学全般の情報提供、各学部主催プログラムの紹介、全学対象交換留学の紹介、TOEFL と国際ボランティアプロジェクトの紹介、体験発表、質疑応答であった。

2 個別留学相談

個別留学相談は学生それぞれの授業時間との兼ね合いもあるので、不定期に実施している。相談受付のポスターは常時掲示しているので、希望者は国際課を通すか直接メールで相談時間の予約を入れてくる。

相談内容は語学研修、ワーキングホリデー、交換留学と多岐に渡るが、学生側の情報不足がかなり見られるので、人生設計や将来の希望職種などについても話を聞きながら相談に応じている。また、高い語学力を求められる留学に関しては、準備方法などについても助言している。

表1. 留学相談のべ件数

月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	合計
件数	5	4	5	3	1	0	5	4	2	3	0	4	36

表2. 学部別相談人数

人社学部	教育学部	工学部	農学部
9	7	4	7

(報告:尾中夏美)

国際交流センターの広報関係活動報告

1. 海外でのPR活動と情報収集の意義

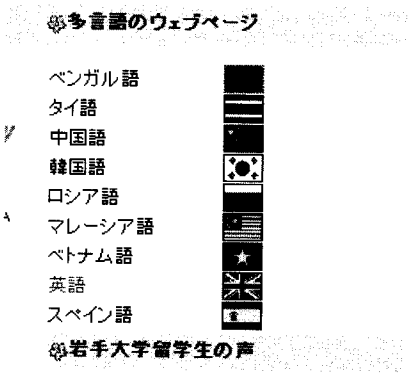
日本の大学への留学希望者の多くは、東京などの大都市圏に留学を希望する。生活費がかかるもののアルバイトが地方に比べて豊富にあるし、日本語学校などが集中していることもその要因であろう。しかし、地方大学の実情についての情報不足や偏見なども多分に作用していることが留学フェアなどに参加してみて推測される。岩手の地理上の位置がわからないだけでなく、「先生はなまりがひどいのではないですか？」などといった質問が沢山寄せられる。卒業生から「せっかく学位まで取ったのに、友達からは『そんな大学は知らない』と言われて悔しい思いをするので、もっと知名度を上げて欲しい」と言われたことがある。知名度が低く偏見を持たれた大学に、熱意ある質の高い留学生が出願してくれることを期待するのはあまり現実的ではないだろう。大学についての正確な情報を発信するとともに、留学を希望する学生にどのようなニーズがあるのかを把握し、的確に必要な情報を提供することが重要である。

2. 多言語ホームページへの取り組み

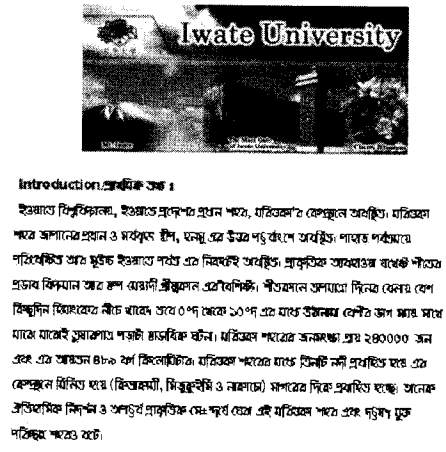
国際交流センターではセンターのホームページ上に多言語のウェブページを載せている。現在日本語、英語を含めて10カ国語対応となっている。

多言語ホームページの立ち上げに関しては、留学生対象にホームページ作りのワークショップを実施し、その研修受講者を各国別チームに編成してアルバイトとして雇用し、あらかじめ指定した内容を翻訳してもらった。内容は大学の概要や学部、生活環境、自分が留学してみての印象など簡単なものである。

多言語ウェブページ



ベンガル語のウェブページ



この取組ではチームのホームページ作りに関する技術力が大きく影響することがわかった。また、母国語でのキーボード操作に不慣れなために入力に時間がかかったり、アルファベット以外の文字は文字化けを避けるために画像としてはめ込むなどの対応が必要であった。

今後は更新作業の省力化のために Wiki を活用し、日本語も平易な日本語版を追加するなどして情報提供の環境整備をしていく予定である。

3. 日本留学フェア

3.1 韓国

韓国で開催された JASSO(日本学生支援機構)主催の日本留学フェアは釜山とソウルの二会場で一日ずつ開催された。 教員 1 名、事務職員 1 名で参加したが、事務職員は朝鮮族の中国人だったので通訳を介せずに直接様々な質問に答えることができた。ソウル会場では帰省中の韓国人留学生が通訳を手伝ってくれた。

日本留学フェア(韓国)概要	
開催日程	釜山:9 月 2 日(金)、ソウル:9 月 4 日(日)
開催場所	釜山:釜山ロッテホテル
	ソウル:セントラル・シティ
来場者数	釜山:1232 名
	ソウル:256783 名
岩手大学ブースへの来訪者数	釜山:22 名
	ソウル:55 名

韓国では人文社会科学部への編入学に関する質問が多かったが、ソウル会場では工学部、農学部への質問もあった。

今回、韓国語の資料を増やした。昨年も使用した大学紹介チラシと大学紹介CDの他に、大学のポスター、大学入試案内、日本語授業時間割、宿舎紹介、岩手県紹介パンフレットなどを用意した。韓国は保護者が留学に熱心なので、説明のために韓国語の資料が必要不可欠であると思われる。

韓国では一般に留学情報センターのような機関が韓国の留学希望者に情報提供しているので、事前に主な機関にメールで連絡してフェア会場にパッケージ資料を取りに来てもらうよう手配した。

3.2 タイ

(1) 日本留学フェア

教員1名、事務職員1名で参加したが、今回も本学卒業生が通訳をしてくれた。資料は本学紹介のチラシ、CDの他、ポスター、日本語授業時間割、大学入試案内などをタイ語で準備した。

日本留学フェア(タイ)概要	
開催日程	11 月5日(土)、6日(日)
開催場所	インターコンチネンタルホテル
来場者数	3,967 名
岩手大学ブースへの来訪者数	137 名

二日間のフェアでは工学部と人文社会科学部への問い合わせが一番多かった。その中でも工学部は機械工学やシステム関係の割合が高く、人社は経営・経済、日本の歴史や日本語学への関心が高かった。

会場には成績証明書のコピーなどを持ってきて受け入れの可能性を聞く留学希望者もいる。今回は

そのような社会人3名から成績証明書などの書類を預かって、帰国後もメールでやりとりしながら研究生としての受け入れ支援をした。残念ながら来日までに到らなかったが、このようなアプローチが有効であることがわかった。

(2) 学校訪問

留学フェアの前後に大学のプロモーション活動としてバンコクにある高校2校を訪問して、岩手大学の紹介を実施した。いずれも外国語として日本語を教えている学校である。時期的に新学期が始まる直前の学校が多いため、難しい面もあるが可能な限り続けていきたい。

3.3 NAFSA(米国国際教育学会)

前年に引き続きの参加である。JASSOが用意した日本の大学の集合展示ブースで、本学に割り当てられた時間帯にブースにおいて説明を行った。米国、カナダの協定大学の担当者とは事前に打ち合わせておいたので、ブースに立ち寄ってくれて色々な情報交換が行え互いの要望を伝え合うことができた。会場では事前申し込みを必要とするワークショップ、当日参加の研究発表などが数多く用意されていて、国際教育関係者の研鑽の場ともなっていた。

日本留学フェア(米国)概要	
開催日程	2005年5月31日(火)～6月3日(金)
開催場所	米国シアトル市ワシントン州立コンベンション・トレードセンター
参加登録者数	6,617 名(内国外参加者約 1,700 名)
日本からの参加大学数	25 大学

3.4 EAIE(欧州国際教育学会)

本学の中期目標に「広く世界から留学生を受け入れる」とあるが、これまでヨーロッパからの留学生受け入れ数は少なかった。ヨーロッパとの学生交流を活発に行うための情報収集とネットワーク構築のために初めてヨーロッパにおける留学フェアに参加した。

初回の参加であったため情報収集が主となった。オーストリアの工学系大学から学生交流についての問い合わせがあった。しかし、受け入れの為には英語での授業開講などいくつか解決しなければならない課題があることがはっきりした。

日本留学フェア(欧州)概要	
開催日程	2005年9月15日(木)～17日(土)
開催場所	ポーランド国クラクフ市ヤギェウォ大学講堂ほか
参加数	約 2,000 名
日本からの参加大学数	16大学

また、本学教員と面識がある、友人であるといった教員からのコンタクトもいくつかあったので、これについては帰国後本学の教員に引き継いだ。

4. 進学説明会（東京）

本報告書の「進学説明会」の項を参照されたい。

5. 活動の評価と今後の課題

5.1 岩手大学の知名度を上げる努力

海外でリクルート活動をしていて痛感するのは、現地での知名度の低さである。「岩手はどこにあるのか」から始まって、「先生はなまりが強くて標準的な日本語が話せないのではないか」といったことに至るまで、魅力ある留学先としてのイメージができるまでの道のりが遠いことを感じる。

一方で東京の進学説明会においてタイ人学生が岩手大学という名前をあらかじめ知った上でブースに来てくれた。本学が毎年参加しているバンコク市で実施される日本留学フェアにおいて本学ブースでの説明を聞いたようである。今後も名前を聞いたことがあるというレベルまで持っていく地道な努力が引き続き必要である。

5.2 多言語による情報提供の充実

留学生への情報提供は英語は言うまでもなくできるだけ多言語での対応をめざす必要がある。多くの留学生はインターネット・カフェなどから本学のウェブにアクセスしてくるようであるが、そのような環境では日本語フォントが入っていないことが多い為、文字化けなどが生じて十分な情報を得ることができないようだ。英語ではこのようなことが避けられるので、最低限英語での情報提供を充実させるとともに、大まかな情報は多言語で対応していきたい。

（文責：尾中夏美）

進学説明会

1.「2005 年外国人学生のための進学説明会」報告

主 催　　独立行政法人　日本学生支援機構(JASSO)

日 時　　7 月　3 日(日)　10 時 ～ 16 時

会 場　　横浜会場:パシフィコ横浜　展示ホール D

担 当　　小笠原　洋光

　　崔　華月

参加大学　　165　校(私立大学、短期大学を含む)

総入場者数　1314 人(H15 年 4367 人、H16 年 3967 人)

1.1 岩手大学会場訪問者(記帳者のみ)

外国人学生総計 ： 16 名 (H16 年度 36 名　　H15 年度 69 名)

国　別 ： 中国 9名　マレーシア 2名　タイ 5名

希望学部等 ：人文社会科学部(9名;経済,法律,社会,心理) 編入学、大学院希望者　各1名

教育学部(教育)1名　工学部(電気,情報,機械) 5名　農学部(生物応用)1名

日本語学校等来訪者 ： 総計5名

新宿日本語学校　　アジア学生文化会館(ABK)　　富山情報ビジネス専門学校

TIC 日本語学校　　同志社

1.2 主な相談事項(昨年とほぼ同じ内容)

入試について:入試科目、手続き(入学願書と共に提出しなければならない必要書類)

入学割合･･･受験者数に対する合格率

納付金:学費、入学金など

授業料の納入方法･･･分割納入は？　減額及び免除の規定は？

奨学金について: どんな奨学金制度があるか？　何人ぐらいもらえるか？

生活状況:生活費

宿舎について:入居状況

1.3 その他の質問事項

- 過年度の留学生の受験状況
- 編入学の方法

2. 平成17年度国費(学部進学)留学生への大学進学説明会報告

日　時　平成17年10月27日(木)13時20分～16時30分

場　所　東京外国語大学留学生日本語教育センター　さくらホール

担　当　小笠原　洋光

　　高田　千佳

対象者　69名(文科系39名、理科系30名)

2.1 岩手大学ブース来訪留学生

（グループ来訪・・・7名）

	国　籍	専　門	性別
1	ベラルーシ	総合人間学	女
2	インドネシア	国際関係学	男
3	ロシア	電気電子工学	男
4	コロンビア	生物工学	男
5	モンゴル	経済学	男
6	モンゴル	国際関係学	女
7	タンザニア	情報工学	男

（個別来訪・・・3名）

	国　籍	専　門	性別
8	マレーシア	心理学	男
9	タイ	法　学	男
10	ウズベキスタン	経営学	男

2.2 留学生からの質問事項

学部・学科及び授業について

- 岩手大学で心理学、経営学は学べるか
- 人文社会科学部の人間科学課程について教えてほしい
- 自分は情報工学を専門としているが、岩手大学の情報システム学科について教えてほしい
- 英語で受けられる授業があるか、日本語の授業はあるか．　レポートを英語で提出可能か
- 人文社会科学部の法学・経済コースのゼミナールについて教えてほしい。1年次にゼミナールはないのか

宿舎について

- 岩手大学には寮はあるか．寮に入居の際、条件はあるか
- 国際交流会館に入居可能な期間はどの位か、家賃と共益費はいくらか

生活環境について

- 盛岡で生活するとしたら1年でどのくらいの生活費がかかるか。
- 岩手県の位置と盛岡市の気候・自然・人口・生活環境について、盛岡は冬に雪がふるか

その他

- 東ヨーロッパからきている学生はいるか。
- 岩手県には国立公園があるか。
- 留学生の支援としてどのようなものがあるか。

（文責 ： 小笠原　洋光）

タマサート大学生との交流会報告

タイのタマサート大学で日本語学科に所属する学生が日本研修として10月に岩手県八幡平市にホームステイした。この期間中に日本の大学祭を見学する目的で以下の日程で本学を訪れた。

日時:平成17年10月22日(土) 午前10時すぎ～
参加人数: 学生16名、 引率教員 1名

会議室での日本人学生との交流会の後、本学学生がタイ人学生をグループごとに分かれて案内した。最後にタイの学生が伝統舞踊を披露して交流が終了した。タイの学生にとって珍しい体験ができたものと思われるが、日本人学生の方は大学祭対応で忙しく、タイの学生との交流に時間が割ける学生の数が限られていたのが課題であった。

(文責:尾中夏美)

ボランティアチューター・会話パートナー制度

科目等履修生を除く全ての留学生に対して、大学が経費負担して有償のチューターを留学生に付ける制度があるが、それ以外の留学生でも渡日間もない留学生で希望する者には、日本人学生を無償ボランティアのチューターとしてつけることにしている。また、留学生で日本人と日本語会話の練習を希望する者もいるので、これは会話パートナーとして日本人学生に登録してもらうことにしている。これらのボランティア活動に対して日本人学生対象のオリエンテーションを以下の要領で実施した。

日時:平成17年5月13日　午後4時30分～5時30分
参加人数:　18名

オリエンテーションの内容はそれぞれの活動の内容説明と体験者による体験談などである。登録者には必要があるときに担当教員から一斉送信で登録者の携帯電話やメールに連絡がいくようにしている。会話パートナーには留学生とのペアワークの相手として日本語の授業に入ってもらう場合もある。日本人学生にとっても留学生との交流を希望しながら接点が自分では見つけられない者には便利な制度といえよう。

（文責:尾中夏美）

国際交流会館活動記録

1. 会議等

1.1 国際交流会館オリエンテーション(前期) ・・・ 英語(尾中先生)と中国語(崔国際課職員)の通訳

日 時 : 平成 17 年 4 月 22 日 18 時 30 分 ～ 20 時

担 当 : 国際交流センター教員、国際課職員

内 容 : 年度始めで、新旧の会館住人の顔合わせと会館利用の説明会

1) はじめのことば(会館主事挨拶;集会の目的を主とした話)

2) スタッフの紹介

3) 会館で生活する上でのルールの説明・・・寺田会館事務員
国際交流会館入居者の心得、家庭用ゴミの処理について

4) 懇親会;入居者自己紹介、ボランティア団体(AVIS)の活動紹介

5) おわりのことば

(あとがき:始終なごやかな雰囲気で行われ、留学生もしっかり説明に耳を傾けていて、集会は非常にスムーズに進んだ。入居者紹介の際はユーモアを交えた自己紹介があり歓声があがった。後かたづけも留学生の協力があり、作業する中で入居者相互の和がさらに深まったと思われる)

1.2 国際交流会館オリエンテーション(後期)

日 時 : 平成 17 年 10 月 28 日 18 時 30 分 ～ 20 時

担 当 : 国際交流センター教員、国際課職員

(*) 前期と同様の内容・方法で行う

1.3 岩手大学国際学生宿舎 H17年度留学生オリエンテーション

日 時 : 平成 17 年 4 月 18 日 18 時 30 分～20 時

場 所 : G21教室

担 当 : 学生支援課職員 国際課教職員

出 席 : 北謳寮、紅梅寮自治会役員 数名
留学生 11 名(北謳寮 5 名／9 名、紅梅寮 6 名／13 名)

内 容 : 学生寮の運営を効果的に進めるに当って、留学生と日本人学生の相互理解を図る。

1) 学生支援課より、資料に基づき説明

2) 国際交流会館主事より昨年の問題を踏まえた上で、この会への出席の趣意説明

3) 北謳寮、紅梅寮の両自治会役員から、自治会活動についての説明と、留学生への連絡のための責任者の選出依頼

（あとがき：学寮の在り方について、日本の伝統的な部分は残しつつも現代に即した考え方を取り入れ、学寮自治の習慣を見直し、生かすべき点、改めるべき点を探りつつ、運営をしていくことが望まれる。）

2. 平成 17 年度国際交流会館避難訓練

会館居住者の安全確保ために、本年度も昨年同様火災時の避難訓練を盛岡消防署（上田署）の協力を得て計画し、実施した。訓練終了後、消防署の方から種々の災害時の対処法について解説をしていただき、火災のみならず地震など日本における自然災害発生時における対応方法への理解を深めた。

国際交流会館避難訓練実施報告

【実施日時】　平成17年12月10日（土）　午前10時～午前10時40分

【天　候】　雪

【訓練指導】　盛岡中央消防署上田出張所消防署員

【参加人員】　会館居住者11名、小笠原会館主事、国際課　高橋、高田

【訓練概要】
- 2階ランドリー室からの出火を想定し、会館内に緊急放送（居住者により日本語・英語・中国語）
- 盛岡中央消防署上田出張所への通報
- 会館前庭への避難、人数確認し、消化器使用訓練

【実施内容】

AM 9:30　消化器・灯油・バケツ等準備、出火想定場所表示

AM 10:00　火災警報鳴動

AM 10:00　館内放送　担当：ﾌｨｰﾙｽﾞｳｨﾘｰｼﾞｰﾝ（日本語及び英語）、張　継元（中国語）

AM 10:02　上田出張所への通報（ 担当：ﾌｨｰﾙｽﾞｳｨﾘｰｼﾞｰﾝ ）

避難開始

AM 10:08　避難完了・会館前集合人数確認　11名

AM 10:10　消火訓練（訓練：張継元・呂仁国・許佳・ｸﾙｽﾛｳｴﾅﾊﾞﾝｶﾞﾆﾊﾞﾝ）
（灯油を燃やし、消化器の実技訓練）

災害時の対処法についての全般的な解説

AM 10:20　避難訓練終了後、会館集会室に集合し、上田消防署員より下記各事項についての解説、および質疑応答
- 盛岡で起こり得る災害についての対処法
- 避難の際の消火確認について
- 消防署等への通報について
- 地震の際の対処法

【反 省 点】

今回の避難訓練は、各居住者への通知・ポスター掲示にも関わらず11名の参加者しかいなかった。

原因には以下のことがあげられるだろう。

- 天候に恵まれなかったこと
- アルバイトや試験などで、避難訓練の前に外出する居住者が多数いたこと
- 館内放送が部屋でよく聞こえない事

今後、改善を要する点等については、下記事項があげられる。

- 館内放送の修繕(各居室への放送)
- 館内放送装置の使用方法および放送内容の掲示(日本語・英語・中国語等)
- 非常時の通報方法についての掲示;これには、連絡先及び会館住所も記し、英語・中国語の説明文を併記する

3. 施設利用関係

留学生の日本語の学習、情報交換や交流を深めるために施設使用許可書を備え、広く施設活用の便宜を図った。 本年度の利用状況を下表に記す。

岩手大学国際交流会館の利用(平成 17 年度)

年 月 日	時 間	目 的 (世話人)	参加人員
17. 4. 16	12:30 ～ 16:00	留学生との懇親・懇談会(第 3 土曜日) (AVIS)	20 名
17. 4. 23	10:00 ～ 18:00	新入生歓迎会(マレーシア留学生)	40
17. 4. 24	14:00 ～ 16:00	新留学生の歓迎会 (AVIS)	40
17. 5. 15	9:30 ～ 12:00	活動説明会(世界とあそぼう・じゃらんじゃらん)	20
17. 6. 23	18:30 ～ 20:30	集会(岩手大学留学生会)	50
17. 6. 25	17:00 ～ 20:00	マレーシア学生交流会	50
17. 7. 1～2	18:00 ～18:00 (2 日)	留学生ガーディン・パーティ	100
17. 9. 30	18:00 ～ 22:00	集会(岩手大学留学生会)	50
17. 10. 7	19:00 ～ 21:00	大学祭の打ち合わせ(岩手大学留学生会)	20
17. 10. 11	11:00 ～ 12:00	附属養護学校と留学生との交流	20
17. 10. 13	11:00 ～ 12:00	附属養護学校と留学生との交流	20
17. 10. 30	11:00 ～ 16:00	新留学生歓迎会(AVIS)	30
17. 11. 12	12:00 ～ 14:00	チューターとの交流	7
17.11.2～12.28	13:30 ～ 15:30	日本語学習(毎週;月、水、木、金)	3
17. 12. 10	13:00 ～ 17:00	忘年パーティー(AVIS)	20
18. 1. 3	10:00 ～ 14:00	餅つき大会(地球市民の会)	50
18. 1. 10	9:00 ～ 12:00	お祈り(イスラム)	30
18. 2. 19	19:00 ～ 22:00	送別会(インドネシア)	20

4. 駐車場の管理について

会館専用の駐車場に無許可の車が常時駐車されており、環境整備等に支障をきたすので管理強化を行う。昨年同様の管理を行い、教職員・学生への駐車場利用の規則遵守を呼びかけた。

5. その他

環境整備 ： 会館庭園内の樹木の剪定をおこなった。また、除草について今年度は、業者による刈り払いを実施した。

（文責：主事　小笠原　洋光）

留学生実地見学旅行報告

毎年30～40名の留学生(時にはプラス若干名の日本人学生)が参加して毎年実施される見学旅行であるが、2005年は9月5～7日、2泊3日の日程で新潟・佐渡方面に赴いた。

今回の参加者は、留学生20名と引率の教職員3名の計23名。例年よりやや少なめであった。出発の2～3日前から大型台風が日本に接近、日本海を北上して9月6～7日佐渡地方を直撃するような予報が出ており、心配であったが、予定通り決行した。

初日は朝6:30に大学をバスで出発、東北自動車道を南下して郡山から西へ向かい新潟県へ。黒塗りの大鳥居で知られる弥彦神社と、上杉謙信の居城として名高い春日山城を雨に濡れながら見学。夜は上越市のホテルハイマートに宿泊した。夕食後カラオケを楽しもうと思ったが、あいにくホテルには設備がなく、希望者がタクシーに分譲して2kmほど離れたカラオケ店へ。夜中まで大いに盛り上がった。

翌6日、直江津港から佐渡汽船で佐渡へ。幸い台風はまだ遠い西の海にあり、波も静か。昼ごろ小木港に到着、昼食後真野御陵(順徳上皇陵)を見学。順徳上皇は、1221年承久の乱に敗れて鎌倉幕府に捕らえられ、この島に流罪となった悲運の人。他にも日蓮や世阿弥など、佐渡に流された歴史上の人物は多い。その日蓮ゆかりの妙宣寺と佐渡金山跡を、続いて見学。金山跡では、江戸時代ここに送られてきて重労働を強いられ命を落とした、大勢の金掘り人足たちの哀史に思いをはせる。同夜、両津やまきホテルに宿泊。佐渡鬼太鼓、佐渡おけさの実演を楽しんだ。

7日の最終日、心配していた大型台風がいよいよ佐渡に接近。しかし9:40両津港発の汽船は、予定通り出航するという。そのあとの船は、台風の影響で全部欠航。いや～危なかった。もう少し台風のスピードが速かったら、佐渡を出ることができず、帰りが1日延びるところだった。

さすがに波が荒くなってきた日本海を渡って、12:00頃新潟港に到着。港内には北朝鮮の例の万景峰号が停泊しており、皆注目。午後は新潟大学を訪問して、同大の留学生らに歓迎され、その後バスで一路盛岡へ。20:30岩手大学に到着。

毎年感じることだが、やはりこうした実地見学旅行は、留学生たちが日本の歴史や文化、風土を体験を通して学ぶことができる貴重な機会である。今後もいろいろなところを訪れたいと思う。

(文責:岡崎正道)

平成17年度岩手大学外国人留学生スキー研修

実施要項

目　　的　　岩手大学に学ぶ外国人留学生が、スキーを通じて雪国である岩手の冬に親しむ。更に留学生相互、並びに教職員との交流を図り、留学生活の適応と留学生教育の効果を高めること

内　　容　　スキー実技指導
期　　日　　平成18年1月5日(木)～1月7日(土)(2泊3日)
実施場所　　安比高原スキー場(八幡平市安代町安比高原　TEL 0195-73-5111)
宿泊場所　　安比グランドホテル(八幡平市安比高原　TEL 0195-73-6511)
講　　師　　工学部助教授　　藤田尚毅
　　安比高原スキー場スキー指導員　7名
参加者　　外国人留学生　38名
統導者　　工学部助教授　藤田尚毅
　　国際交流センター　小笠原洋光
　　国際課　　吉田　京・大矢　真
移　　動　　借り上げバス(安比高原スキー場所有)

準備する物　　スキーウエア・手袋・帽子・ゴーグル(借りる人は不要)
　　スキー用具一式(借りる人は不要)
　　着替え

そ の 他　　※　1月 5日(木) 9時までに学生センター前に集合
　　※ 昼食は各自でとること

日 程 表

第1日目 1月5日(木)	9:00	学生センター集合(時間厳守)
	9:20	学生センター出発
	10:30	安比グランドホテル到着
	11:00	オリエンテーション
	11:30	スキー実技準備
	12:00	昼食(各自)
	13:00	実技(指導員)
	16:00	自由(入浴など)
	18:00	夕食・交流
第2日目 1月6日(金)	7:00	朝食
	9:00	実技(指導員)
	12:00	昼食(各自)
	13:00	実技(指導員)
	16:00	自由(入浴など)
	18:00	夕食・交流
第3日目 1月7日(土)	7:30	朝食
	9:00	実技(指導員)
	12:00	昼食(各自)
	12:40	出発準備
	13:00	安比高原スキー場出発
	14:20	学生センター到着・解散

北東北国立大学法人3大学外国人留学生合同合宿研修会報告

1. 実施概要

第2回目となる弘前大学、秋田大学、岩手大学の外国人留学生合同合宿研修会は幹事校が弘前大学となった。3大学担当者の事前協議において協働作業型の合宿にしたいという希望が出たので、共同調理をすることに決まった。

実施期間:2005年11月12日(土)～11月13日(日)
場所:青森県青年の家、青森産業会館、沖館市民センター
主催:北東北3大学連携推進会議教育専門委員会(幹事大学:弘前大学)
参加大学:秋田大学　11名(学生　9名、引率2名)
弘前大学　10名(学生　8名、引率2名)
岩手大学　7名(学生　6名、引率1名)　全28名
(注:岩手大学の参加者が他大学より少ないが当初予定していた学生1名が事前にキャンセルし、1名は当日体調を崩して欠席となった)

プログラム

11月12日(土)	09:20	盛岡駅北口集合
	09:40	盛岡駅西口発(高速バス)
	11:55	弘前バスターミナル着
	12:00	弘前バスターミナル11番(岩手大学乗車)出発
	12:40～13:15	昼食(道の駅「なみおか」レストラン)
	14:15～15:30	青森産業会館着　農林水産祭見学等
	16:30～17:00	青年の家着　オリエンテーション・宿泊室移動
	17:45～18:45	夕食(青年の家食堂)
	18:45～19:15	ベッドメイキング説明
	19:15～21:00	交流会(研修室)
	21:00～21:30	室長打合せ
	21:30～22:00	入浴
	22:30	就寝
11月13日(日)	06:30	起床・洗面　宿泊室清掃
	07:00～07:15	モーニングタイム
	07:15～07:45	クリーンタイム
	07:45～08:45	朝食
	08:45～09:00	出発準備
	09:00	青森県青年の家出発(借上げバス)
	09:30	沖館市民センター着
	10:00～12:00	調理体験実習(調理実習室)
	12:00～13:00	昼食
	13:00～14:00	後かたづけ
	14:00	沖館市民センター出発
	15:15	弘前駅着(岩手大学, 秋田大学・降車)
	15:55	弘前バスターミナル発
	18:10	盛岡駅西口着。解散。

秋田大学、弘前大学の参加学生はほとんどが特別聴講学生であったのに対し、岩手大学は色々なプログラムが混ざり合っての参加であった。留学生の国籍は韓国が一番多く、中国、タイ、ロシア、アメリカ、フィリピンなどであった。

2. 合宿の様子

秋田大学の借り上げバスに集合してそのままレストランで昼食を取った。移動中のバスの中で二日目の調理

の班分けが発表され、昼食時に各大学1名ずつ3人の班ごとに一緒に座って調理についての打ち合わせをするように指示された。翌日に予定された調理は班ごとに一品テーマ食材が決められていて、学生はそれを使った料理を一致協力して作るというルールが決められていた。テーマ食材は菊の花、にんじん、牛肉、イカ、タラ、ホタテ、大根、かぼちゃといった弘前の地場産品で、これを含む必要な食材をすぐ後に訪れる青森産業会館で開催されている農林水産祭で決められた予算内で購入するよう指示された。会場では試食コーナーなどもあり普段目にすることの少ない「市場」の雰囲気を味わった。

青年の家に移動してからは館内の説明があり宿泊室に移動した。夕食後研修室にて交流会を実施した。まず各大学ごとに大学の紹介をした。その後、国別早口言葉コンテストをした。各国の代表がじゃんけんであみだくじを引いて組み合わせを決め、ある国の早口言葉を別のチームがまねをして、誰が一番上手に言えたかを競うというアクティビティをした。お互いの間違いを笑い合ってなごやかな雰囲気ができた。

交流会後は室長に対する宿舎管理者からの連絡会があったが、会合の連絡が室長に徹底しておらず、また留学生にとっては説明の日本語がかなり難しかったようなので、今後は平易な日本語版を用意してもらうなどの対応が必要である。

翌日は朝食後沖館市民センターに移動し、前日に購入した食材を使ってそれぞれ調理に取りかかった。油や塩、醤油といった基本的な調味料はあらかじめ用意しておいたが、学生の希望に従ってハーブなどの香辛料を追加した。調理する料理は留学生の出身国のものに限定しなかったので、農林水産祭で得た情報で「和食」に挑戦し、ユニークな味付けをする班もあった。調理の時間は班ごとにばらつきがあったが、なんとか時間内に全ての班が調理を終了することができた。参加人数に対する食材の量がやや多かったのが反省点である。市民センターにいた日本人におすそわけした班もあった。

参考資料(アンケート結果より)(回収率　91.3%)

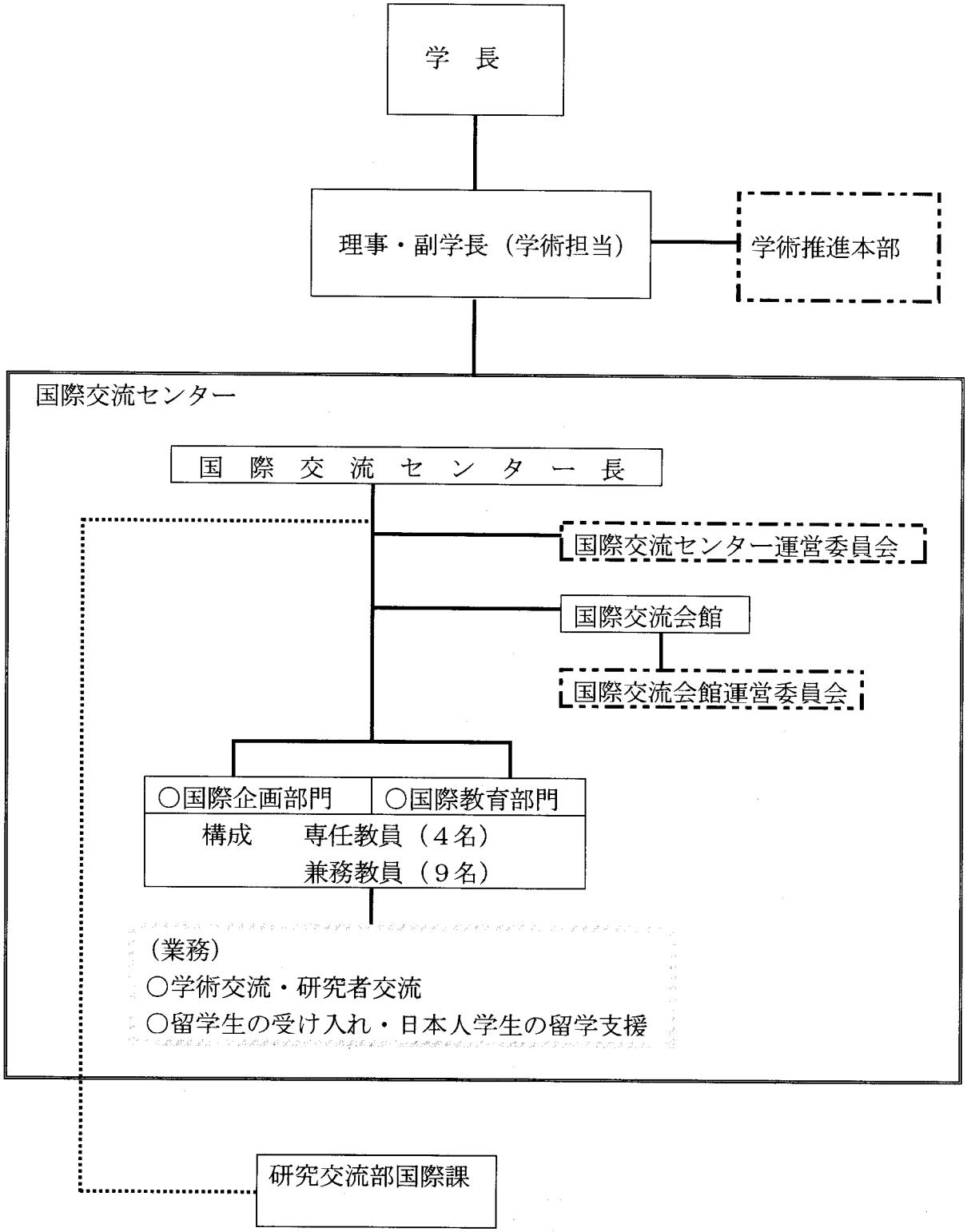
	学生数	%
1. 合宿の時間の長さについて		
ちょうどよかった	13	61.9
もっと短い方がよい	2	9.5
もっと長い方がよい	6	28.6
2. 宿泊施設について		
よかった	8	38.1
ふつう	13	61.9
他の場所の方がよい	0	0
場所はどこでもいい	0	0
3. 土曜日の午後の活動(青森県農林水産祭の見学と買い物)について		
面白かった	13	61.9
ふつう	6	28.6
違う活動をした方が良い	0	0
どんな活動でも良い	0	0
4. 土曜日の夜の懇親会について		
面白かった	12	57.1
ふつう	8	38.1
違う活動をした方が良い	0	0
どんな活動でも良い	1	4.8
5. 日曜日の調理実習について		
面白かった	20	95.2
ふつう	1	4.8
違う事をした方が良い	0	0
なんでもいい	0	0

記述式では多数意見として他大学の留学生との交流が有意義だった、色々な国の人々との交流が楽しかったし色々な国の料理が食べられたのがよかったとの感想が寄せられた。

(文責:尾中夏美)

国際交流センター組織図

○　岩手大学国際交流センター組織図



平成17年度留学生関連行事

実施月日	行　事　名
４月　１日（金）	学年開始、２年次以上前期授業開始
１日（金）～	４月入学留学生の諸手続き
５日（火）、　７日（木）	特別コースプレースメントテスト
７日（木）	岩手大学入学式
８日（金）～１１日（月）	新入生オリエンテーション
１２日（火）	１年次・編入生授業開始
〃	日本語研修コース開講式
１３日（水）	日本語研修コース前期授業開始
１５日（金）	国際交流科目（日本語）前期授業開始
１５日（金）	外国人留学生オリエンテーション（前期）
１８日（月）	スーパーイングリッシュ（７月８日まで）
２２日（金）	国際交流会館オリエンテーション
〃	ジョージ・シオリス氏講演会
２４日（日）	AVIS４月入学留学生歓迎会
５月１３日（金）	チューター・会話パートナーオリエンテーション（日本人学生）
１８日（水）	国際学生宿舎留学生オリエンテーション
６月　１日（水）	開学記念日
１６日（木）	海外留学オリエンテーション（日本人学生）
２５日（土）	岩手大学公開説明会
７月　６日（水）	岩手県留学生交流推進協議会運営委員会・総会
〃	岩手県留学生推進協議会交流懇談会
２８日（木）	岩手大学長と岩手大学外国人留学生との懇談会
２９日（金）	前期国際交流センター日本語研修コース修了発表会
８月　２日（火）	盛岡さんさ踊り
５日（金）	夏季休業（８／５～９／３０）
１７日（水）～２７日（土）	2005年度韓国群山大学サマープログラム
２２日（月）	アーラム大学SICEプログラム（12月８日まで）
９月　２日（木）、４日（日）	日本留学フェア（釜山、ソウル）
５日（月）～７日（水）	外国人留学生見学旅行（新潟・佐渡）
１５日（木）	前期日本語研修コース及び日本語・日本文化研修コース修了式
１０月　３日（月）	後期授業開始
〃	スーパーイングリッシュ（１２月まで）
４日（月）、６日（水）	特別コースプレースメントテスト
１１日（火）	後期国際交流センター日本語研修コース開講式
〃	国際交流科目（日本語）後期授業開始
１１日（日）～１４日（水）	国連大学グローバルセミナー
１２日（水）	日本語研修コース、日研生コース後期授業開始
１３日（木）	SICEハローパーティ
１４日（金）	外国人留学生オリエンテーション（後期）
１９日（水）	国際交流会館オリエンテーション
２２日（土）～２３日（日）	不来方祭（オープンキャンパス）
〃	ガーデンパーティ
〃	タイ・タマサート大学との交流会
２３日（日）～２９日（土）	中国石河子大学との受入れ・交流
３０日（日）	AVIS10月入学留学生歓迎会
１１月　５日（土）～６日（日）	日本留学フェア（タイ）
１２日（土）～１３日（日）	北東北国立３大学外国人留学生合同合宿研修会（弘前）
１２月２４日（土）	冬季休業（１２／２４～１／１４）
１月　５日（木）～　７日（土）	外国人留学生スキー研修旅行（安比高原スキー場）
２１日（土）～２２日（日）	大学入試センター試験
２月２０日（月）	後期国際交流センター日本語研修コース修了発表会
２５日（土）～２６日（日）	個別学力試験（前期日程）
３月１０日（金）	前期国際センター日本研修コース修了式
１２日（日）～１３日（月）	個別学力試験（後期日程）
１７日（金）	岩手大学長と岩手大学外国人留学生との懇談会
〃	外国人留学生卒業（修了）生送別会
２３日（木）	岩手大学卒業式・修了式
２４日（金）	春季休業（３／２４～３／３１）

外国人留学生集計表（平成17年11月1日現在）

岩手大学

1. 総　数　198 (80) 人

2. 学生種別

学部		人文社会科学部			教育学部			工学部			農学部			国際交流センター			小計			計
		国費	政府	私費	国費	政府	私費	国費	政府	私費	国費	政府	私費	国費	政府	私費	国費	政府	私費	
正規生	学部学生	1 (1)		12 (8)			3 (1)	1	18 (6)	24 (6)			5 (3)				2 (1)	18 (6)	44 (18)	64 (25)
	別科																			
非正規生	研究生	3 (2)		6 (4)	1 (1)		1 (1)	1		3							5 (3)		10 (5)	15 (8)
	日本語研修生													2 (2)			2 (2)			2 (2)
	日研生																			
	科目等履修生			2			2 (2)												4 (2)	4 (2)
	特別聴講学生			3 (3)			3 (3)							1		1	1		7 (6)	8 (6)
小計		4 (3)		23 (15)	1 (1)		9 (7)	2	18 (6)	27 (6)			5 (3)	3 (2)		1	10 (6)	18 (6)	65 (31)	93 (43)
計		27(18)			10 (8)			47			5 (3)			4 (2)			93 (43)			

大学院		人文社会科学研究科			教育学研究科			工学研究科			農学研究科			連合農学研究科			小計			計
		国費	政府	私費	国費	政府	私費	国費	政府	私費	国費	政府	私費	国費	政府	私費	国費	政府	私費	
正規生	修士課程			7 (4)	1 (1)		9 (7)				3 (1)		4 (3)				4 (2)		20 (14)	24 (16)
	博士前期課程							1		16 (2)							1		16 (2)	17 (2)
	博士後期課程							8 (1)		14 (4)				19 (4)	2	15 (5)	27 (5)	2	29 (9)	58 (14)
非正規生	研究生				1 (1)			1			2 (2)						4 (3)			4 (3)
	特別聴講学生						2 (2)												2 (2)	2 (2)
小計				7 (4)	2 (2)		11 (9)	10 (1)		30 (6)	5 (3)		4 (3)	19 (4)	2	15 (5)	36 (10)	2	67 (27)	105 (37)
計		7 (4)			13 (11)			40 (7)			9 (6)			36 (9)			105 (37)			

岐阜連合獣医学研究科	国費	政府	私費
小計	1 (1)		

連合農学研究科配属別内訳（岩手配属　15 名、他大学配属　21 名）

配属別	岩手大学			帯広畜産大学			弘前大学			山形大学			計
経費別	国費	政府	私費	国費	政府	私費	国費	政府	私費	国費	政府	私費	
人数	10 (1)	1	4	4 (2)		7 (4)	4 (1)	1	1	1		3 (1)	
計	15 (1)			11 (6)			6 (1)			4 (1)			36 (9)

3. 国籍別　24 ヶ国　198 人　{1(1)}

アジア 184 (76) 人						アメリカ 6 (1) 人		アフリカ 3 {1(1)} 人		ヨーロッパ 5 (3) 人	
インドネシア	4		バングラデシュ	8	(1)	ブラジル	2 (1)	エジプト	1	アルバニア	1
韓国	9	(4)	フィリピン	3	(2)	ハイティ	1	ザンビア	{1(1)}	ロシア	3 (3)
カンボディア	2		ヴェトナム	1	(1)	アルゼンティン	1	マダガスカル	1	スロヴァキア	1
タイ	3	(1)	マレイシア	22	(7)	グアテマラ	1	ガーナ	1		
中国	124	(55)	イラン	1		アメリカ	1				
スリランカ	1	(1)	モンゴル	5	(3)						
			ミャンマー	1	(1)						

{ }は岐阜大学大学院連合獣医学研究科在籍者で外数　　( )は女で内数

「 」は在留資格「留学」以外の在籍者で外数

4. 経費別

国費	46 (16)	(37 (13))
政府	20 (6)	(19 (6))
私費	132 (58)	(121 (53))
計	198 (80)	(177 (72))

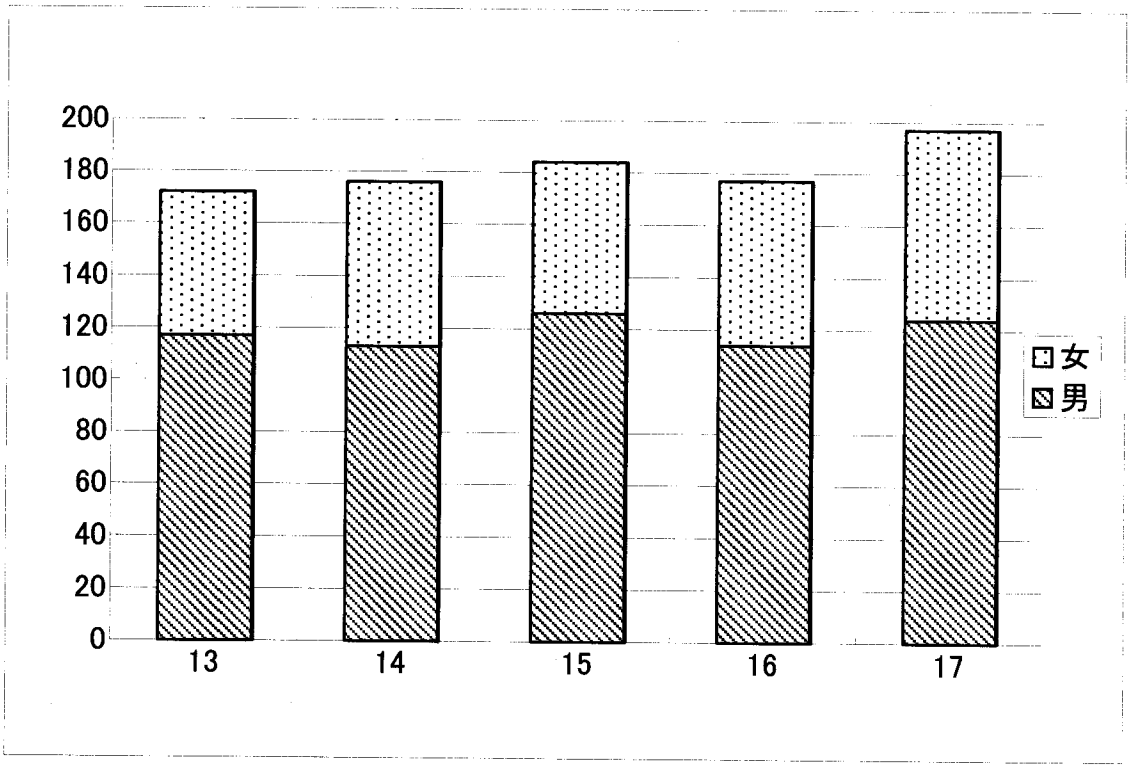
( )は他大学配属除いた数

※工学部
学部学生・国費1名（男）は日韓共同理工系学部学生

過去5年間の男女別留学生数(各年5月1日現在)

年度	13	14	15	16	17
男	117	113	126	114	124
女	55	63	58	63	73
計	172	176	184	177	197

外国人留学生の推移



経費別留学生数

年度	国費	私費			計
		政府派遣	県費	その他	
13	60	11	1	100	172
14	52	15	0	109	176
15	58	21	1	104	184
16	43	18	0	116	177
17	46	22	0	129	197

外国の大学との交流協定

大学間協定 Universities

国名 Country	大学等名 Name of University	初締結年月日 First Date of Agreement	主な交流内容 Contents of Exchanges	
			学術交流 Academic Exchange	学生交流 Student Exchange
中華人民共和国 People's Republic of China	山西大学 Shanxi University	2001.10.11	○	
	曲阜師範大学 Qufu Normal University	2002.9.25	○	○
	北京大学・石河子大学 Peking University ・ Shihezi University	2003.12.5	○	
	西北大学 Northwest University	2003.12.9	○	
	大連理工大学 Dalian University of Technology	2005.5.23	○	
大韓民国 Republic of Korea	国立麗水大学校 Yosu National University	2001.10.17	○	
	明知大学校 Myongji University	2004.7.13	○	○
タイ王国 Kingdom of Thailand	サイアム大学 Siam University	2002.7.2	○	
ロシア連邦 Russian Federation	サンクト・ペテルブルグ国立文化芸術大学 St. Petersburg State Academy of Culture	2000.3.28	○	○
アメリカ合衆国 United States of America	オーバン大学 Auburn University	1998.11.6	○	
	アーラム大学 Earlham College	2003.8.11	○	○
	テキサス大学オースティン校 The University of Texas at Austin	2004.10.20	○	○
カナダ Canada	セント・メアリーズ大学 Sainto Mary's University	2003.7.31	○	○

部局間協定 Faculties

部局名 Faculty in Charge	国名 Country	大学等名 Name of University	初締結年月日 First Date of Agreement	主な交流内容 Contents of Exchanges	
				学術交流 Academic Exchange	学生交流 Student Exchange
教育学部 Education	中華人民共和国 People's Republic of China	北京大学哲学系（宗教学系） Peking University Department of Philosophy(Religion)	1998.8.21	○	
		清華大学中文系 Tsinghua University of chinese Languages & Literature	2000.12.15	○	○
		寧波大学外語学院 Ningbo University the Faculty of Foreign Languages	2004.3.17	○	○
	アメリカ合衆国 United States of America	ノース・セントラル・カレッジ North Central College	2002.9.6	○	○
	カナダ Canada	ブリティッシュ・コロンビア大学 The University of British Columbia	2001.7.17	○	
工学部 Engineering	中華人民共和国 People's Republic of China	西安建築科技大学 Xian University of Architecture and Technology	1999.6.25	○	
		中国科学院地理科学与資源研究所 Institute of Geographical Sciences and Natural Resources, Chinese Academy of Sciences	2000.2.24	○	
		西安交通大学理学院 Xian Jiaotong University of school of science	2001. 5.30	○	

		中国科学院蘭州化学物理研究所 Lanzhou Institute of Chemical Physics, Chinese Academy of Sciences	2002. 9. 26	○	
		北京大学化学与分子工程学院 Peking University College of Chemistry and Molecular Engineering	2003. 3. 19	○	
		新疆農業大学 Xinjiang Agricultural University	2003. 11. 11	○	
		華南理工大学 South China University of Technorogy	2004. 7. 6	○	
		新疆大学機械工程学院 Xinjiang University college of Mechanical Engineering	2004. 7. 19	○	
	大韓民国 Republic of Korea	ハンバット大学校新素材工学部 Hanbat National University, Division of Advanced Material Engineering	1999. 3. 19	○	
		韓国原子力エネルギー研究所 Korea Atomic Energy Research Institute (KAERI)	2006. 1. 24	○	
	タイ王国 Kingdom of Thailand	チュラロンコン大学 Chulalongkorn University	2002. 1. 10	○	
	ﾊﾞﾝｸﾞﾗﾃﾞｼｭ人民共和国 People's Republic of Bangladesh	ﾊﾞﾝｸﾞﾗﾃﾞｼｭ工科大学工学部 Faculty of Engineering, Bangladesh University of Engineering and Technology	2003. 12. 23	○	
	ドイツ連邦共和国 Federal Republic of Germany	デュッセルドルフ大学 Heinrich Heine University of Dusseldorf	1999. 8. 30	○	
		ﾌﾗｳﾝﾎｰﾌｧｰ非破壊検査技術研究所 Fraunhofer-Institute for Nondestructive Testing	2004. 3. 12	○	
	フランス共和国 Republic of France	ピエール・エ・マリーキューリ大学 Pierre & Marie Curie University	1997. 4. 19	○	
	ポーランド共和国 Republic of Poland	ポーランド科学アカデミー Polish Academy of Science	1995. 3. 3	○	
農学部 Agriculture	中華人民共和国 People's Republic of China	吉林農業大学 Jilin Agricultural University	1986. 9. 13	○	○
	アメリカ合衆国 United States of America	パデュー大学 Purdue University. School of Agriculture	1996. 4. 4	○	○
地域連携推進センター Center for Regional Collaboration in Research and Education	中華人民共和国 People's Republic of China	上海高分子材料研究開発センター Shanghai Research and Development for Polymeric Materials	2001. 3. 1	○	
	大韓民国 Republic of Korea	慶北大学校トライボロジー研究所 Engineering Tribology Research Institute Tyungpook National University	1996. 5. 31	○	
		成均館大学校技術革新センター Technology Innovation Center, Sungkyunkwan University	2000. 6. 23	○	
		東亜大学校産学協力研究センター Center for Cooperative Research and Development Dong-A University	2002. 3. 25	○	
		ハンバット大学校産学協力総合センター Hanbat National University Cooperative Research Center	2002. 10. 23	○	

平成17年度岩手大学海外派遣・留学プログラム一覧

プログラム名	派遣先	約	派遣国	協定の有無	目的	単位認定	派遣時期	派遣期間	個人負担経費	担当学部
*サンクト・ペテルブルグ交換留学プログラム	サンクト・ペテルブルグ国立文化芸術大学	人社2～4年生・院生	ロシア	あり	交換留学	あり	4月または9月より	3ヶ月～1年間	約80万円	人文社会科学部
英語研修	セントラル・ミシガン大学	全学	米国	なし	英語研修	あり	8月25日～9月28日	5週間	実費負担	人文社会科学部
	ビクトリア大学英語研修センター	全学	カナダ	なし		あり	8月頃	3週間	約45万円	
	ブリティッシュ・コロンビア大学英語研修センター	全学	カナダ	なし		あり	3月または8月～9月	28日間	約45万円	
モナシュ大学英語研修	モナシュ大学英語研修センター	全学	オーストラリア	なし		あり	3月と8月頃	5週間	約45万円	
リバプール大学科目研修	リバプール大学文学部英語学科(TESL中心)	人社	イギリス	なし	科目研修	なし	4月～	1年間	約200万円	
国語科実地研修	国語の教科書に出てくる場所など	教育	中国		現地見学	あり	3月頃	10日間	実費負担	教育学部
短期中国語研修	清華大学	全学	中国	あり	中国語研修	なし	8月頃	1ヶ月	約20万円(旅費含)	
日本語教育実習	清華大学	教育	中国	あり	日本語教育実習	あり	3月頃	2週間	約15万円(旅費含)	
*短期派遣	清華大学	教育	中国	あり	交換留学	あり	8月頃	1年間	生活費	教育学部
	曲阜師範大学	教育	中国	あり		あり	8月頃	1年間	生活費	
	吉林農業大学	農学	中国	あり		あり	8月頃	1年間	約24万円	農学部
	テキサス大学オースティン校	全学	米国	あり		あり	8月頃	1年間	生活費	国際交流センター
	アーラム大学	全学	米国	あり		あり	8月頃	1年間	生活費	国際交流センター
	セント・メアリーズ大学	全学	カナダ	あり		あり	8月頃	1年間	生活費	国際交流センター
国際研修	モナシュ大学英語研修センター	工学(応化2年生)	オーストラリア	なし	英語研修	あり	8月頃	4週間	約33万円	工学部
パデュー大学学生派遣	パデュー大学	農学	米国	あり	交換留学	なし	8月頃	1ヶ月	625ドルと旅費農学部より1人5万円補助	農学部

＊ 表示のプログラムは協定校との交換プログラムなので、岩手大学で授業料を払えば、派遣先での授業料免除と月額8万円の奨学金(大学から推薦され、採用された場合)がつきます 。休学した場合は、単位認定はされません。

平成17年度海外学生派遣実績

	短期語学・文化研修 （部局名は主催部局）	長期派遣（半年～1年）	インターンシップ
人文社会科学部	オーストラリア 2 カナダ 13 韓国 2	米国 1 カナダ 2	
教育学部	中国 13	米国 3 中国 2 韓国 1	
農学部	米国 4	中国 1	
工学部	オーストラリア 15		中国 3
国際交流センター	中国 5		

岩手大学留学生地域派遣実績一覧（平成17年度）

派遣先	派遣日程	交流児童・生徒数	派遣留学生数(含家族)	参加者の国籍	交流の内容
紫波町国際交流協会	4月27日	35	3	ザンビア・カザフスタン・ロシア	文化紹介
地球市民の会	4月29日	70	30	不明	花見・ハイキング交流
日本語交流室「じょい」	4月	22	4	中国・バングラデシュ	花見・文化交流
スマトラ地震救援ライブ	5月5日	100	3	インドネシア	その他
ダーナの輪の会	5月18日	300	1	タイ	講演会支援
見前南小学校	6月20日	98	3	インドネシア・バングラデシュ	文化紹介
黒沢尻東小学校	6月25日	50	10	中国・モンゴル・マレーシア・中国ウィグル・バングラデシュ	文化紹介
個人	7月～	1	1	タイ	語学学習
留学生ガーデンパーティ	7月2日	150	50	中国・韓国・マレーシア・バングラデシュ・アルゼンチン・タンザニア・ガーナ・グアテマラ・ウルグアイ・米国・ブラジルなど	交流
岩手県立大学	7月5日	2	2	中国・韓国	文化紹介
小軽米中学校	7月8～10日	61	5	インドネシア・バングラデシュ・ロシア・カザフスタン・米国	英語教育・文化紹介
地球市民の会キャンプ・バスツアー	7月17～18日	22	15	中国・台湾・南アフリカ・ウルグアイ・タンザニア・ガーナ・ロシア	交流
川井村教育委員会	7月20～22日	91	1	韓国	通訳
不来方高校	7月26～27日	26	1	マダガスカル	語学学習
県立児童館いわて子どもの森	7月30日	7	1	マレーシア	料理交流
個人	8月	1	1	米国	語学学習
河北小学校	8月1日	1	1	タンザニア	タンザニア事情
ホストファミリー	8月19～21日	30	10	韓国	文化紹介
東松園小学校	8月24日	127	10	韓国	文化紹介
緑ヶ丘4丁目町内会	8月26日	15	5	アルゼンチン・タンザニア・中国・マレーシア	文化紹介
祝賀会	8月28日	100	2	中国・中国ウィグル	文化紹介
厨川中学校	8月30日	6	2	米国・中国	文化紹介
老人大学	8月30日	30	1	ガーナ	文化紹介
個人	9月～2月	1	1	米国	語学学習
松園中学校	9月8日	9	3	韓国・米国	文化紹介

平舘高校	9月26日	24	1	中国	文化紹介
岩手県体育協会	9月30日～10月6日	175	7	中国・韓国	韓国語通訳
下橋中学校	10月10日	280	2	マダガスカル・インドネシア	パネルディスカッション発表者
岩手大学附属養護学校	10月11日	10	6	インドネシア・バングラデシュ・グアテマラ	交流
岩手大学附属養護学校	10月13日	10	5	インドネシア・米国・ロシア・ブラジル	交流
滝沢村公民館	10月13日	10	4	バングラデシュ・中国・グアテマラ	文化紹介
留学生秋のガーデンーパーティ	10月22～23日	50	30	中国・中国ウィグル・ロシア・韓国・マレーシア・バングラデシュ・米国・アルゼンチン・グアテマラ・タイなど	文化紹介
もりおか老人大学上田分校	10月25日	30	1	ロシア	文化紹介
黒沢尻東小学校	11月5～6日	40	9	中国・米国・ロシア・モンゴル・韓国	交流
平舘高校	11月7日	24	1	ロシア	文化紹介
盛岡女子高校	11月8日	156	5	韓国・グアテマラ・ロシア・フランス・中国	語学学習
滝沢村公民館	11月12日～12月3日	20	2	ブラジル	文化紹介
城北小学校	11月22日	30	6	バングラデシュ・中国・マレーシア	文化紹介
太田小学校	11月25日	44	4	バングラデシュ・ブラジル・中国	文化紹介
盛岡ゾンタクラブ主催日本語スピーチコンテスト	11月25日	100	5	米国・中国・中国ウィグル・バングラデシュ	スピーチ・交流
城南小学校	11月28日	80	1	インドネシア	文化紹介
宮古市山口小学校	11月30日	136	6	バングラデシュ・中国・韓国・グアテマラ	文化紹介
岩手大学附属養護学校	12月5～7日	15	10	タイ・バングラデシュ・ブラジル・インドネシア・中国・マレーシア	料理交流
滝沢村公民館	12月8日	10	3	バングラデシュ・中国・アルゼンチン	文化紹介
永井小学校	12月14日	116	2	中国・ロシア	文化紹介
日本語交流室「じょい」	12月	24	11	中国・バングラデシュ	文化交流
新春餅つき会	1月3日	40	18	インドネシア・中国・韓国・中国ウィグル・バングラデシュ	交流
岩手大学附属養護学校	1月17日	15	5	ブラジル・グアテマラ・中国・マレーシア	交流
遠野市宮守中学校	1月20日	135	10	フィリピン・ブラジル・韓国・米国・ロシア・インドネシア・バングラデシュ・中国ウィグル	文化紹介
盛岡女子高校	1月26日	122	5	中国・グアテマラ・マダガスカル・韓国	語学学習・文化紹介
好摩小学校	1月27日	22	1	バングラデシュ	文化紹介
平和集会	1月28日	100	1	中国	パネリスト

大慈寺小学校	2月14日	33	3	中国・韓国・米国	文化紹介
北松園中学校	2月21日	140	28	中国・中国ウィグル・米国・ロシア・アルゼンチン・韓国・インドネシア	文化紹介
日本語交流室「じょい」	2月	21	8	中国・バングラデシュ・エジプト	文化紹介
のべ参加人数		3367	366		

（担当：岡崎正道・尾中夏美）

執筆者一覧

堀江皓(ほりえ　ひろし)	岩手大学国際交流センター長(工学部教授)
岡崎正道(おかざき　まさみち)	岩手大学国際交流センター教授(教育部門長)
尾中夏美(おなか　なつみ)	岩手大学国際交流センター助教授(国際企画部門長)
小笠原洋光(おがさわら　ひろみつ)	前岩手大学国際交流センター助教授
松岡洋子(まつおか　ようこ)	岩手大学国際交流センター助教授
中村ちどり(なかむら　ちどり)	岩手大学国際交流センター助教授
平原英俊(ひらはら　ひでとし)	岩手大学工学研究科助教授

岩手大学国際交流センター報告第 2 号

2006 年 7 月発行

編集・発行　岩手大学国際交流センター (Iwate University International Center)

〒 020-8550　岩手県盛岡市上田 3 丁目 18 番 34 号

Tel 019-621-6290 ／ Fax　019-621-6297

IUIC

Iwate University International Center